長岡京市文化財調査報告書

第15冊

1985

長岡京市教育委員会

長岡京市文化財調査報告書

第１５冊

１９８５

長岡京市教育委員会

序　　文

1984年11月11日は本市をはじめとする乙訓二市一町にとって意義深い日でありました。この長岡の地に奈良の平城京から都がうつされて1200年目にあたる記念すべき日であり，その記念事業として記念式典や遷都行列等が多くの市民の参加により盛大に行われました。

本市におきましても，この遷都1200年記念の関連単独事業として，歴史講演会や文化財展等を実施し，1200年前の長岡京や先人の偉業を市民ぐるみで想い起こしました。また，埋蔵文化財調査センター建設に着手し，昭和60年度中にオープンを予定しております。この施設が完成すれば，すでに昭和57年に発足しております財団法人長岡京市埋蔵文化財センターの業務と併せて，埋蔵文化財行政の充実が一層図れると確信しております。

他方，本市では，昭和60年度は21世紀を展望した新総合計画の実施初年度にあたります。この新総合計画は「緑豊かな自然と心ふれあう長岡京」を基本理念として，５つの将来像を設定しています。その中の１つとして〝さまざまな文化に出会える成熟したまち〟があり，今後はこの将来像を目ざして文化財行政を充実し，推進させていく所存でございます。

本書は，当教育委員会が昭和59年度に直接実施した埋蔵文化財調査報告書であり，内容としましては，長法寺南原古墳第５次調査及び長岡京跡・勝龍寺城土塁跡調査であります。長岡京の遷都前と遷都後の本市を理解する上で貴重な成果を得ることができました。今後これらの調査成果をもとに，広く市民が本市の歴史を理解できるよう，文化財行政を推進する考えでございます。

最後になりましたが，調査実施にあたって種々ご協力いただきました諸先生，土地所有者ならびに関係各位に心より厚くお礼申しあげます。

昭和60年３月

長岡京市教育委員会

教育長　湯　浅　成　治

凡　　例

1．本冊は，昭年59年度に長岡京市教育委員会が国庫補助事業として実施した長法寺南原古墳及び長岡京跡の発掘調査の概要報告である。

2．上記の調査地は付表1のとおりである。その位置は第1図に示した。

3．長岡京跡の調査地の次数は，長岡京跡左京，長岡京跡右京ごとに通算したものである。調査地区名は，高橋美久二「長岡宮跡昭和51年度発掘調査概要」（京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報（1977）』昭和52年）による小字名をもとにした地区割に従った。

4．長岡京内の条坊名は，山中章他「第126図長岡京条坊図」（向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財調査報告書』第8集　1982年）による呼称に従った。

5．各調査報告の執筆者は，各章のはじめまたは文末に記した。

6．発掘調査の実施にあたっては，京都府教育委員会，（財）長岡京市埋蔵文化財センター，京都文教短期大学教授中山修一，奈良女子大学助教授村田修三，（財）京都市埋蔵文化財研究所調査部長田辺昭三，京都市埋蔵文化財センター所長浪貝毅，立命館大学教授山下雅義の各氏には多大なる協力を得た。

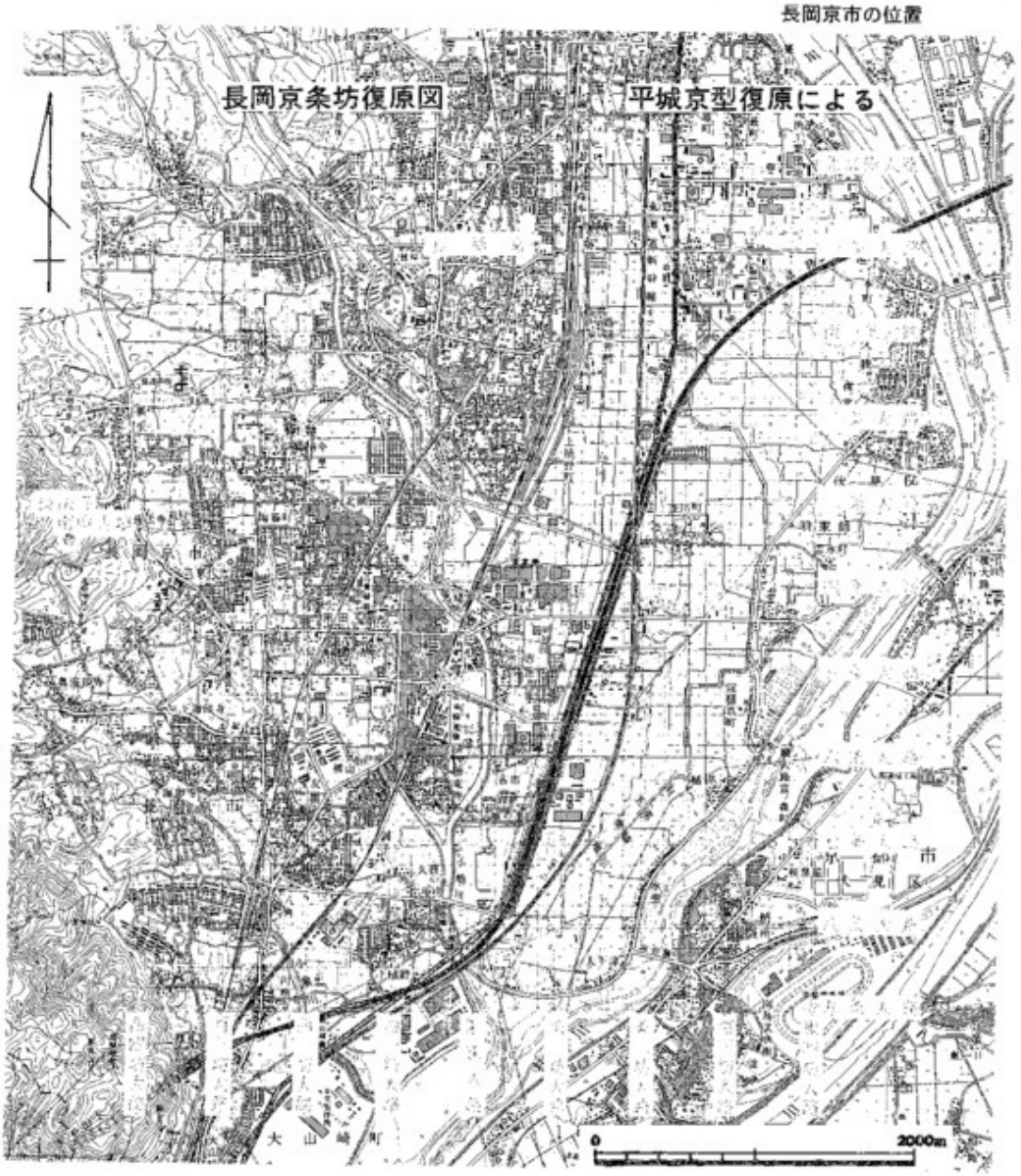
7．本書の編集は長岡京市教育委員会社会教育課　中尾秀正が担当した。

付表－1　本書報告調査一覧表

調査次数	地区名	所在地	所有者	調査期間	調査面積	備考
長法寺南原古墳第5次調査		長岡京市長法寺南原9番地ほか	藪内　治作 藤下清一郎	1984．7．16 ～1984．8．10	150㎡	
長岡京跡右京第163次調査	7ANMKI	長岡京市東神足二丁目15	㈱ハヤシ建設工業	1984．5．25 ～1984．8．30	803㎡	勝龍寺城跡 神足遺跡 神足古墳
長岡京跡右京第164次調査	7ANITT－9	長岡京市今里四丁目3－4	㈱丸義製作所	1984．5．25 ～1984．6．5	28㎡	今里遺跡 今里車塚古墳

第１図　本書報告調査地位置図

長岡京市の位置



目　　次

序……i
凡例……ii

第1部　長法寺南原古墳第5次調査概要

第1章　調査経過……1
第2章　検出遺構……3
第3章　出土遺物……7
第4章　南原古墳周辺の調査……11
1　周辺部の地形測量と試掘調査　　2　出土遺物
3　東1号墳と東2号墳
第5章　総括……16

第2部　長岡京跡調査概要

第1章　長岡京跡右京第163次（7ANMKI地区）調査概要……17
（勝竜寺城・神足遺跡・神足古墳）
1　はじめに　　2　歴史的環境と調査経過
3　検出遺構　　4　まとめ
第2章　長岡京跡右京第164次（7ANITT－9地区）調査概要……59
（今里遺跡・今里車塚古墳）
1　はじめに　　2　調査経過　　3　検出遺構
4　出土遺物　　5　まとめ

図　版　目　次

長法寺南原古墳第５次調査

図版　1　前方部発掘区（南から）
図版　2　(1)　前方部発掘区（北から）　(2)　前方部東斜面（北東から）
図版　3　(1)　前方部墳頂部土壙　(2)　前方部墳頂部土壙（拡大）
図版　4　(1)　前方部埴輪出土状態　(2)　前方部東斜面の柱穴（南から）
図版　5　(1)　東２号墳全景（南から）　(2)　東２号墳断面（南から）
図版　6　(1)　東２号墳断面（北から）　(2)　東２号墳断面（南から）
図版　7　円筒埴輪ヒレ部
図版　8　(1)　円筒埴輪破片　外面　(2)　円筒埴輪破片　底部内面
図版　9　(1)　円筒埴輪破片　口縁部　(2)　円筒埴輪破片　ヒレ上端部
図版　10　(1)　円筒埴輪破片　突帯下の刺突　(2)　円筒埴輪破片　方形透孔
図版　11　(1)　朝顔形円筒埴輪　壺口頸部　(2)　胎土の異なる埴輪片
図版　12　(1)　東２号墳の円筒埴輪破片　(2)　東２号墳の円筒埴輪と形象埴輪

長岡京跡右京第163次（７ＡＮＭＫⅠ地区）調査

図版　13　勝龍寺城周辺から山崎天王山・八幡男山を望む（北から）
図版　14　(1)　調査対象地全景（南から）　(2)　調査前土塁ＳＡ16301（南から）
図版　15　(1)　土塁・空堀部分試掘状況（南から）　(2)　土塁・空堀発掘状況（南から）
図版　16　(1)　調査前土塁ＳＡ16301（南東から）　(2)　第６トレンチ中・近世遺構検出面（南東から）
図版　17　(1)　調査前空堀ＳＤ16302（東から）　(2)　空堀ＳＤ16302完掘状況（東から）
図版　18　(1)　調査前空堀ＳＤ16302東端部（南東から）　(2)　第５トレンチ発掘状況（南東から）
図版　19　(1)　調査前土塁ＳＡ16303（南西から）　(2)　土塁ＳＡ16303試掘状況（南西から）
図版　20　(1)　調査前土塁ＳＡ16303（東から）　(2)　第５トレンチ全景（東から）
図版　21　(1)　神足古墳（南から）　(2)　神足古墳・土塁ＳＡ16303断面（南から）

図版　22　(1)　神足古墳主体部副葬土器検出状況（東から）　(2)　神足古墳主体部副葬土器検出状況（東から）

図版　23　神足古墳主体部遺物出土状況

図版　24　(1)　弥生時代溝ＳＤ16309遺物出土状況（南から）　(2)　溝ＳＤ16309弥生土器出土状況　(3)　弥生時代土壙ＳＫ16308遺物出土状況　(4)　土壙ＳＫ16308石剣出土状況

図版　25　(1)　土塁ＳＡ16303試掘９トレンチ（東から）　(2)　試掘９トレンチ出土ピットＰ16312礎石（北から）

長岡京跡右京第164次（７ＡＮＩＴＴ－９地区）調査

図版　26　(1)　調査地遠景（西から）　(2)　調査地全景（北から）

挿 図 目 次

第 1 図　本書報告調査地位置図…… iii

長法寺南原古墳第 5 次調査

第 2 図　調査位置図…… 1
第 3 図　後円部の現状…… 2
第 4 図　発掘作業風景…… 2
第 5 図　墳丘復原図と発掘区画…… 3
第 6 図　前方部東斜面の土層堆積…… 4
第 7 図　前方部東クビレ部全体図…… 5
第 8 図　前方部発掘区南端の土壙…… 6
第 9 図　前方部北端の土壙（北西から）…… 6
第 10 図　前方部北端の土壙　拡大…… 6
第 11 図　土師器片写真…… 7
第 12 図　土師器実測図…… 7
第 13 図　埴輪実測図（1）…… 8
第 14 図　埴輪実測図（2）…… 9
第 15 図　南原古墳丘陵東斜面地形図……12
第 16 図　東 2 号墳の断面図……13
第 17 図　東 2 号墳出土埴輪……14
第 18 図　南原古墳周辺地形図……15

長岡京跡右京第163次（7ANMK I 地区）調査

第 19 図　調査位置図……17
第 20 図　調査地周辺地形図……19
第 21 図　試掘トレンチ配置図……21
第 22 図　勝龍寺城関連遺構と地形図……23
第 23 図　神足遺跡関連遺構と神足古墳……25
第 24 図　第 1 トレンチ東壁土層図……26

第 25 図　溝ＳＤ16305土層図……28
第 26 図　第２・３・４トレンチ遺構配置図……29
第 27 図　土壙ＳＫ16308 ……32
第 28 図　第５トレンチ西部・第６トレンチ遺構配置図……33
第 29 図　第６トレンチ・試掘４・７・８トレンチ土層図……35
第 30 図　第５トレンチ東部・試掘９トレンチ遺構配置図……39
第 31 図　第５トレンチ・試掘９・13トレンチ土層図……41
第 32 図　神足古墳主体部ＳＫ16307 ……43
第 33 図　神足遺跡周辺図……45
第 34 図　山城国西岡御領知之地図……48
第 35 図　明治時代の地図と古道……49
第 36 図　大正時代の地図に表された勝龍寺城……51
第 37 図　現地形と勝龍寺城……53
第 38 図　永井氏の勝龍寺城改築計画図……55

長岡京跡右京164次（７ＡＮＩＴＴ－９地区）調査

第 39 図　調査位置図……59
第 40 図　調査地周辺図……60
第 41 図　検出遺構図……61
第 42 図　出土遺物実測図……62

付　表　目　次

付表－１　本書報告調査一覧表……ii

第1部　長法寺南原古墳

第5次調査概要

第1章　調　査　経　過

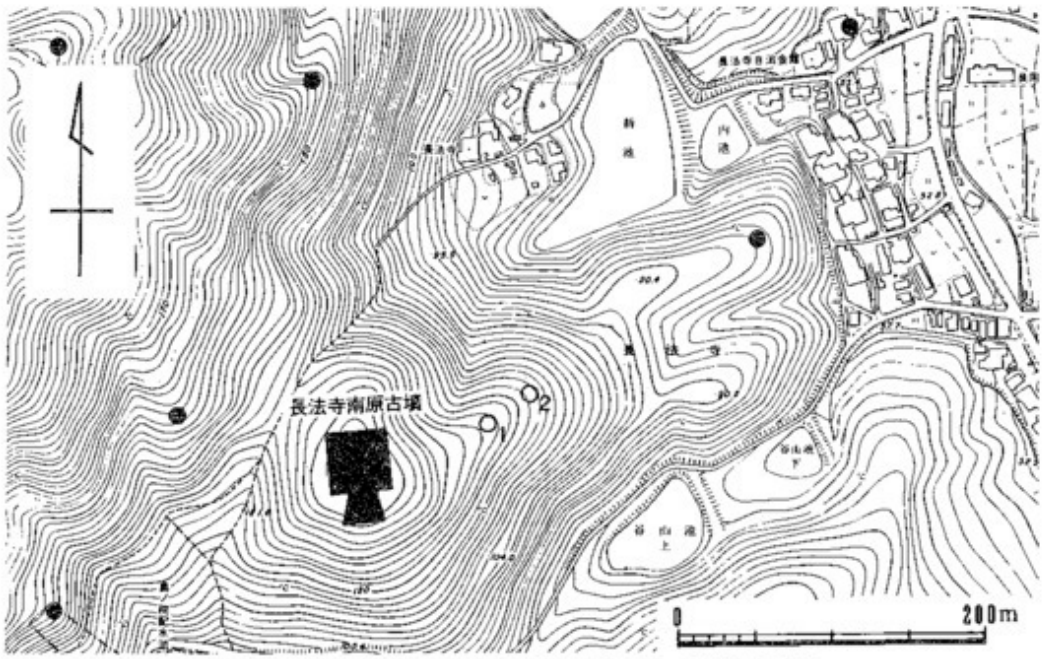
調査の目的と性格　本報告は長岡京市長法寺南原9番地ほかにある長法寺南原古墳の第5次調査の概要を示すものである。調査は1984年7月16日から同年8月10日の25日間にわたって実施した。

長岡京市教育委員会は本古墳の保存整備実施のための基礎資料を得るために，1982年度以来，国庫補助を受けて本古墳の調査を継続してきた。今回はその3回目にあたり，第2次大戦前の京都府による調査（担当，梅原末治）から数えて第5次調査にあたる。過去2回にわたり本市が実施した，これまでの調査の要点を示すと次の如くになる。

1982年：墳丘形態の確認を目的として，墳丘裾のトレンチ調査と崩壊個所の断面調査を実施。その結果，本古墳が前方後方墳である可能性が強くなった。(1)

1983年：前年度の成果にもとずき，後方部の東南部と東北部との2個所を面的に広く発掘し，その結果，前方後方形であることを確認するとともに，墳丘裾部をめぐる溝が後方部東南隅の一個所において連続せず，ここに墓道状の陸橋部の存在することが判明した。(2)

今回の調査は，前方部の墳頂部における埋葬施設の有無の探索，及び，前年の調査の西半分つまり東側クビレ部における前方部の形状の把握を主たる目的とした。また南原古墳のすぐ東



第2図　調査位置図　1　南原東1号墳，2　南原東2号墳

第3図　後円部の現状

第4図　発掘作業風景

側の斜面で埴輪片を採集したので，この埴輪の性格の解明および，この地点における別の古墳の存否を検討した。

なお，前年度に検出した後方部東南隅の陸橋部の南端の調査を予定していたが，筍栽培の地力回復の必要から，この部分の調査については今回は見合わせることとした。

調査参加者と役割分担　調査は大阪大学文学部助教授都出比呂志を担当者とし，調査補助員として，主として大阪大学文学部の大学院生，文学部の学生および大阪大学考古学研究会の学生があたった。参加者は次のとおりである。

福永伸哉，西本昌弘，青谷尚美（大阪大学大学院生），黒石哲夫，武田章（文学部聴講生），浅田博之，岡村勝行，田中理恵子，藤田友紀子（文学部4回生），岡本浩，北尾悟，古谷美奈，小柳泰之，滝本玲子，堤和博，中村良一，野村博，平岡敬規，松本みゆき，森島康雄，山中洋（文学部3回生），大和田淳司（法学部），伊藤茂，浦田孝之，鹿野正人，北川哲也，竹中郁，中西規之，西森正徳，吉田耕（大阪大学考古学研究会），森明彦（関西大学大学院生）。

遺構の検出と実測とには，ほぼ調査者全員があたったが，遺物の整理・実測・製図などについては，上記のうち福永，青谷，古谷，野村，平岡，松本，森島，山中が主として従事した。

本報告の執筆および写真撮影は都出が担当した。

謝　辞　調査に際しては，今回も多くの人々の御援助を受けた。土地の所有者藪内治作氏および藤下清一郎氏は調査を快諾されたのみならず，長尾敬三氏とともに作業員の仕事を担当された。古墳に近い天台宗長法寺住職川西寂紹氏は調査に際し，数々の便宜を与えられ，子守勝手神社総代会は調査団の宿泊のため社務所を貸与された。これら上記の御好意と御援助に深く感謝する。

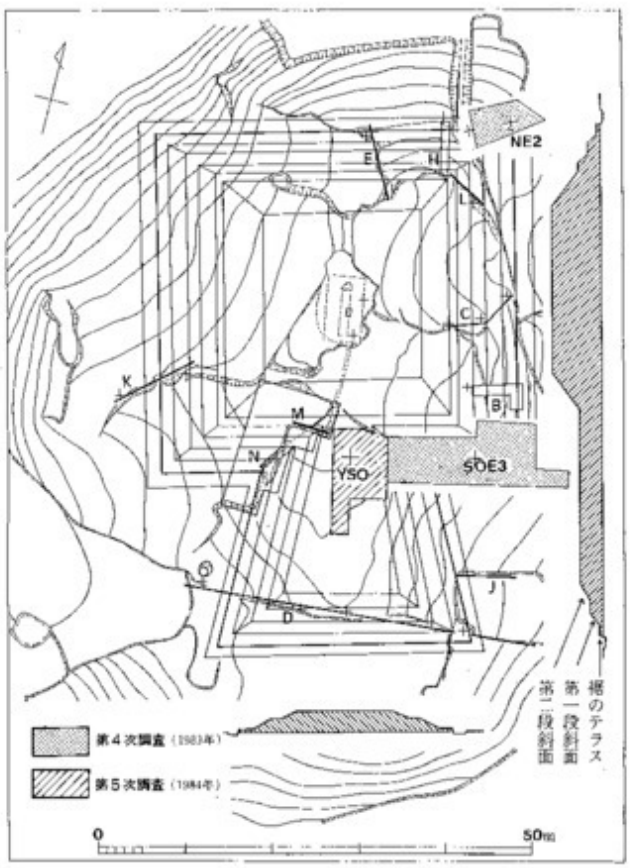
第2章　検　出　遺　構

発掘区の設定と土層観察　前方部墳頂部の遺構の有無と墳丘斜面の段築成原理とを解明するために，前方部北端から中央部および東斜面をカバーしうる発掘区を設定した。すなわち，基準点ＹＳＯから東と北にそれぞれ４ｍ，西に２ｍの方形区画を設け，この区画内に２ｍ方眼のグリッドを設定した。前年度調査の東クビレ部の西に接する区域にあたるわけである。また，この方形区画の南部については，さらに幅２ｍにわたり長さ４ｍの拡張区を設けた（図版１，第５図，第７図）。

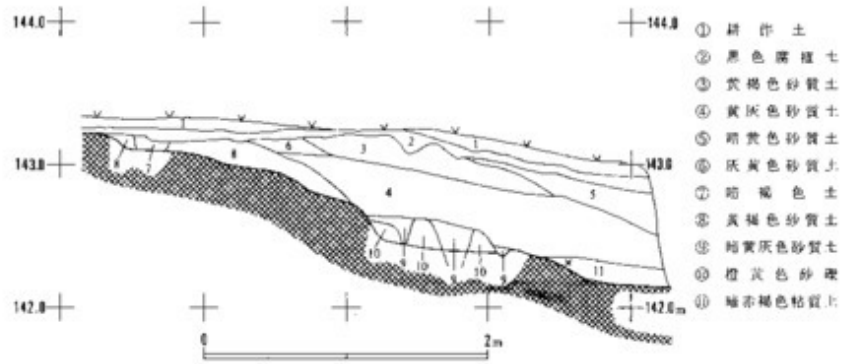
調査者としては，埋葬施設などの遺構の検出のために，さらに南部に調査区を延長したかったが，筍栽培のための地力回復の必要から，今回は調査面積をこの範囲に限定せざるを得なかったのである。

さて，筍栽培に伴う厚さ約１ｍの盛土を除去すると黒色腐植土が発掘区全体を覆っていた。これまでの他の地点の所見を基礎にすると，この黒色土は竹藪開墾以前の旧地表であり，したがって黒色土の覆う範囲は開墾による破壊を免れていることが判明している。

この黒色土層中およびその上面において，配石を検出した。すなわち，ＹＳＯ地点を中心に，その北に３個の石が，ほぼ１ｍ間隔に東西に並び，さらに，その南にも２個の石があった。うち１個は北側の３個の石の中央のものから南に1.3ｍである。それぞれの石は人頭大の自然石であるが，平坦面を上にして置いていることから小建築の礎石と考えうる。配石の中央に焼土と近代の陶磁器片があったが，土地所有者藪内治作氏の記憶によれば，竹藪開墾以前に，この付近に作業小屋があったというから，その当時のものと考えてよかろう。



第５図　墳丘復原図と発掘区画



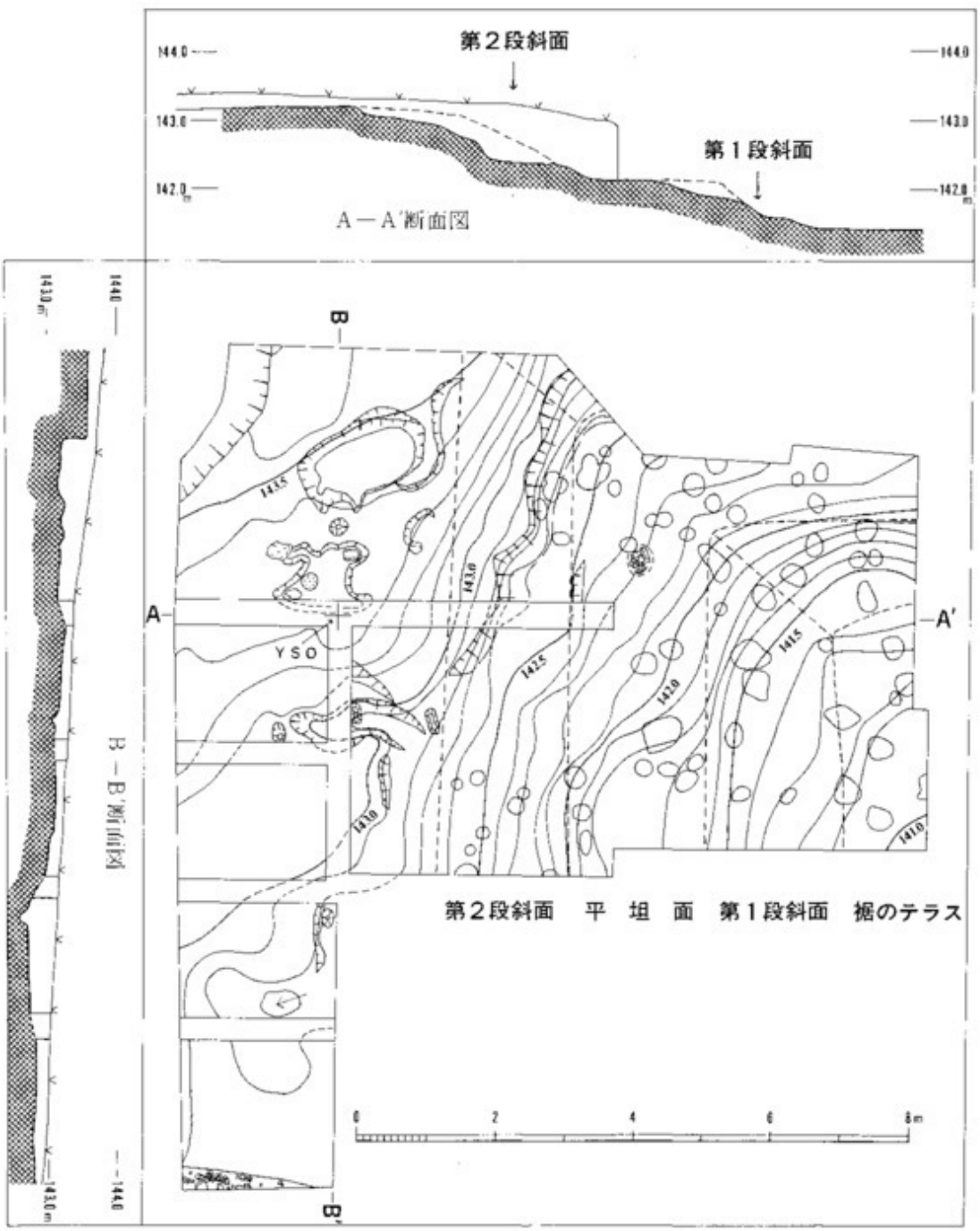
第6図　前方部東斜面の土層堆積

中世の柱穴群　墳頂部中央から東斜面にかけて，柱穴群を検出した。いずれも直径20～30cmの小規模なものである（第7図）。前年度の，この東に接する調査区における所見と同じく，地山直上に堆積した厚さ約20cmの堆積土の上面から掘り込んでいるが，この堆積土上面には埴輪片と瓦器片とを含むことが，前年度までの調査で判明しているので，中世の建物の柱穴と考えられる。柱穴は古墳の主軸線を境にして，その西側では検出されないことから，建物は東クビレ部に占地していたと考えられる。

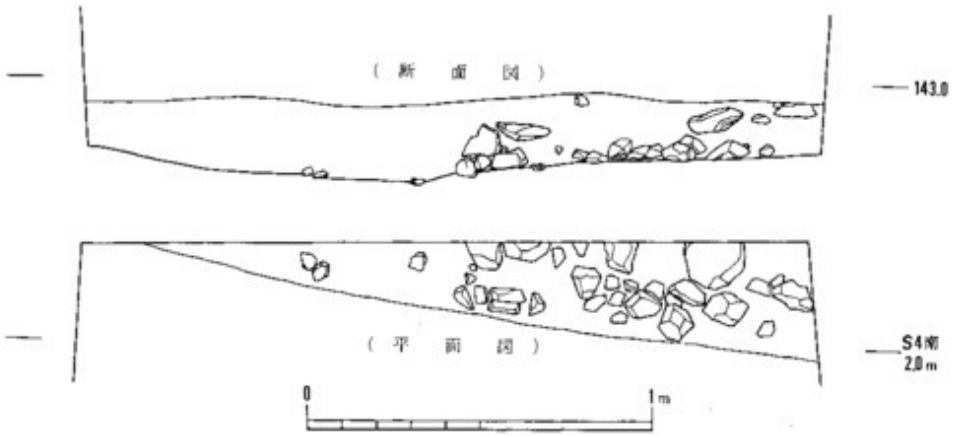
前方部北端の土壙　基準点ＹＳＯの北２ｍの地点で，土壙一基を検出した。隅円長方形を呈し，規模は上面で長さ1.9ｍ，幅1.0ｍであり，土壙底の長さ1.5ｍ，幅0.8ｍである。長軸の方向は東北～南西の方向をとる。黒色土を除去した面で検出したことから，竹藪開墾以前の遺構である。土壙は地山層を掘り込んでいるが，この土壙を古墳築造時のものと考えるか，黒色土層直下で検出される中世の柱穴群と同時期の遺構とするか判定は困難である。しかし土壙内充填の土が地山土と比べて，かなり汚れていること，また土壙の長軸方向が墳丘主軸方向とずれることから，古墳とは直接かかわらない遺構と推定する（第7図，第9図，第10図）。

南端部の土壙　南部拡張区の南端において，礫を充填した土壙の落ち込み上面ラインを検出した（図版3，第7図，第8図）。発掘区画の東西基準線と約15度の角度に傾く方向のラインである。これが土壙の上面と考えられるが，発掘区内において長さ約２ｍにわたっている。土壙内には礫が充填されており，石材は５～20cm大のチャート，緑色岩などからなっており，第３次調査の際に排水溝内充填物として検出した石材と同じである。

この土壙の掘り込みは黒色土の直下で，かつ地山直上に盛土した黄褐色土の上面から始まっている。この黄褐色土は，第３次調査時に観察された，前方部南端崖面のＤセクションの地山直上の盛土層に類似する。第７図の南北方向断面図（Ｂ－Ｂ′）を見ると，地山上面のレベルはＹＳＯの南４ｍ付近で急に20cmほど落ち込み，標高142.8ｍを示すが，前方部南端Ｄセクションの地山標高は142.1ｍを示すので，地山上面の傾斜は，平均約20分の１勾配で南に低いことが判明する。したがって，前方部墳頂を水平に整えるために，前方部墳頂部の南半分を盛土し



第７図　前方部東クビレ部全体図（100分の１）



第8図　前方部発掘区南端の土壙

たものと考えられる。

第8図の側面図において，標高142.9m付近に水平に走る線が盛土の上面であり，この面から約15cmほど掘り下げた断ちわり部の横断面が，第8図に示されていることになる。

さて，以上の土壙は前方部墳頂南半部の墳丘中軸線上にのっていることから，竪穴式石室あるいは粘土槨などを収容する墓壙となる可能性は極めて高い。前方部南端崩壊部崖面まで，約10mの余裕を残しているから，南北方向に長軸をもつ埋葬施設をも収容しうる広さである。この遺構の性格の解明は次年度以降の課題としたい。

前方部墳丘の段築成　前年度の第4次調査によって，第1段斜面部は，裾が標高141.0m付近を走ることが判明したが，今回の調査によって，第2段斜面の裾部は標高142.1m付近にあることを確認した。墳頂部標高は発掘区北端で，143.6mであり，墳頂肩部は風雨などで削平を受けているため，これを補って復原すれば，第7図の横断面図のように，第2段の斜面距離は約2m，その下に続く平坦面の幅は約2mと推定しうる。したがって，第4次調査で検出した円筒埴輪底部は，原位置から若干移動しているとはいえ，もとは平坦面上に置かれていたものと推定できよう（図版2，図版4）。

第9図　前方部北端の土壙（北西から）

第10図　前方部北端の土壙拡大

第3章　出　土　遺　物

遺物の概要　今回の調査で出土した遺物は円筒埴輪のみである。東斜面の肩部付近あるいは平坦面に，比較的大形の破片があり，円筒埴輪のヒレ部の形状復原の可能な個体が多かったほか，朝顔形円筒埴輪の壺頸腹部であることが明瞭な破片を検出した。

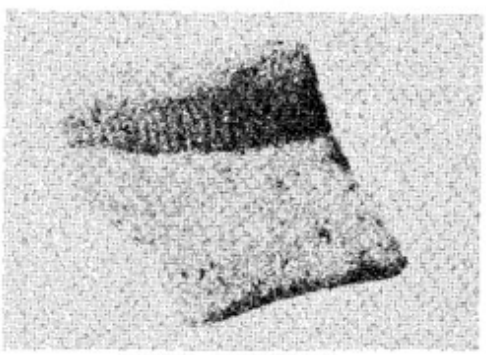
なお遺物については，第4次調査時に未報告の重要なものをも含め，一括して報告することにするが，これまで明瞭でなかった事実や新たに判明した事象にしぼって重点的に記述することとする。また，第13図，第14図の埴輪実測図番号，H31～H61は，第3次調査概要報告掲出の図と一連のものである。

朝顔形円筒埴輪　第4次調査資料の中に，朝顔形円筒埴輪の壺胴部と思われるものがあり既に紹介したが，今回の調査資料中に壺口頸部の破片が2個ある（図版11－1，第13図，H33，H34）。壺の胴部と頸部の境に幅1㎝程度の突帯をめぐらせている。胴部上半の器壁の厚さは約8㎜あって，他の円筒埴輪の器壁の厚みと変らない。こうして，朝顔形円筒埴輪の存在が確実となったにもかかわらず，その口縁部片に相当するものは未検出であること，資料数の少ないことを勘案すると，もともと朝顔形円筒埴輪の個体数は多くなかったものと推定できよう。

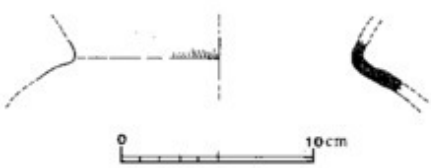
透し孔，その他技法の特色　今回の資料の中では円筒埴輪の透し孔は長方形が主体を占める。図示したものは第13図のH36，H37，H40，H42，H44の5個体である（図版10－2）。

円筒埴輪の大きさは，基本的には二つのグループに分れる。一つのグループは，直径25㎝前後の，直径の小さい一群であり，他のグループは直径35㎝前後の，比較的大きな一群である。ただし，この2グループ相互間において，顕著な技法の差を指摘することはできない。

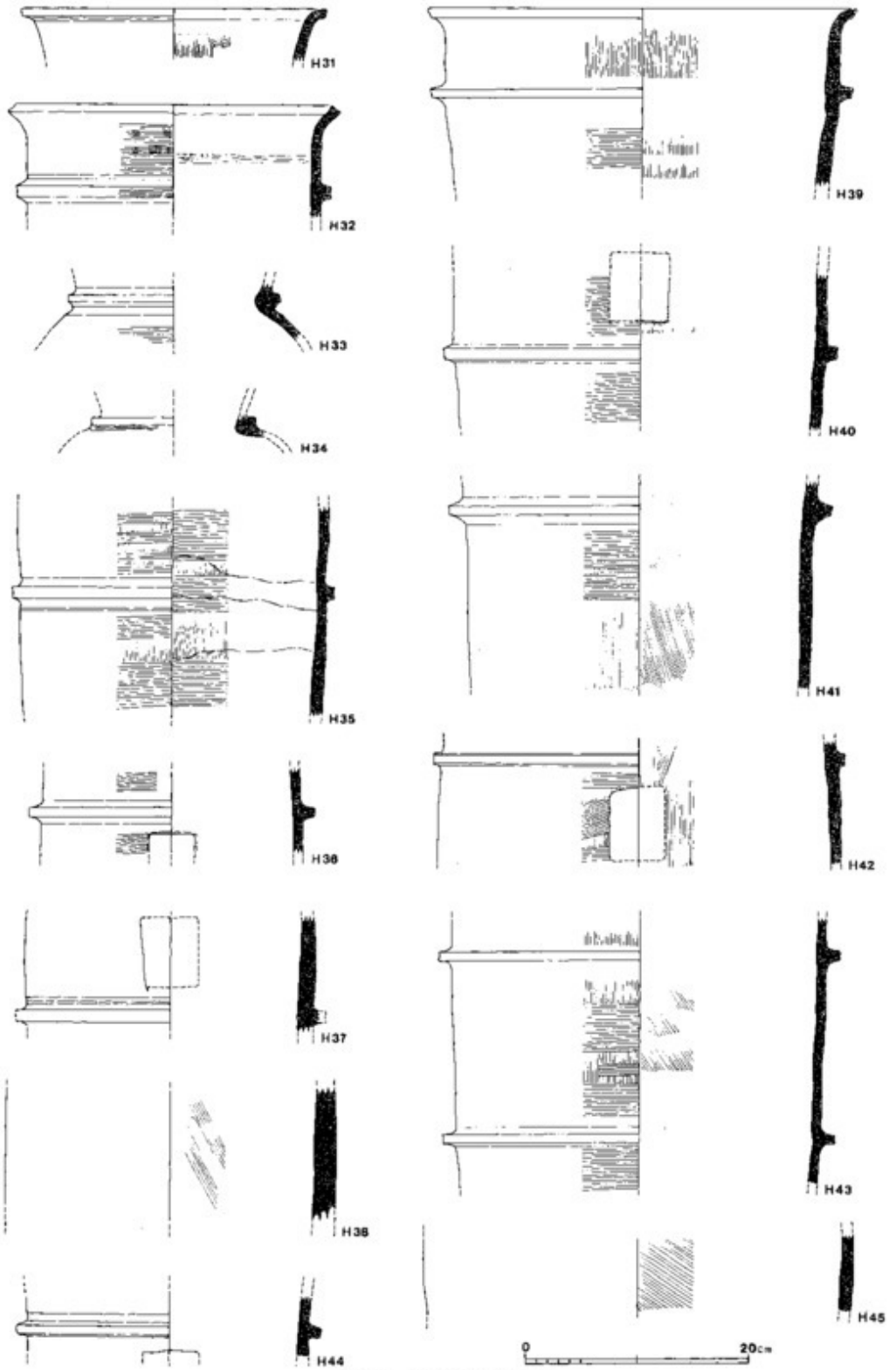
保存良好なヒレ部破片を多く検出しえたのは収穫の一つである。ヒレは幅において2種類あり，一つは幅7～8㎝の幅の狭いタイプ（第14図，H47，H48），他は幅11～12㎝をはかる大きいもの（第14図，H46）である。これらは調整手法などにおいて，殆んど変らず，斜方向のハケメで調整するものが多い。また，H46は，ハケメ調整のあと，外側長辺に沿って強いユビ



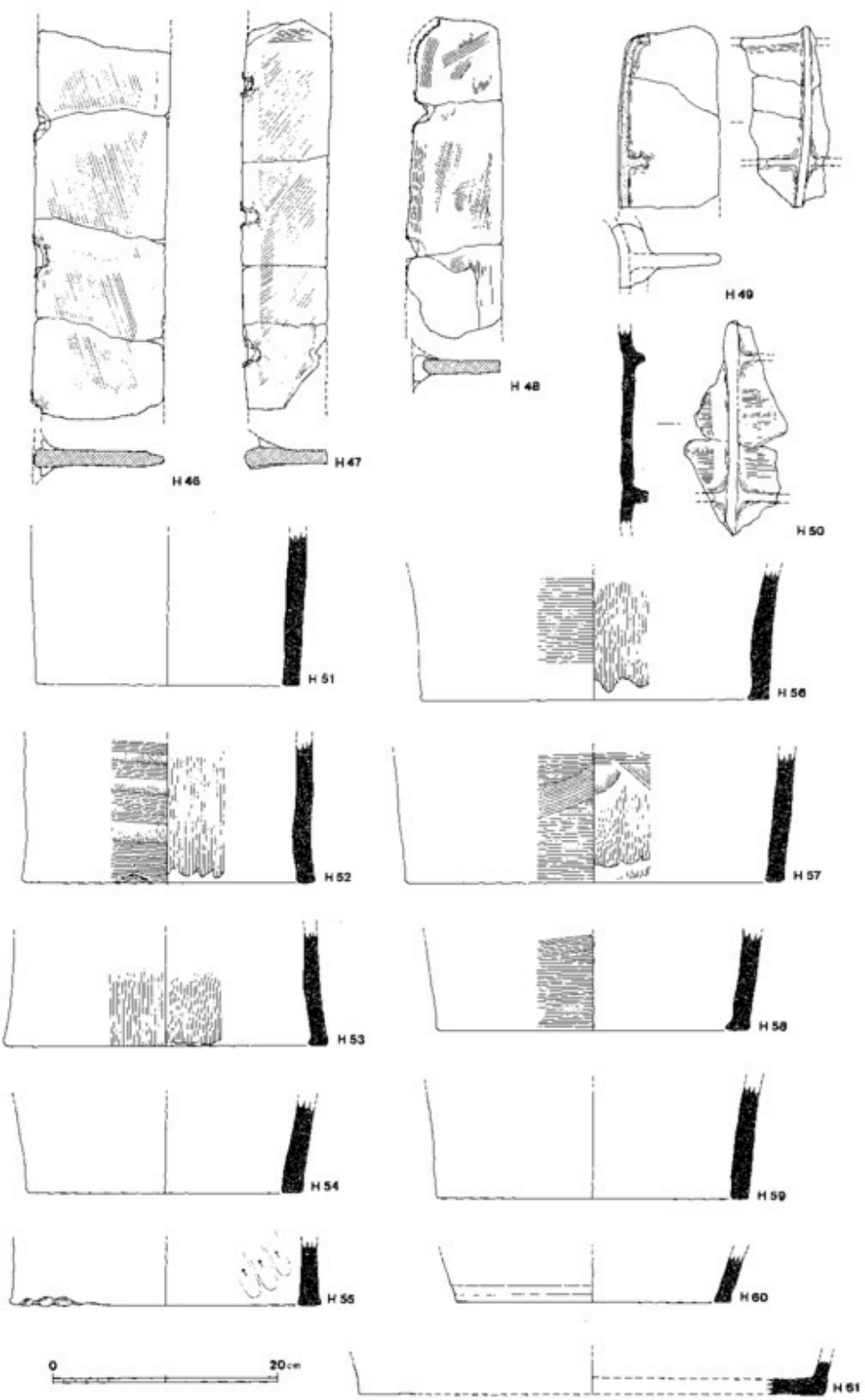
第11図　土師器片写真



第12図　土師器実測図


H31
H32
H33
H34
H35
H36
H37
H38
H39
H40
H41
H42
H43
H44
H45
0
20cm

第13図　埴輪実測図（1）


H 46
H 47
H 48
H 49
H 50
H 51
H 52
H 53
H 54
H 55
H 56
H 57
H 58
H 59
H 60
H 61
0
20cm

第14図　墳輪実測図（２）

ナデを施し最終的な仕上げを行っている。

この中にあって，H49は，ヒレの上端が円筒埴輪口縁部まで及ぶものであるが，この個体においては，調整法はユビナデによって，丁寧に仕上げており，ハケメは観察できない（図版７）。

胎土の異なる個体　暗褐色の基質に角閃石の微粒子の混入する胎土の埴輪は，明るい黄褐色の胎土に赤色のクサリ礫の粒子を含む多数派と容易に識別できる。この少数派の個体のうち，図示したものは第13図のH44，H45，第14図のH60，H61の４個体である。H45は内面はハケメ調整を施すが，外面はユビナデ調整を施した上にベンガラの赤色顔料を塗布する点で他の個体と著しく異なっている。またH60は底部径が25cmで外傾することから，壺形埴輪の底部となる可能性もある。H61は，もとの形状を復原するのはむつかしいが，曲面部をもつ破片を円の一部と考えて図のような復原を暫定的に考えた（図版11－２）。

土師器　極めて小片であるが，土師器を検出した（第11図，第12図）。壺形土器の口頸部にあたる。外面クビレ部にハケメを残すが，内面は風化のため調整法は不明である。

第４章　南原古墳周辺の調査

１　周辺部の地形測量と試掘調査

調査の目的　第３次調査概要で既に述べたように，南原古墳の立地する丘陵頂部の東側斜面には，かつて別の古墳が存在した。これを仮に南原東１号墳，南原東２号墳と呼称したが(3)，この地点もまた，筍栽培の土取りのために地形が年ごとに変形しているので，現状を記録化する仕事が急務と考え東側斜面の地形測量を実施するとともに，東２号墳と仮称した地点で埴輪片が採集できるので，この地点に古墳が存在するか否かの試掘調査を行った（図版５－１）。

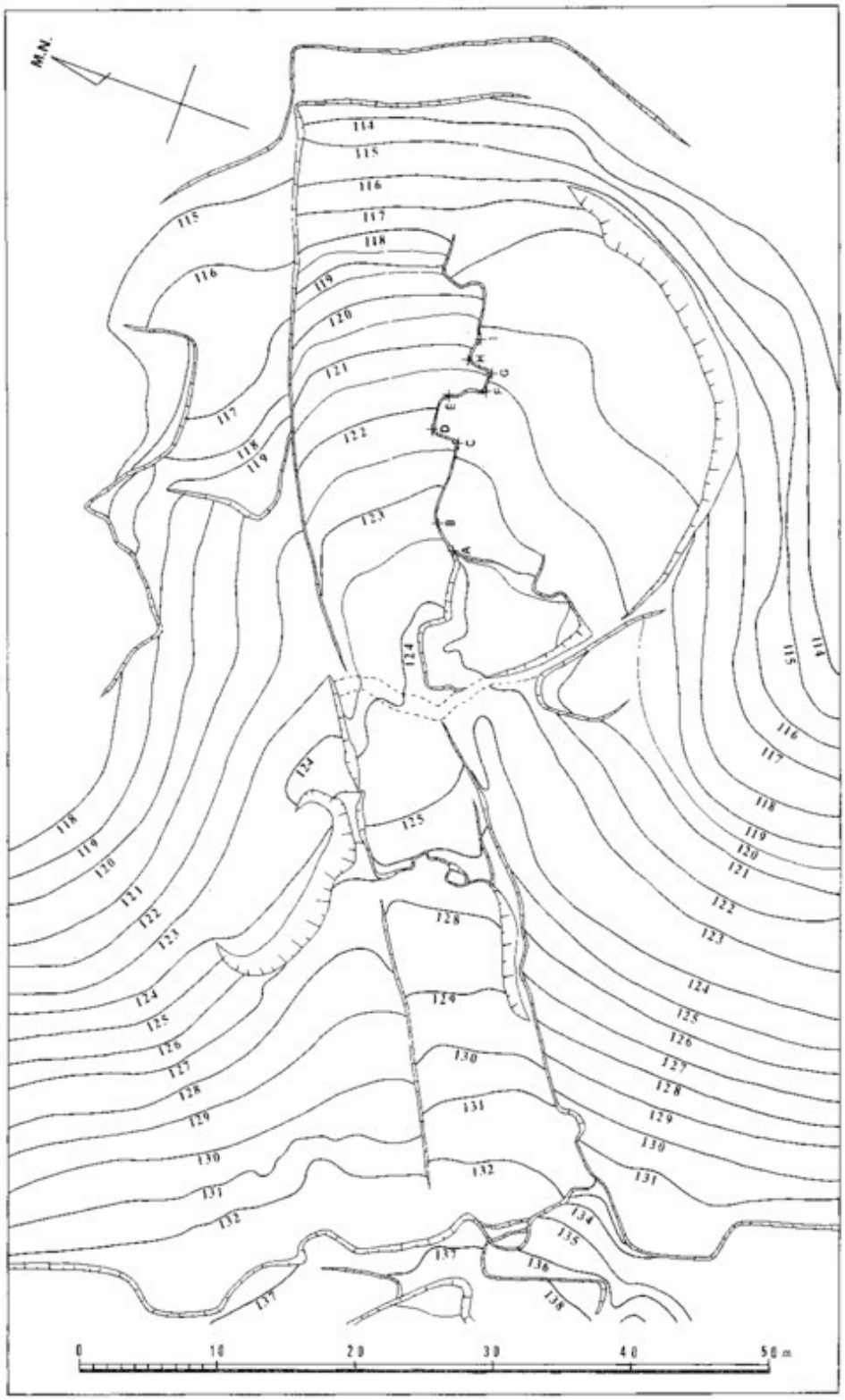
地形測量の結果　南原古墳東側の斜面は第２図に示すように，東側にむかって舌状に張り出した尾根の中腹にあたっている。この部分の土地所有者である藤下清一郎氏によれば，第２次大戦前に，ここを開墾中に「壺の中に勾玉が多数入ったもの」と「直径10cmぐらいの銅鏡」とを発見したという。その地点は第15図の地形測量図において，標高128～132ｍの範囲にあたり，斜面上半部に相当する。これを東１号墳と仮称したが，その後の地形の変形が激しく，墳丘状の盛り上りすらとどめていない。

さらに，その東の，斜面下半部の標高120ｍ付近で，開墾中に埴輪片が出土するという。この場所は第15図に見るように，南半部は土取りで削平されているとはいえ，等高線を見れば標高121ｍ付近を裾とする一辺30ｍ程度の方墳に見えないこともない。そこで，埴輪片が検出される地点を中心に斜面部の断面観察とトレンチによる調査を実施した。

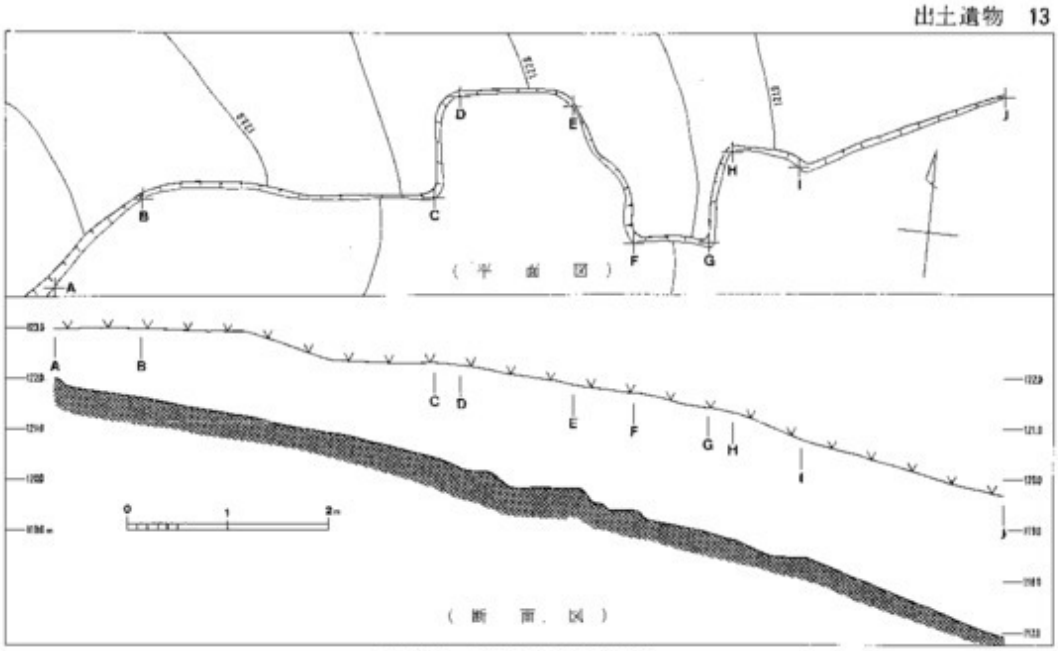
試掘結果　埴輪片の検出される地点は，第15図の地形図のＡ～Ｉ地点の崖面裾にあたるので，崖面の断面観察を実施するとともに，裾に沿って約20ｍの長さのトレンチを設定して，地山の上面と，その上の堆積土を調査した。第16図は，その断面図である（図版５，図版６）。

地形は西から東にむかって約４分の１勾配の傾斜をもって下降するが，Ｄ地点からＩ地点にいたる４ｍの範囲において３個所で地山上面が階段状に落ちこんでいる。ところが，この部分では，竹藪開墾以前の旧地表を示す黒色土が存在せず，いきなり約１ｍの厚さの筍栽培用の耕作土が覆っている。しかも，地山直上において近代の瓦片が採集された。このことから，この地山上面の段は，竹藪開墾時の掘削の痕を示すものであり，古墳の裾あるいは斜面の段築を示すものとは認めがたい。

また，埴輪片は地山直上の堆積土中で発見されるので，以上の所見に従えば，この地点にもともと古墳が存在したとしても，既にかなり破壊を受けて，埴輪は原位置から動いたものと推定される。あるいは，この地点より西の斜面上半部の東１号墳を破壊した土が埴輪片を含んだまま，竹藪の土入れの際に，ここに運ばれた可能性も否定できない。



第15図　南原古墳丘陵東斜面地形図（500分の１）



第16図　東２号墳の断面図

以上の調査結果にもとづき，東１号墳，東２号墳と仮称した２地点は，かなりの破壊と変形とを受けていることが判明した。ここに別々の２基の古墳が存在したのか，２地点が後円部（後方部）と前方部とになるのか，あるいは上記のように東１号墳のみが存在したのか３つのケースが考えられる。したがって，この２地点を，このような意味あいで東１号墳および東２号墳と仮称することとしたい。

２　出　土　遺　物

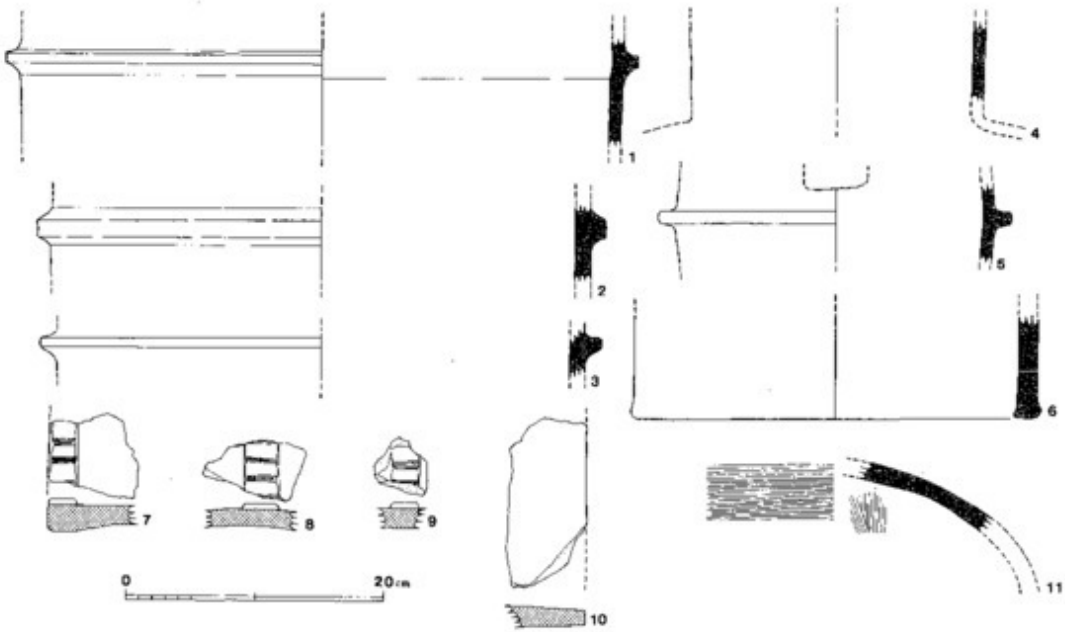
調査で検出した遺物は，近代の瓦片と土製品のほか，埴輪片がある。埴輪は円筒埴輪のほか，形象埴輪があり，東２号墳の年代を考える上で有力な手がかりを得ることができた。

円筒埴輪　円筒埴輪は普通円筒と朝顔形円筒とがある。円筒胴部は第17図１～３のように直径が40cm以上のものと，同図５・６のように直径30cm以下のものとがある。器壁表面の風化のため調整技法の詳細は不明であるが，突帯は同図２のように幅広く扁平化したものを含む点は新しい様相を示す。同図５は方形透孔を有するものである（図版12－１）。

同図４は朝顔形円筒埴輪の壺頸部と考えられるが，頸部直径が約23cmあることから，かなり大形品の一部であろう。同図11は壺胴部と考えて直径を復原すると胴最大部直径は約80cmとなり，極めて大形であるが，破片が大きくないので確定的ではない。外面調整は横位のハケメ，内面は縦位のハケメを施す。

また同図10はヒレ付円筒埴輪のヒレ部と考えられる。

形象埴輪　小片ではあるが，形象埴輪の一部と考えられるものがある（図版12－２，第17図７～９）。厚さ1.5～2.0cmの板状部に幅広い突帯を貼りつけ，突帯には刻み目を施す。同



第17図　東2号墳出土埴輪

図7は板状部の端面を厚く仕上げ，裏側には突帯と同一方向にハケメを施している。この種の刻み目突帯は奈良県宮山古墳[4]出土の靫形埴輪はじめ，一般に靫形埴輪にしばしば認められるし，群馬県赤堀茶臼山古墳[5]の蓋形埴輪や椅子形埴輪などにも施されている。とくに刻み目の突帯方向の縦断面の鋸歯状の窪みの断面形が片仮名のレ字状になるものが型式学的に古いと考えられるので，その特徴をもつ本資料は，古く位置づけることができよう。

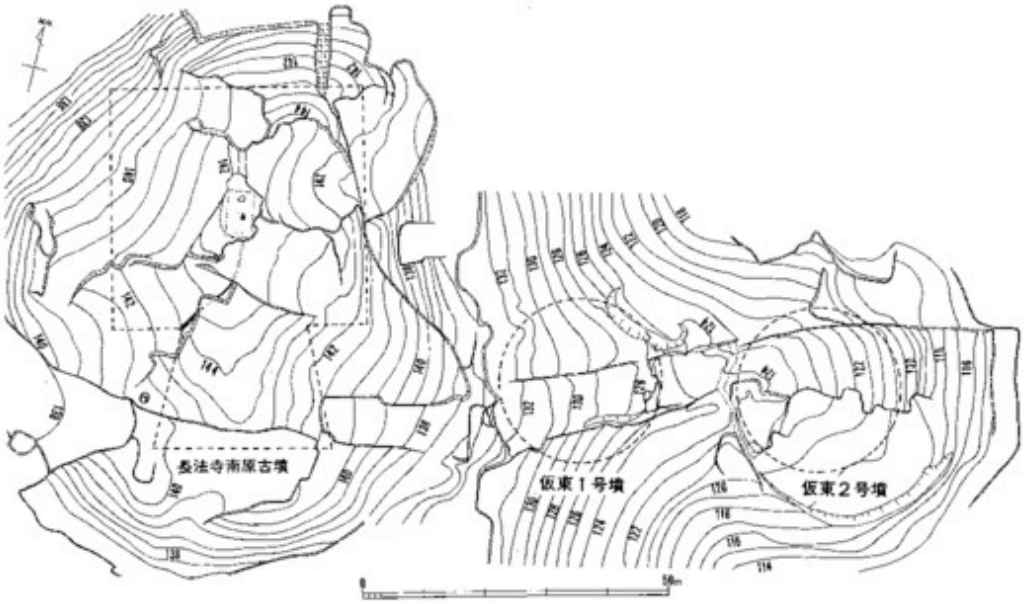
なお，以上の円筒埴輪，形象埴輪ともに胎土は赤橙色の基質に大粒の石英粒を多く含む。石英粒は南原古墳の埴輪では顕著でないので，胎土の様相を若干異にするが，赤褐色の大粒のクサリ礫を含む点では南原古墳の埴輪と共通項を有している。

埴輪の編年論的位置づけ　　東2号墳出土埴輪の編年論的位置づけ，とくに南原古墳との年代的関係にしぼって考えてみよう。

東2号墳出土埴輪は，円筒胴部突帯が幅広く，扁平化している点，あるいは突帯の細いものでも，突帯のヨコナデの際の3本の指の挟みこみが強くないために突帯の突出度合が大きくない点などは，南原古墳の埴輪よりも後出的な要素であり，中期古墳において主流となる特徴である。

また靫や蓋などの形象埴輪の一部と考えられる刻み目突帯の上記の特徴は，畿内では奈良県宮山古墳など，中期でも古い時期に多く認められるものである。

以上の諸特徴を総合すると，東2号墳出土埴輪は中期初頭に位置づけることが可能であり，暦年代にして4世紀末～5世紀初頭の年代観を与えてよいものと考えられる。したがって南原古墳の築造年代との間に20～30年間の開きを有し，ほぼ一世代遅れる古墳と考えてよかろう。



第18図　南原古墳周辺地形図

3　東1号墳と東2号墳

東2号墳出土埴輪に関する以上の年代観にもとづけば，「小形鏡」や「多数の勾玉」を出土したと伝える東1号墳の推定年代とも大きく開くものではない。したがって，東1号墳と東2号墳とは，もともと同一古墳の別地点を示すか，あるいは東2号墳の場所の埴輪は東1号墳から移動したものとの先の推定は，この面からも可能となるかと思われる。この点は将来の調査によって確定すべき課題としたい。

第5章　総　　括

以上に述べた1984年度の第5次調査結果を要約すると次のとおりである。

1　前年度に引きつづき，南原古墳東側クビレ部の前方部側を調査した結果，墳丘斜面は2段築成であり，裾のテラス上面からの比高は約2mであることが判明した。

2　前方部墳頂部の南半部で礫を詰めこんだ土壙の北端を検出したが，これは墓壙上面と判断しうるので，前方部にも埋葬施設の存在する可能性が極めて高いと考えられる。

3　南原古墳出土埴輪の中に，朝顔形円筒埴輪の含まれていることが，前年度の知見をさらに補って，確実となり，本古墳に樹立された埴輪の実態解明を前進させた。

4　南原古墳の東側の丘陵斜面部の測量調査と試掘調査の結果，東2号墳と推定した地点は，竹藪開墾による改変が激しく，この地点の出土埴輪は必ずしも，もとから，この場所にあったとは断定できず，東1号墳の埴輪の移動とも考えうる余地がある。これらの埴輪は普通円筒以外に朝顔形円筒をも含み，ヒレを有するものがあるほか，靫あるいは蓋と推定される形象埴輪もある。

これらの埴輪の年代は古墳時代中期初頭と考えられ，南原古墳に一世代分ほど遅れた古墳の所産と考えてよいであろう。

注1）都出比呂志「長法寺南原古墳第3次発掘調査概要」（『長岡京市文化財調査報告書』第11冊，1983年）

2）都出比呂志・福永伸哉「長法寺南原古墳第4次発掘調査概要」（『長岡京市文化財調査報告書』第13冊，1984年）

3）前掲注2）文献

4）秋山日出雄・網干善教『室大墓』（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第18冊，1959年）

5）後藤守一『上野国佐波郡赤堀村今井茶臼山古墳』（『東京帝室博物館学報』6，1933年）

第２部　長岡京跡調査概要

第1章　長岡京跡右京第163次（７ＡＮＭＫＩ地区）調査概要

—勝龍寺城跡・神足遺跡・神足古墳—

1　は　じ　め　に

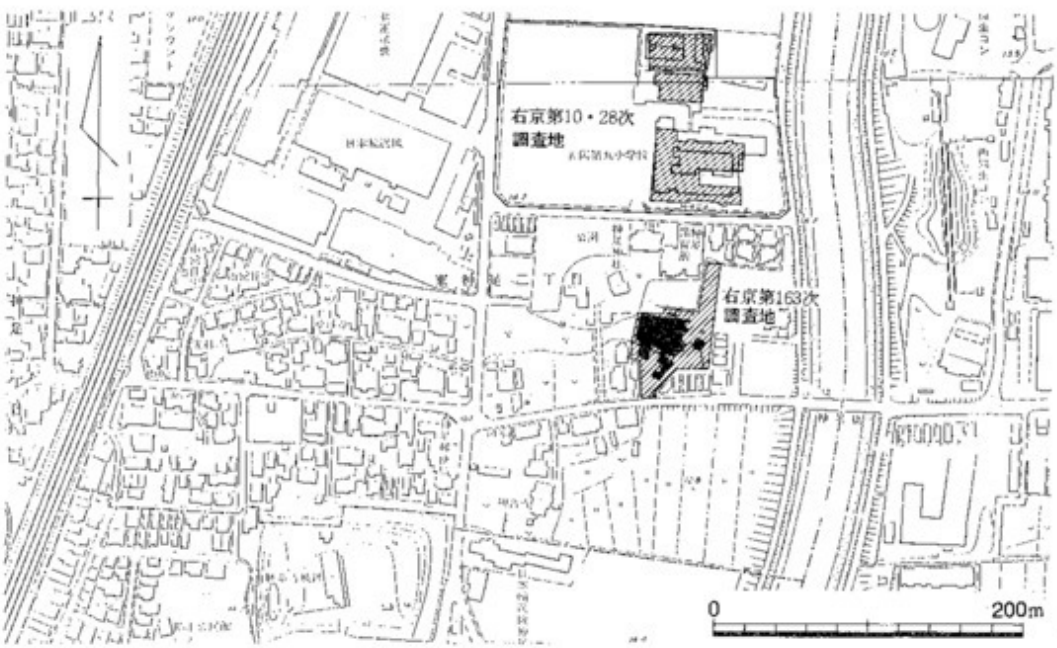
1　本報告は，1984年５月25日から８月30日まで，長岡京市東神足二丁目15において実施した発掘調査に関するものである。但し，本書は遺構について述べ，遺物については，来年度に詳細を報告することとする。

2　当対象地内には，勝龍寺城の外郭施設が完存している他，長岡京跡（右京六条一坊四町）に推定されており，神足遺跡の一画にも含まれている。

3　本調査は，宅地開発に伴うものである。調査費用は，勝龍寺城に関わる貴重な遺構が存在していることから，国庫補助金を使用した。調査面積は総計803㎡となった。

4　現地調査は，長岡京市教育委員会社会教育課が実施した。調査員は，（財）長岡京市埋蔵文化財センターに派遣を依頼し，岩崎誠が担当した。調査に当っては，地元住民の方々はじめ，諸大学学生諸氏等の協力を得た。(1)　また，調査前の写真撮影については，（財）京都市埋蔵文化財研究所の永田信一氏と牛嶋茂氏他に協力を得た。(2)

5　本報告は，編集，執筆ともに岩崎が行った。本書作成にあたり多くの方々の協力があった。(3)



第19図　調査位置図

2　歴史的環境と調査経過

当調査対象地は，国鉄東海道本線神足駅の南東約400ｍにあり，南流する小畑川の右岸に位置する（第19図）。対象地の地形は，東北部の段丘と，西南部の氾濫平野からなり，段丘から氾濫平野への地形変更線が北東一南西方向に走っている。段丘部は竹林地であり，氾濫平野は畑地に使用されていた。

当地周辺には，弥生時代以降，桃山時代にいたるまでの神足遺跡や，室町時代から江戸時代にかけての勝龍寺城跡などが点在している。また，長岡京跡の範囲にも含まれており，右京六条一坊四町に推定されている。当対象地に北接し，国鉄東海道本線と小畑川に挟まれた段丘上に所在するのが神足遺跡である。この遺跡は，昭和34年に鰹節形磨製石器が採集され，鳥打畑遺跡として紹介されたのが初めである。(4) 昭和36年に弥生土器が採集され，弥生時代の遺跡として周知されるに至った。(5) 昭和53年に学校建設に伴い本格的な発掘調査がなされて以降，開発の波とともに，度重なる調査がなされてきた。今日までの調査から，神足遺跡が，弥生時代，古墳時代，鎌倉時代，安土桃山時代等々の複合遺跡であることが明らかになった。(6) 当調査対象地の段丘面は，神足遺跡の所在する段丘と同一面であり，当地にも同遺跡が及んでいる可能性も充分予想された。従って，今日までの神足遺跡の調査成果により，当対象地の調査目的も明らかである。

神足遺跡からは，弥生時代中期の土器や石器を大量に出土し，方形周溝墓や土壙墓，竪穴住居址等が検出された。方形周溝墓と土壙墓は，それぞれ群をなして整然と並んでおり，その北隅に竪穴住居が配置されていた。また，方形周溝墓は，規模に大小が認められ，この差により集中する所を違えていた。遺物では，石器，土器ともに大きな成果が報じられた。畿内中心部に集中し，当地域以北には出土していなかった石小刀が二点出土し，しかもこの内の１点が住居址からの出土であった。磨製石剣の大量出土も注目を集め，銅剣形石剣の一遺跡一点という通例をくつがえした。土器は，当地方の特徴が空白だった段階から，大きく前進した。このように，神足遺跡で検出，出土した弥生時代の遺構，遺物は，当地域の弥生集落を復原する上で大きな成果をあげた。しかし，方形周溝墓群や土壙墓群の規模や数，居住区域など，不明な点も多い。当対象地は，神足遺跡の方形周溝墓群の南約40ｍの位置にあり，弥生時代中期の遺跡が当地にまで及ぶかどうか，方形周溝墓群がどこまで広がっているか等の点に興味が持たれた。また，対象地の南西部にある氾濫地では，水田地利用の可能性もあった。

古墳時代の神足遺跡は，中期から後期にかけての遺構，遺物が明らかになっている。５世紀後半の遺構では，埴輪円筒棺が一基検出されている。６世紀前半代になると，竪穴住居や掘立柱建物が建ち始め，６世紀後半まで集落の居住区域であったことが知られた。(7) そのうちの竪穴住居のひとつに，５世紀後半の特徴をもつ埴輪を出土したものがある。このように埴輪円筒棺

第20図　調査地周辺地形図（京都考古学研究会測図）

や埴輪片が出土することから，周辺地に古墳が存在した可能性も充分考えられる。また住居址の分布範囲が当対象地にまで広がることも考えられた。

長岡京期には，当調査地推定条坊と同じ町内にあり，右京六条一坊三・四町に推定されている。長岡京跡右京第10次及び第28次調査として実施された調査の際には掘立柱建物や井戸等が検出された。特徴的な遺物には，帯飾りや墨書土器等が出土している。その調査地は，『日本逸史』等の維摩会の記事などから，藤原是公か継縄の邸宅に推定されている。この説が正しいと仮定し，六条一坊の三町から四町にまたがる宅地を有していたとすれば，当対象地は，その一画にあたることになり，これに関する資料が得られることも予想された。

都が平安京にうつって以後の遺構は検出されなかったものの，10世紀前後の土器類が出土している。明確な遺構が検出されていないことから，当対象地ではどうか，期待される点である。

鎌倉時代に入って13世紀後半代に井戸や空堀，土壙等の他，柱穴が無数に掘られており，遺物も豊富で，中世集落が存在したことが想定されている。また，土壙の中には，墓と推定されるものもあり，輸入磁器等も出土している。

室町時代には，16世紀後半の土壙や柱穴などが無数にあり，少量の国産陶器類等も出土した。

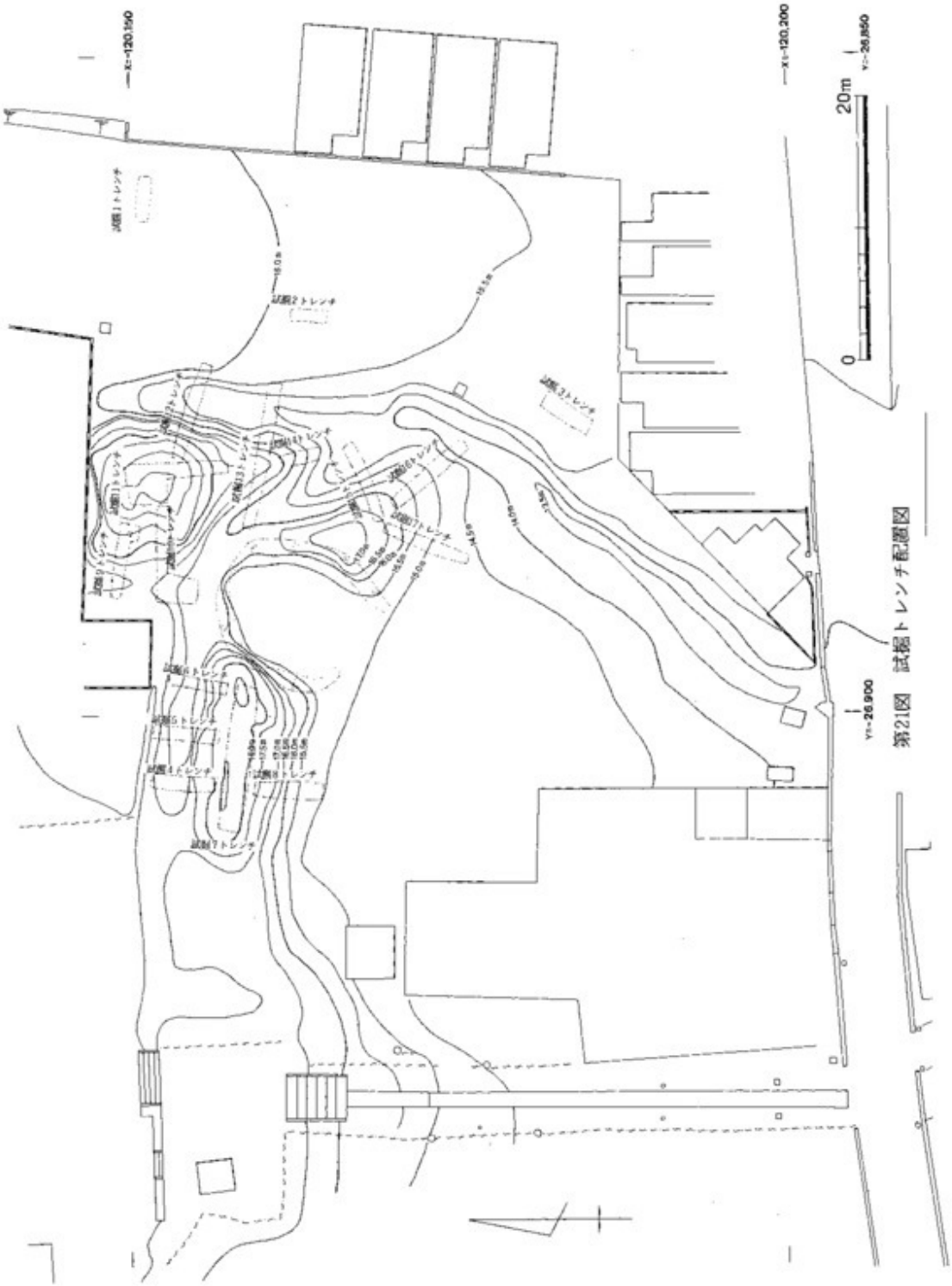
このように，今日までの近隣地の調査成果から，当対象地は古代，中世を問わず，神足ムラを復原するのに必要欠くべからざる所に位置している。

転じて，当対象地南西方向に目を向けると，約140ｍ離れた位置に「城ノ内」という小字名が最近まで使われていた所がある。そこは，水満ちた濠に囲まれた，勝龍寺城本丸跡である。南北朝期の南朝方に対抗して築かれた城で，暦応３（1339）年細川頼春の築城と伝える[8]。この後，応仁・文明の乱に巻き込まれ，西軍の畠山義就が文明２（1470）年に拡張整備したらしい[9]。元亀２（1571）年細川藤孝が増改築を行った。この時に城を拡張し，平城から近代的な城へと変貌した。細川氏によって近代化されたこの城は，山崎の戦乱で明智光秀の拠点となった。光秀は敗戦後，この城へ逃げ帰った後，夜に脱出している。

その後，文献から姿をひそめる。寛永10（1633）年に，永井直清によって再建され，高槻城に移るまでの16年間の居城[10]を最後に，勝龍寺城の名は文献から遠ざかってしまう。

さて，当対象地内には，東西方向の高まりと溝状の落ち込みが見られる（図版14）。この高まりと落ち込みは，当対象地の西方約125ｍまで伸びており（第20図），勝龍寺城に関する土塁と空堀であろうと考えられている。また，北東一南西方向の地形変更線にそって，濠の痕跡が認められ，勝龍寺城に関する防御施設であろうと考えている。これらの痕跡は，細川藤孝の増改築に伴うものと考える説が有力である[11]。この説が正しければ，神足遺跡で検出された鎌倉時代の遺構群は，勝龍寺城築城以前の中世集落であり，室町時代の遺構群は，藤孝の増改築の勝龍寺城に関連するものである可能性が高い。

以上、近隣地の遺跡や調査成果から８時代にわたる複合遺跡が予想され，当調査によって確



第21図　試掘トレンチ配置図

認しなければならない点や，調査すれば明らかになるであろう問題点など，多くの課題が与えられている。従って，造成工事に伴い破壊が予想される部分を中心に調査することとなった。

調査を始めるにあたり，予想される8時代の遺構，遺物，層位を明らかにするため，線掘りの試掘調査を行った（第21図，図版15—(1)）。試掘トレンチは，氾濫平野部に1～3トレンチを，土塁と空堀の残る段丘部に4～17トレンチを設定した。試掘1～3トレンチでは，湧水が激しく，途中放棄せざるをえなくなった。しかし試掘2・3トレンチでは，断面観察を行うことができた。この地点では，地表下3mまで現代盛土層があり，これを取り除いて旧水田耕土が現れた。耕土以下には鎌倉時代から江戸時代にかけての堆積層，この下に弥生後期の遺物包含層が存在していた。深さがあり，湧水も多いため，試掘2トレンチの東側に，面積をやや広くして掘り直すことになった。段丘部の試掘4～17トレンチでは，土塁上に試掘7・11トレンチを，土塁斜面に試掘8・12～17トレンチを，空堀部分に試掘4～6・9・10トレンチを設定した。土塁頂部に設定した試掘7・11トレンチでは，土塁盛土の上面に防御施設の構築痕跡があるかどうかを明らかにするために設定したものであるが，現存する土塁盛土上面では検出することができなかった。念のため，土塁盛土の最上層を一層除去し，遺構検出作業を試みたが，築地塀や柵列等の土塁上に予想される防御施設は確認できなかった。しかし一概に防御施設がなかったとは言えず，土塁頂部の元来の盛土最上層が削平を受けてしまったことも考えられる。空堀は，現状の土塁頂部と空堀底面との比高差が約2mであるのに対し，土塁頂部で確認した土塁盛土上面から，空堀部分の試掘4～6トレンチで確認した底面との比高差は，約3mであることが明らかになった。この空堀は，土塁と平行して東西方向に伸び，土塁とともに東端で南東方向に曲がる。屈曲部の北側には，南北方向の土塁と空堀があり，土塁は東西方向の空堀で止まり，空堀は東西方向の空堀とつながっている。これらのうち，東西方向の土塁を土塁ＳＡ16301，同空堀を空堀ＳＤ16302と呼び，南北方向の土塁を土塁ＳＡ16303，同空堀を空堀ＳＤ16304と呼ぶこととする。

土塁ＳＡ16301は，屈曲部分が，土取りのため大きくえぐられており，この部分を利用して断面観察を行うことにした。この土取り破壊部分での土塁や空堀を構築する地盤となっていた層は，段丘礫層の直上に認められた中世遺物を含む旧表土であった。

土塁ＳＡ16301・ＳＡ16303の斜面に設定した試掘トレンチのうち，試掘8トレンチからは弥生土器の出土する層があり，土塁構築以前に，弥生遺跡が広がっていたと思われる。また，他の試掘トレンチからは，瓦器等の鎌倉時代遺物を出土する部分があり，中世集落の一部である可能性も強くなった。土塁ＳＡ16301とＳＡ16303の頂部に設定した試掘トレンチからは，古墳時代の須恵器類も出土しており神足複合遺跡の範囲に含まれていることが確実となった。また，土塁ＳＡ16303から空堀ＳＤ16304にかけての試掘トレンチ（試掘9トレンチ）では，土塁ＳＡ16303の西側斜面に礎石らしき立方形の亜角礫砂岩が検出された。使用目的等は明ら

第22図　勝龍寺城関連遺構と地形図

かにしえなかったが，土塁ＳＡ16303構築以後の施設である（図版18）。

このような試掘調査の成果から，土塁や空堀の調査後，下層遺構についても充分な調査が必要と思われ，試掘の線掘り調査から，面積を広げて，本格的調査へ移行することとなった。

面積を広げるにあたり，試掘調査の成果をふまえて，氾濫平野に一ケ所（第1トレンチ），段丘部分の土塁や空堀の残っている部分は，ほぼ全面的に（第5トレンチ），土塁等の南側には「コ」の字状のトレンチを設定（第2～4トレンチ）して調査することにした（第22図）。

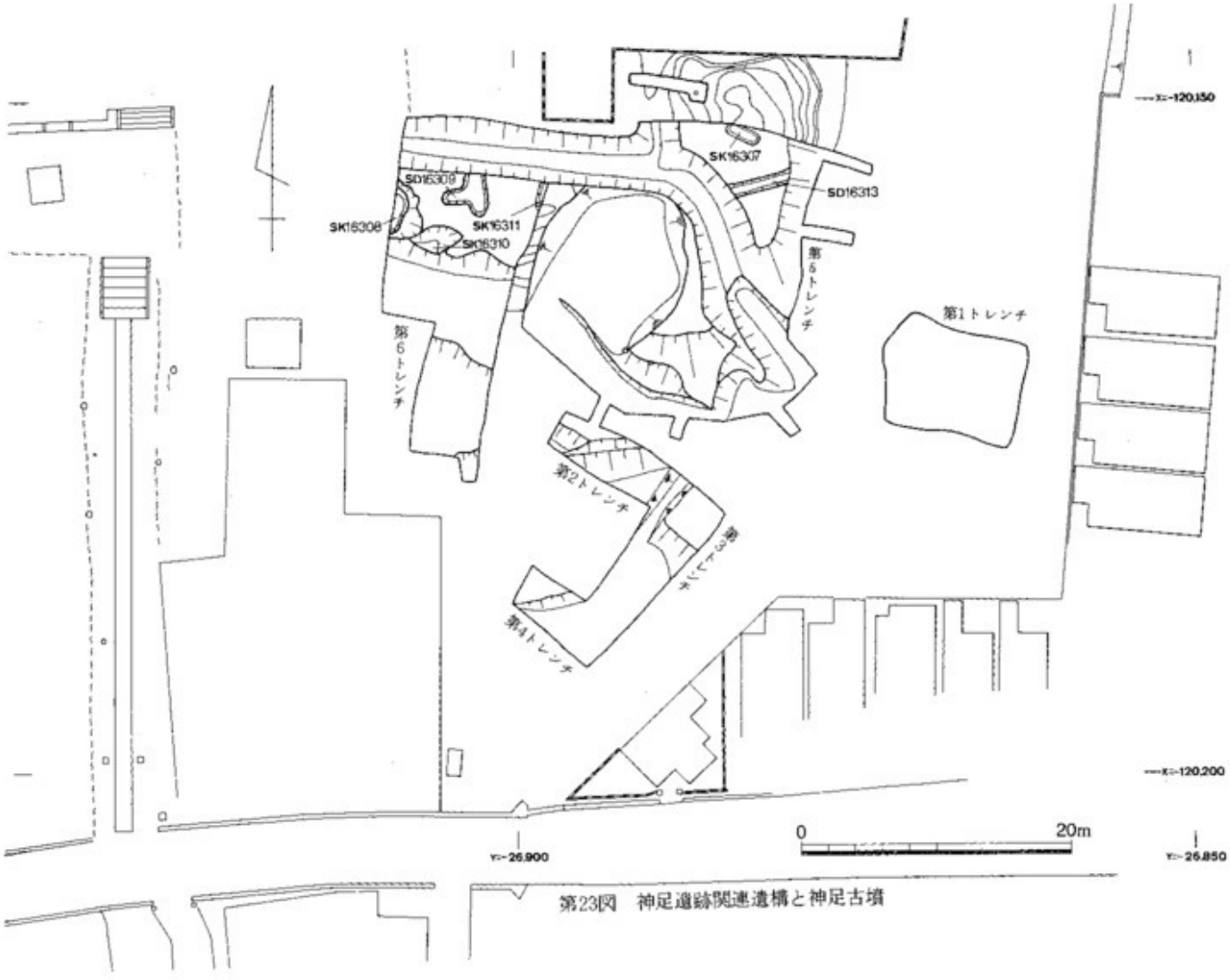
第1トレンチからは，遺構は検出されなかったが，弥生時代後期の遺物包含層の他，13～14世紀の遺物包含層，16～17世紀の遺物包含層が確認された。盛土が厚いことや，旧耕土以下の堆積層が水分を多く含み，湧水も多いことから，トレンチが大きく崩れ，結局，充分な調査はできなかった。しかし，包含層しか確認できなかったことや，地表下4ｍという深さから，木造建築や，新設道路下の上下水道施設などの影響では破壊される危険性がうすいこともあって，さらに詳細な調査を行うことは断念することになった。

第2～4トレンチからは，北東－南西方向の溝（ＳＤ16305）が検出された。この溝は，北西から南東方向へ傾斜する地形の東端に位置し，これより東方は，平坦な面になっている。溝に関する調査終了後，第3トレンチ南部から第4トレンチにかけて認められた平安時代遺物包含層を掘り下げ下層遺構の有無を確認した。

土塁や空堀の残る所に設定した第5トレンチでは，現存する土塁と空堀の面を記録し，また，土塁構築法を確認した上で，土塁構築以前の遺跡調査を行うことにした。

下層からは，縄文時代，弥生時代，古墳時代，平安時代（長岡京期，平安京期），鎌倉時代の5時代にわたる痕跡を認めた（第23図）。土塁構築以前のうち，鎌倉時代に関するものは，土塁の盛土を除去した段階で数ケ所からピットが検出された。平安時代の長岡京，平安京両期に関しては，遺物の散布にとどまり，遺構は検出されなかった。古墳時代の遺構は，土塁ＳＡ16303の土塁盛土除去中に発見された古墳であり，神足遺跡で確認されている集落地ではないことが明らかになった。当古墳は，土塁構築に際する盛土と考えて掘り進んだ盛土中より，土師器や須恵器の完形品が置かれた状態で出土し，初めて確認できたものである。古墳の主体部には，木棺直葬と思われる土壙ＳＫ16307の掘り込みが確認された。以後，この古墳を「神足古墳」と呼ぶことにする。この古墳の盛土を除去した段階で，弥生時代の溝が検出されている。土塁ＳＡ16301の下層からも，弥生時代の土壙や溝が検出された。

土塁ＳＡ16301の南には，平坦地が比較的広がっており，屋舗跡等のあった可能性も考えられることから，土塁ＳＡ16301の東端を南へ拡張し，第6トレンチとした。ここでは，段丘礫上に，中・近世のピットや土壙が集中していた。また，縄文時代の遺物包含層も，当トレンチ南半部で認められた。このように，各トレンチとも数時代の遺構を重複しており，遺構の位置関係を明確にするため以下，トレンチごとに，検出された遺構を概観する。

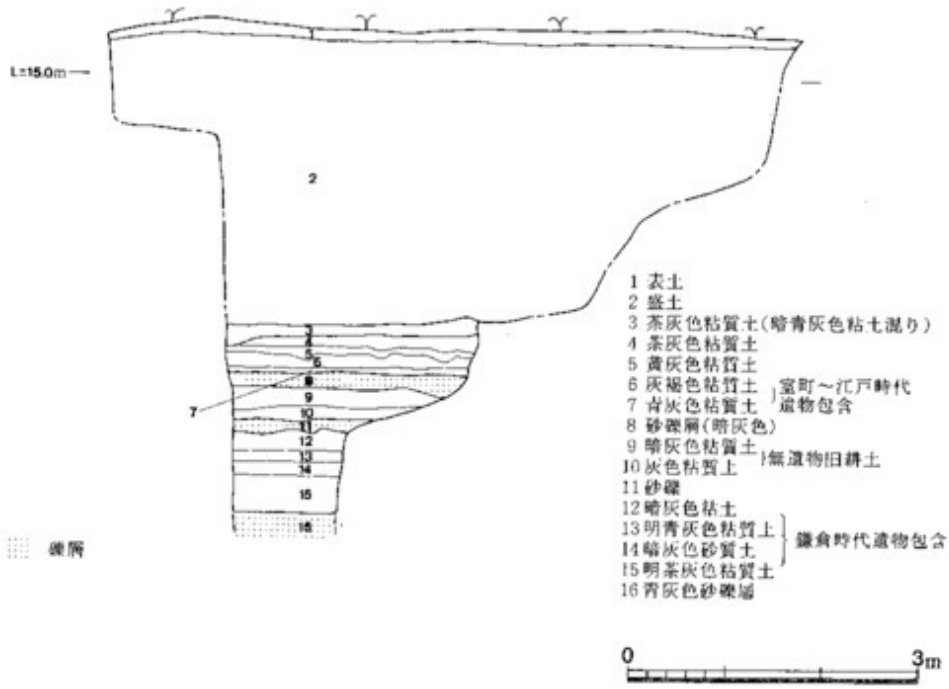


第23図　神足遺跡関連遺構と神足古墳

3　検　出　遺　構

第1トレンチ（第24図）

対象地東部の氾濫平野部に設定したトレンチで，現在畑地になっている。現畑地耕作土（1）は，厚さ約10cmあり，以下，約3mまで造成盛土（2）で，この直下に旧水田耕作土（3）が認められた。水田耕作土からは，ガラス片やブリキ缶などが出土し，昭和初期まで水田耕作されていたことを裏づけている。旧耕作土の下には2層の床土（4・5）があり，近世陶磁器の小片を含んでいた。以下，湿地状の堆積（粘土又は粘質土）で，2時期の洪水堆積層（砂や砂礫）が認められる。6～7層は粘質土で，16～17世紀の陶器類の小片を包含していた。これらの堆積層は，勝龍寺城築城後の堆積層であり，標高11.9～12.3mを測る。8層は洪水堆積層と思われる砂礫層で，遺物は包含されていない。9・10層は粘質土で，遺物は出土しなかったが，旧水田耕作土であろうと思われる。11層は，8層とよく似た砂礫層で，洪水堆積層と思われる。12～15層は，粘土又は粘質土で，13世紀以前の瓦器を包含していた。これらの各層の出土遺物は，いずれも小片，少量であり，生活址よりも水田址と考えた方がよさそうである。周辺地に残る方眼状に区割りされた水田や旧小字地名（一ノ坪等）から，条里制に組み込まれた水田址



第24図　第1トレンチ東壁土層図

の一端である可能性もある。

以下，無遺物層となり，砂礫層が厚く堆積していた。

第２・３・４トレンチ（第25・26図）

対象地南部の竹林地に設定したトレンチで，勝龍寺城の外堀推定位置にあたる。トレンチは「コ」の字状に設定し，北側の東西トレンチを第２トレンチ，南側の東西トレンチを第４トレンチ，この間を継ぐ南北トレンチを第３トレンチとした。現地形では，北東一南西方向の堀の痕跡と思われる溝状落ち込みの西肩部分にあたる。この溝状落ち込みを横断するようにトレンチ設定するのが最良と思われたが，東肩から溝状落ち込みの底にかけて，北接する神足保育所からの排水管が埋設されているため，これを断念した。しかし，幸いにも，第３トレンチを縦断するように溝（ＳＤ16305）が検出され，その規模も確認することができた。第２・３トレンチは，いずれも段丘礫層を地盤として南東方向に急傾斜する部分である。溝ＳＤ16305は，この傾斜地の東端に設けられた溝であることが明らかとなった。この溝の構築以前は，西から東に向って傾斜する自然地形であり，第３トレンチが最も低く，平安時代の遺物包含層が堆積している。この層は，粘質土層で，第２トレンチ南東端から南に向って厚くなっている。

溝ＳＤ16305　当溝は，埋土の相違から，３時期に分けることができ（第25図），新しい段階の埋土からは，近世陶・磁器類が出土し（ＳＤ16305－Ａ），最も古い段階の埋土からは16世紀後半の遺物類が出土し（ＳＤ16305－Ｃ），この間の埋土からは17世紀前半の遺物を出土する（ＳＤ16305－Ｂ）。埋土の堆積状況から，最も古い溝ＳＤ16305－Ｃが掘られて以後，２度にわたって掘り直されていることがわかる（第25図）。

溝ＳＤ16305－Ａは，第２トレンチ北壁で幅３ｍ，深さ１ｍを測り，埋土は，溝の西肩から埋っている。第４トレンチ南壁では，この時期の堆積は認められない。この時期の溝は，近隣地の古老が知るところの溝であり，昭和初期まであったと伝える。この溝の北端（第２トレンチ北壁断面）では，溝内の堆積が良好に観察できたが，南方では見られないことから，削平を受けていると思われる。この溝は，段丘部と平野部との境の湧水を集め，水田用水に利用されていたらしく，当溝検出位置より北西部に，池状の水溜め施設があったという。また昭和初期までは，当溝より西側が高く，東側との比高差が１ｍほどあったという。現在は溝の中心が東へ移動し，その痕跡を残すだけで，東西の比高差はなくなっている。

この溝埋没後，第４トレンチ周辺では水田化されたらしく，当溝検出面で水田耕作土が認められた。水田耕作がされなくなってから，砂層が厚く堆積し，竹林化されている。この砂層は，現在の小畑川河床の砂であると聞く。

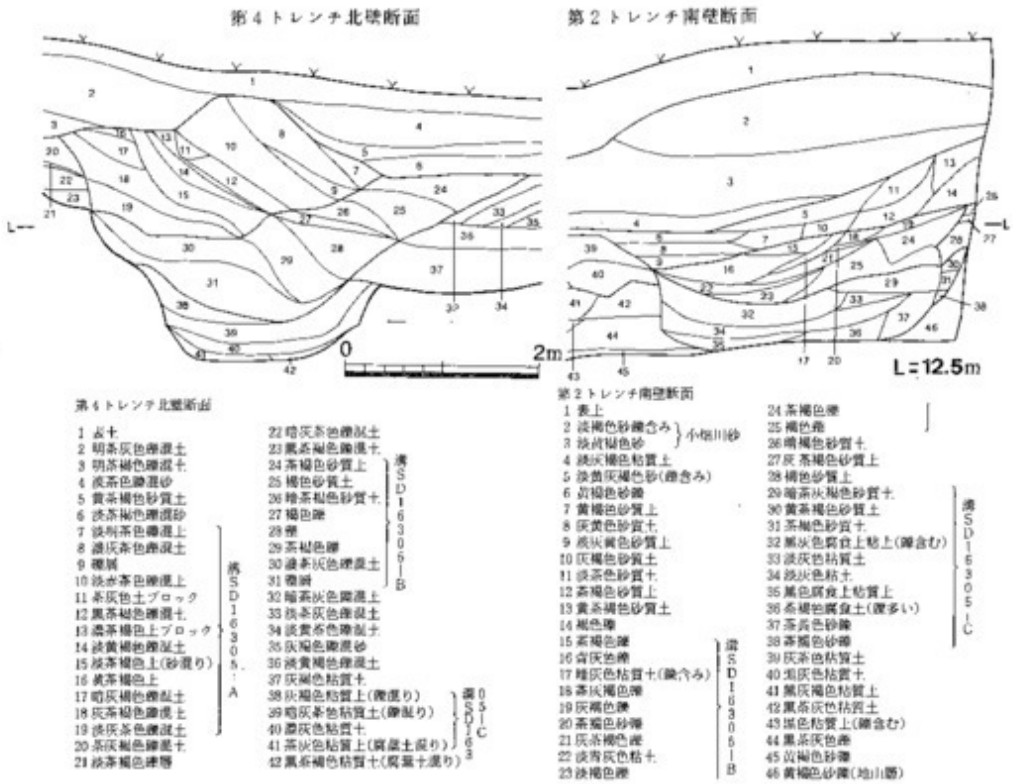
溝ＳＤ16305－Ｂは，第２トレンチ北壁で幅７ｍ，深さ２ｍを測る。溝の西肩より東肩が一段低く，比高差0.5ｍを測る。第４トレンチ南壁では，幅3.3ｍ，深さ0.7ｍであった。埋土の最下層には粘土層が薄く堆積している。各層に遺物の時期差は認められない。最下層の粘土層

は，この溝が水をたたえていたことを物語っているが，これより上層は砂礫層で，西側溝肩からの堆積土である。

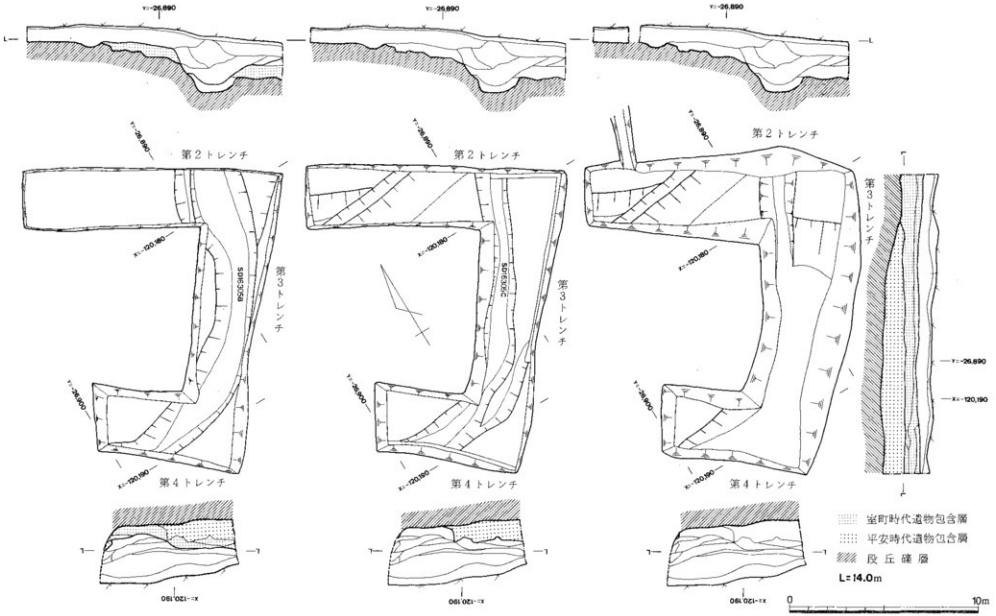
溝ＳＤ16305－Ｃは，第２トレンチ北壁で幅1.5ｍ，深さ１ｍを測る。溝ＳＤ16305－Ｂ同様，溝の西肩より東肩が一段低く，比高差１ｍを測る。第４トレンチ南壁では，幅3.2ｍ，深さ0.6ｍであった。埋土は４層からなり，下層に粘土層が多く堆積している。埋土の各層には時期差は認められない。溝の規模が前時期の溝ＳＤ16305－Ｂより極端に小さい数値を示しているのは，溝ＳＤ16305－Ｂにより，大きく掘り直されているため，溝ＳＤ16305－Ｃの底近くしか跡をとどめず，溝ＳＤ16305－Ｃの築かれた当時の規模が不明になってしまっているからである。

これらの溝の関係は，各々性格を異にするとは思われない。平安時代の遺物包含層堆積後，16世紀後半に溝ＳＤ16305－Ｃが掘られ，ほぼ埋没状況になってから，17世紀前半になって，溝の両肩を整えた後掘り直され（溝ＳＤ16305－Ｂ），さらに近世になって掘り直されている。

この３時期にわたる溝ＳＤ16305（Ａ～Ｃ）は，出土遺物から，近代（Ａ）・17世紀（Ｂ）・16世紀（Ｃ）の各期に掘られ，あるいは掘り直されていることが知られた。このうち，17世紀に埋没状況下にあった溝ＳＤ16305－Ｂ（第26図(1)）は寛永10年に轉封された永井直清の，16世紀に埋没状況下にあった溝ＳＤ16305－Ｃ（第26図(2)）は，細川藤孝が永禄11年に城主となっ



第25図　溝ＳＤ16305土層図



(1) 江戸時代遺構配置図　(2) 室町時代遺構配置図　(3) 平安時代遺構配置図

第26図　第2・3・4トレンチ遺構配置図

て以降の堆積であろうと推定される。このことから，細川家の絵図から推定されるように，溝ＳＤ16305－Ｂ・Ｃは勝龍寺城の外堀である可能性が高い。地形からみても，当溝の西側が高く，東側が一段低いことや，北に位置する土塁によって守られている平坦地が，当溝の西側に広がっている点などからも，堀と考えてよさそうである。

第５・第６トレンチ（第28・29図，図版15－(2)・16－(2)・18－(2)）

対象地の北西部に設定したトレンチで，空堀ＳＤ16302（図版17－(1)）と土塁ＳＡ16301（図版16－(1)）が今日まで残されてきた所である。この空堀と土塁は第５トレンチ東部へも続くが，この項でまとめて述べる。これらの施設の南側には平坦地が広がり，空堀や土塁による防御隊あるいは神足屋舗に関する施設が予想されたため，トレンチを南方へ拡張した（第６トレンチと呼ぶ）。拡張部では，中・近世のピット群が検出されたが，柵列と思われる柱列が見い出されるのみで，建物としてのまとまりは見られなかった。この他，土塁の下層からは，中世ピットや弥生時代の溝，土壙が，拡張部からは，縄文時代遺物包含層が確認された。

土塁ＳＡ16301　東西方向の土塁で，弥生時代・鎌倉時代遺物包含層上に築かれている（第28図，図版16－(2)）。第５トレンチ東端では，南東方向に屈曲している（第30図，図版18－(2)）。屈曲部分は，土取りにより，大きく破壊されている。当土塁の北側に，平行して設置された空堀があり，この空堀ＳＤ16302の南側肩と底が，当土塁の北傾斜面と共通し合っている。土塁盛土の規模は，基底面で幅4.5ｍ，残存高1.3ｍを測り，空堀のある北傾斜面より南傾斜面の方が緩やかに造られている。土塁の構築盛土は大きくみて，下層の黒色系の砂質土層と上層の黄色系の礫層の２層に分けることができる。黄色系の礫層は，段丘礫層の再堆積，黒色系の砂質土層は，旧表土から中世包含層までの土層の再堆積と思われ，北接する空堀や周辺地の整地の際の残土を利用したもとであろうと思われる。当土塁の南に広がる平地との比高差は，1.5ｍを測る。

空堀ＳＤ16302　土塁ＳＡ16301の北側に平行して走る溝である（第28図，図版17－(2)）。水の流れによる堆積は認められない。土塁ＳＡ16301と同じように，第５トレンチ西部では東西方向に向き，東部で南東に曲がる（第30図，図版17－(2)）。掘り込みは，中世包含層上面よりなされており，その幅4.9ｍ，深さ2.1ｍを測る。堀底の面は狭く，西から東に向って緩やかな傾斜をもって造られており，大雨時の排水の便を考慮してある。また，東部で南東へ方向を変えてから，一段深くなっている（第31図，図版18－(2)）。その落差は約２ｍであった。溝幅もやや広がる傾向にある。埋土は，細かく堆積した下層と，比較的厚い層がみられる上層の２層に，大きく区分できる。

柵列ＳＡ16306　土塁ＳＡ16301の南に平行して築かれた柱穴列で，柵と思われる（第28図(1)）。１間約3.0ｍのほぼ等間隔で掘られている。検出面は，段丘礫層上面で，土塁部分で見られた中世遺物包含層は認められなかった。また，当遺構検出面にあたる段丘礫層上面は，

土塁部分で認められた段丘礫層上面より一段低くなっており，比高差約1.5～2mあった。柱穴はいずれも丸く，直径50cm前後のものである。

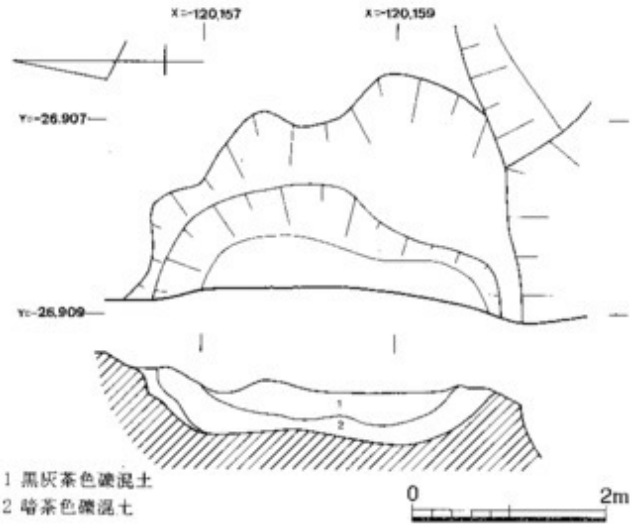
ピット群　これらの他，土塁SA16301の南側には，中・近世の柱穴群が検出された。検出面は，第6トレンチ北半部は段丘礫層上面で，南半部は黒色系又は黄色系の粘質土上面であった。出土遺物が少ないため，各ピットの時期を限定しきれないが，いずれも埋土がよく似ていることから，15世紀前半から17世紀にかけての間に掘られた柱穴群であろうと考えている。

土塁SA16301構築盛土を除去した段階でも，瓦器を出土する中世遺物包含層上面からピットが数個所で検出された。このことから，土塁構築以前に，何らかの目的で掘られたピットも，土塁南側のピット群に含まれていると思われる。それが，15世紀以前の遺物を出土するピットであろうと考えられる。これらの遺構と層位関係から，土塁下の段丘面と，土塁より南側の段丘面との落差は，15～16世紀頃に人工的につくられたと考えられる。

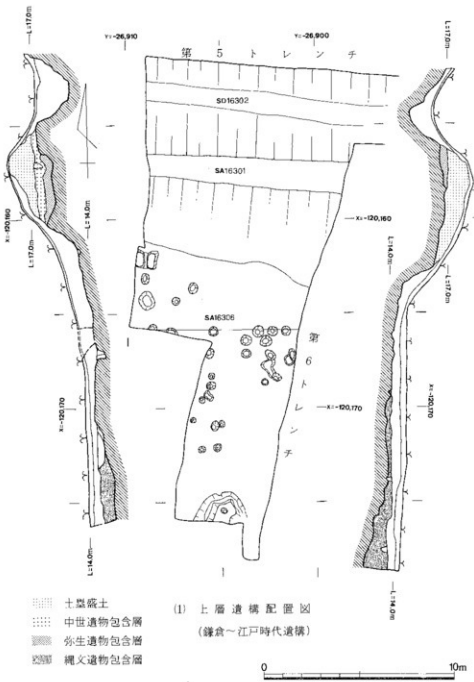
土壙SK16308（第27図，図版24－(3)・(4)）　土塁SA16301の下層から検出された土壙で，トレンチの西端にあり，半分は調査地外に及ぶため，全容は確認できなかった。確認できた部分から，南北方向の長い楕円形の平面形と思われ，長径3.7m，短径1.0m以上，深さ0.4mを測る。弥生時代中期（畿内第三様式）の土器を出土し，鉄剣形磨製石剣が一点伴出した。埋土は上・下の2層からなる。遺物のほとんどが上層の堆積する直前に入ったもので，2層からなる埋土の間にはさまれた状態で出土した。

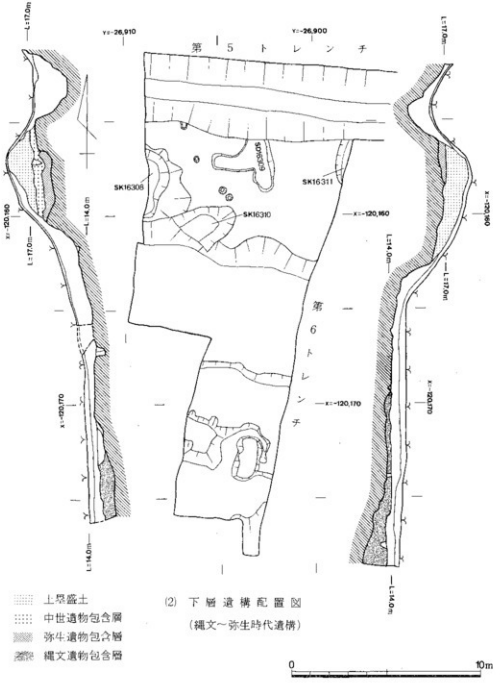
溝SD16309（図版24－(1)・(2)）　土塁SA16301の下層から検出された南北方向の溝で，弥生時代中期（畿内第二様式）の土器を出土した。埋土は1層で，遺物は溝底にまとまって出土した。幅1.2m，深さ0.2mの溝で，北側を空堀SD16302が削っており，残存長は2.8mであった。この溝の西辺の一部から西方へ伸び，T字形をなす。空堀SD16302より北は対象地外であるため当溝がさらに北へ伸びるかどうか，確認できなかった。

土壙SK16310　土塁SA16301盛土下南斜面から検出された楕円形土壙で，北半分を残す。短径2.4m，深さ1.2mの深い土壙で，残存長径2.8mを測る。埋土は1層からなり，弥生時代中期の高坏形土器を出土した。この土壙は，土塁SA16301の南斜面により南西部分

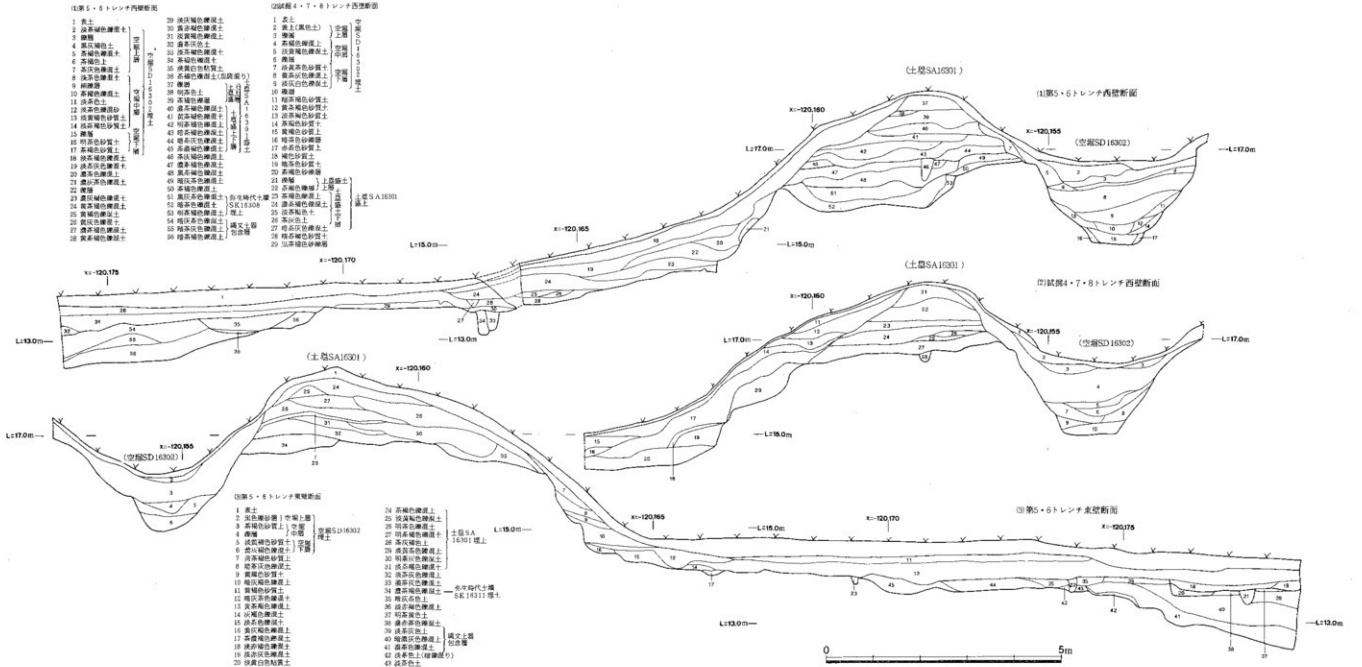


第27図　土壙SK16308





第28図　第5トレンチ西部・第6トレンチ遺構配置図



第29図　第6トレンチ・試掘4・7・8トレンチ土層図

が削られている。このことから，弥生時代の段階では，段丘礫層上面は，現在のような段差はなく，なだらかに南に傾斜する地形であったことがうかがえる。

土壙ＳＫ16311　土塁ＳＡ16301盛土下から検出された土壙である。トレンチの北東端に一部がかかったもので，全形は不明。当土壙検出位置より東は，土取りのための大きな撹乱坑があり，プラン追求を断念した。埋土は１層で，弥生土器の小片が出土した。深さ0.3ｍの土壙で，検出された長さは0.6ｍ，幅は2.5ｍであった。

縄文時代遺物包含層　第６トレンチで南に向って厚く堆積している。黒色系の粘質土で，縄文時代後期の遺物を含む。段丘礫層の上面に堆積した層で，厚さ約0.7ｍを測る。段丘礫層が地盤になっていることと，弥生時代土壙ＳＫ16310の検出状況により，当地の地形が，土塁下の段丘礫上面から当包含層の北端へ，なだらかに傾斜していたことがうかがえる。

第５トレンチ東部（第30・31図，図版19～23）**と試掘９トレンチ**（図版25）

土塁や空堀の残る東端に位置する段丘部分で，土塁ＳＡ16301，ＳＡ16303，空堀ＳＤ16302，ＳＤ16304がある他，神足古墳が発見され，古墳封土下からは弥生時代溝も検出された。また，試掘９トレンチでは，空堀ＳＤ16304と柱の礎石（ピットＰ16312）と思われるものが検出された。このうち，土塁ＳＡ16301と空堀ＳＤ16302は前項で述べたので，必要に応じて付け加えるにとどめ，これ以外について概観する。

土塁ＳＡ16303　第５トレンチ東北端に残る南北方向の土塁（第30図，図版19・20）で，対象地内にある土塁のうち残存高が最も高い。当土塁の東に広がる平野部で調査した第１トレンチの16～17世紀遺物包含層との比高差が約８ｍあり，第６トレンチを設定した平地との比高差は約５ｍある。当土塁のための盛土の高さは約１ｍあり，盛土は上下２層に大別することができる。これは，土塁ＳＡ16301と同様，上層の段丘礫の再堆積と黒色系の土層である。土塁盛土の基底部幅は最大8.5ｍある。当土塁の南西辺は，北西一南東方向の空堀ＳＤ16302によって限られており，土塁ＳＡ16301と区画されている。東辺は，段丘部と平野部との地形変更線を東限としている。この東限は，自然の地形変更線を利用しながらも，当土塁の下層から検出された古墳や弥生時代溝等がことごとくこの変更線で途切れていることや，当土塁東辺斜面が南北方向に直線的であることから，当土塁構築に際して整えられたものであろうと考えられる。西辺は，南北方向の空堀ＳＤ16304によって限られている。当土塁は，この空堀の東側に面した部分が最も高く造られている。北方は削平され，神足保育所のグランドになっており，現状では知るよしもない。空堀ＳＤ16302と地形変更線に挟まれた部分は一段低く，南側に向って狭くなっている。この部分と，空堀ＳＤ16304に東面した最高所との比高差は約２ｍある。またこの狭く，低い土塁部分は，土塁ＳＡ16301の東南端より低く，比高差2.3ｍを測る。

この土塁盛土を除去した段階で，古墳が検出された。

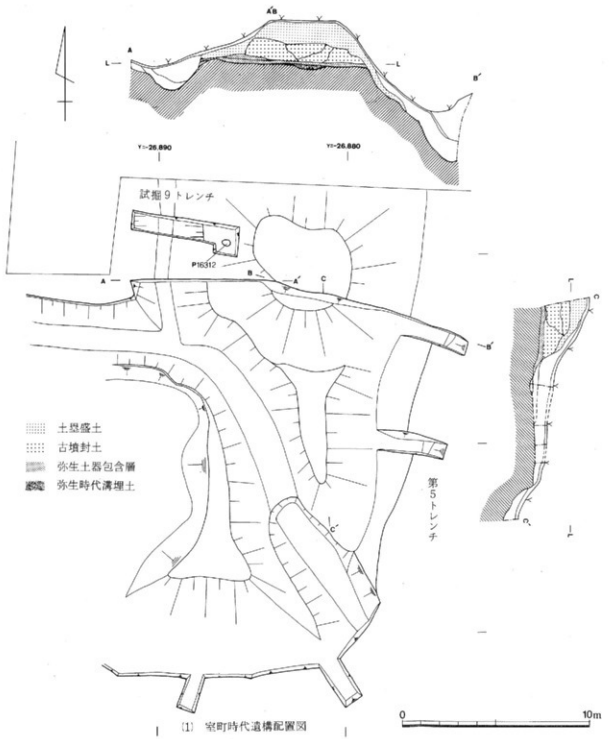
空堀ＳＤ16304　土塁ＳＡ16303の西辺で検出された南北方向の溝である。当空堀は，底

が南に傾斜し，南端で空堀ＳＤ16302と合流している。また，当空堀より空堀ＳＤ16302の方が深く，合流点で落差を設けている。第５トレンチより北では，試掘９トレンチで確認しており，北接する神足保育所用地内に伸びていることは確実である。当空堀は，土塁ＳＡ16303下層で確認された古墳の封土を削って掘られている。その幅3.4ｍ，深さ1.7ｍの規模をもつ。埋土は基本的に３層に分けることができる。すなわち，厚い堆積のみられる下層と，土塁ＳＡ16303からの崩落土と思われる中層，それに最も新しい堆積の上層である。この３層は，さらに細かく分けることができる（第31図―(1)・(2)）。

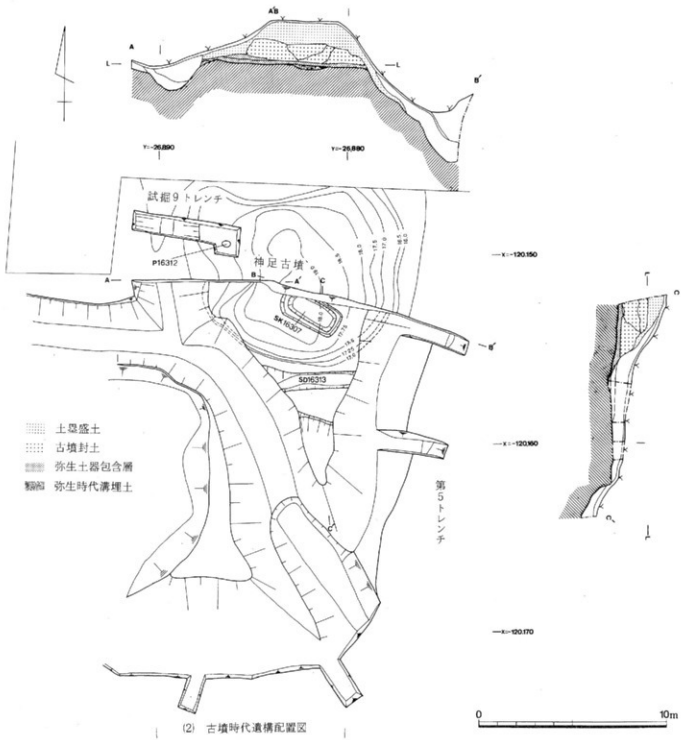
ピットＰ16312　　当ピットは，試掘９トレンチで土塁ＳＡ16303の西斜面から検出された（図版19―(2)・25）。掘り込みは，土塁ＳＡ16303の盛土を削って構築されており，土塁ＳＡ16303の完成後に作られたものである。掘形は，一辺約70cmの方形に掘られており，深さ50cmを測る。ピットの中央に亜角礫の石が置かれていた。石の大きさは，縦横とも約50cm，高さ40cmの立方体に近いもので，平坦な面を上面に向けてそえられていた。掘形があることや，置かれた石の上面が平滑であることなどから，柱の礎石と思われる。しかし，南に設定した第５トレンチからは，これに関連する遺構は検出されなかった。建物跡であるとすると，試掘９トレンチの北と西へ伸びる建物であった可能性がある。当検出位置が，史跡緑地として残す対象地となっていたため，これの追求は断念した。掘形の埋土からは遺物の出土がなく，当ピット設置時期を決定しかねるが，土塁ＳＡ16303や空堀ＳＤ16304と無関係とは思われず，土塁ＳＡ16303へ渡るための橋であったと考えることもできる。

神足古墳（図版19～23）　　土塁ＳＡ16303の下層から発見された古墳である。封土は，土饅頭形に残っており，構築状況がうかがえる。封土の状況は，西側四半部分が厚い３層の盛土で構築されているのに対し，東や南の大半は黒色系の土層と黄色系の土層が，あるいは互層に，あるいは重なり合っていた。構築は，ほぼ水平に少しずつ盛られている。その各層の厚さは，およそ５～20cmで，各層単位の面積は，2.6～0.64㎡前後である。封土は，弥生時代遺物包含層の上に盛られている。封土内からは，古墳時代の須恵器片や弥生土器が少量出土した。このことから構築当時の周辺の土を盛り上げて作られたことがうかがえる。西側四半部分の封土構築は，東から南にかけて見られた封土構築後に盛られている。現存する封土の高さは約１ｍである。当古墳の周辺は，空堀や土塁傾斜面を造り出すために後世の手が大きく加わり，墳形を確定するのに困難な状況である。しかし，主体部検出位置より南約３ｍのところで，東西方向の溝が確認され，あるいはこの溝が当古墳に付随する周溝であろうと思われる。この溝からは，時期を決定する遺物は出土せず，はなはだ怪しいが，この溝を当古墳の周溝とみることが許されるなら，一辺約10ｍ前後の方墳であったと考えられる。

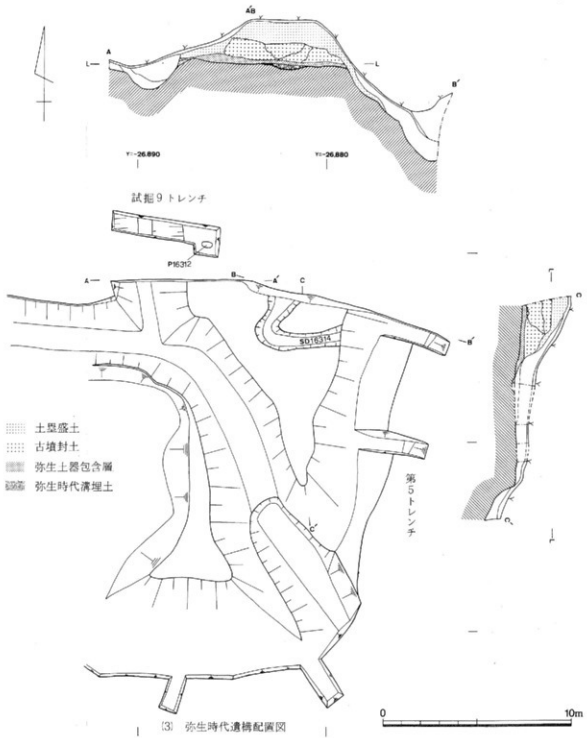
神足古墳主体部ＳＫ16307（第32図）　　神足古墳の主体部の墓壙は，封土を構築した後掘られている。北西―南東方向に長く長方形を呈し，その規模は，長辺2.87ｍ，短辺1.95ｍで，



(1) 室町時代遺構配置図

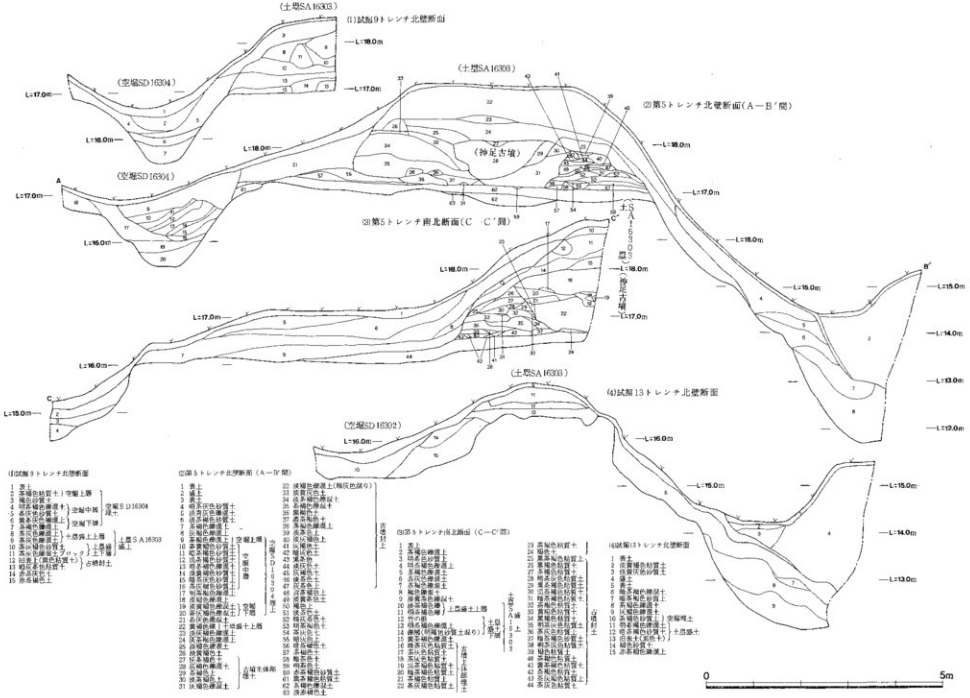


(2) 古墳時代遺構配置図

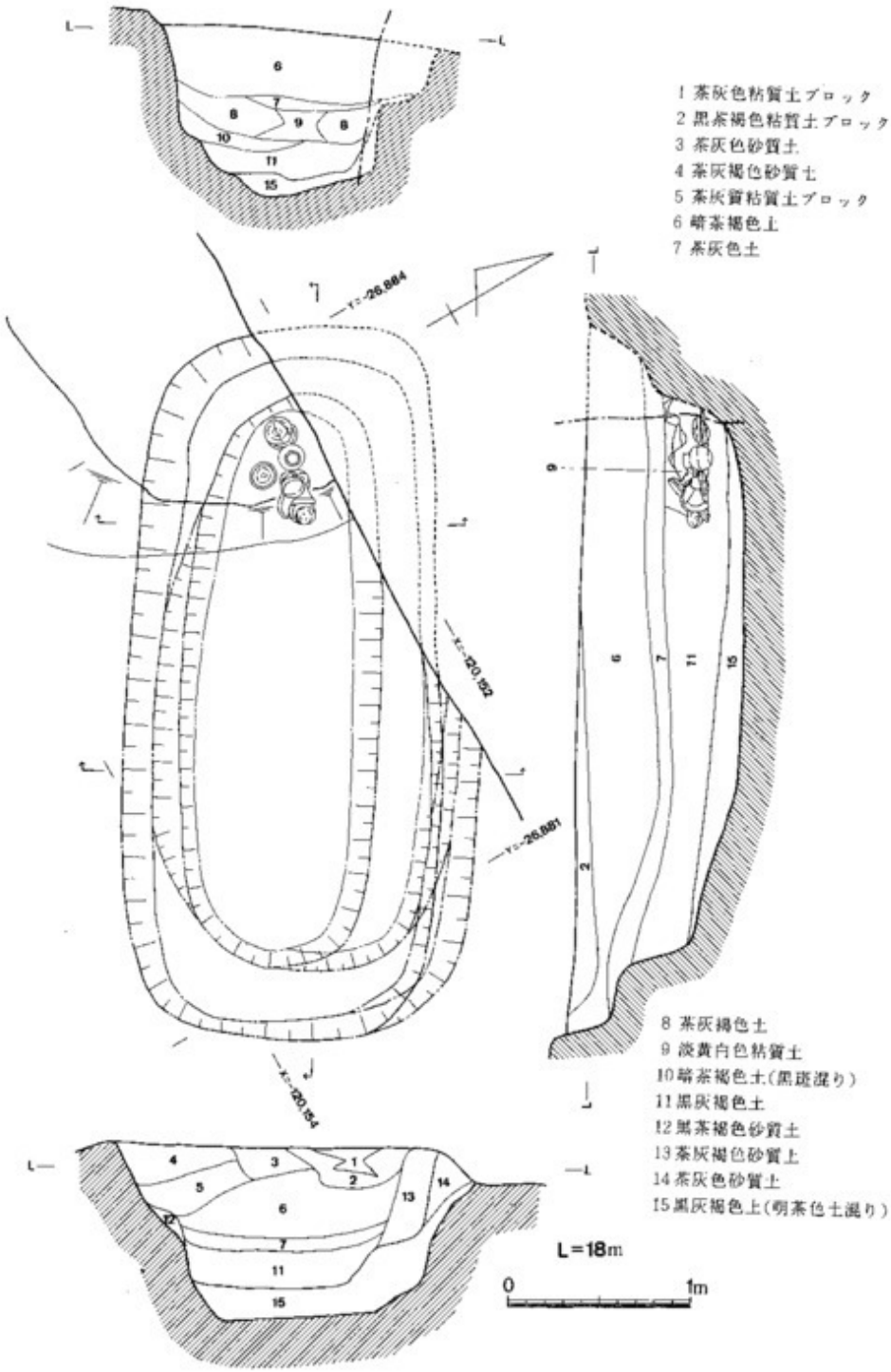


(3) 弥生時代遺構配置図

第30図　第5トレンチ東部・試掘9トレンチ遺構配置図



第31図　第5トレンチ・試掘9・13トレンチ土層図



第32図　神足古墳主体部ＳＫ16307

深さ0.9mを測る。埋土は4層からなる。木質は見られなかったが，木棺埋葬部分と考えられる。また，粘土等による棺固定施設はなく，直葬と考えてよい。主軸をN－60°－Wに向ける。棺の底面は，ほぼ水平で，平坦に掘られている。

墓壙の北西端，棺の小口外に遺物が集中し，完形品の蓋坏，高坏，鹸の須恵器類のみが置かれていた（図版22・23）。これらの遺物は，黄色粘土でくるまれて固定し埋め置かれたものである。副葬された土器群は，南東に接して位置する棺の朽腐のためか，黄色粘土とともに南東へ押し出され，少し移動したことが察せられる出土状態であった（第32図，図版22－(2)・23）。副葬品は，他に土師器高坏が，棺の南西長側辺外側から1点出土している。これらの遺物から，6世紀後半の古墳であることが知られる。副葬土器類の出土位置から，おそらく北西枕として埋棺されたものであろう。

溝SD16313　神足古墳の南に位置する東西方向の溝である（第30図）。幅0.9m，深さ0.1mを測る。西方は窯堀SD16302に，東方は土塁SA16303の斜面に削られており，長さ約5mを確認したにとどまる。埋土は1層で，遺物は出土せず時期は決めがたい。神足古墳の封土が，当溝の北わずか0.1mまで及んでいることから，あるいは神足古墳の周溝であったのかも知れない。

溝SD16314　古墳構築前に掘られていた溝で，U字型に大きく曲がる（第30図）。神足古墳の主体部検出位置の下から東の地形変更線まで伸び，この斜面によって途切れている。検出面は段丘礫層上面で，残存状況はよくなかった。幅約1m，深さ0.2mを測り，埋土は1層であった。遺物は，弥生土器の小片を出土し，弥生時代中期の溝と思われる。

4　ま　と　め

当調査地からは，前項で見たように，縄文時代，弥生時代，古墳時代，平安時代，鎌倉時代，室町時代，安土・桃山時代，江戸時代の8時代にわたる遺構や遺物包含層が検出，確認された。このうち，弥生時代から鎌倉時代にかけての遺構・遺物は神足遺跡に関連するもので，室町時代以後の遺構・遺物は勝龍寺城跡に関するものである。平安時代の包含層には，長岡京跡に関係する遺物も含まれている。古墳時代の遺構には，方墳と思われる古墳があり，縄文時代のものは包含層であったが，いずれも本調査で新たに見つかったものである。以下，時代を追って遺跡ごとに小考を加えたい。尚，本稿では，遺物に関する記述を最少限にとどめた。

(1)　縄文時代　当調査地付近には，確実に縄文時代とされる遺跡はない。当調査地においても，後期の土器包含層が確認されたにとどまり，遺構は検出されなかった。強いて，これに関わると思われるものを上げると，植田小太郎氏採集の鰹節形磨製石器がある。発見地は，当調査地の西方約250m付近で，現在日本輸送機の工場内にあたる。直接結びつける根拠はない。

しかし，氏の報告された実測図から，弥生時代以降のものとは考えにくく，縄文時代の石製品である可能性が高いと思われる。これと，今回発見された縄文時代遺物包含層との関連性を認めることが許されるなら，氏の採集された鳥打畑の遺跡の一端として良いと考えている。しかし，何分にもこの二者を結びつける物的資料にとぼしく，近隣地の，特に当調査地より西方の調査がなされるようになれば，いずれ明らかになるであろうと思われる。

(2)　**弥生時代**　　当調査では，中期の遺構が確認された。この遺構の検出面は段丘礫層上面であり，北接して確認されている神足遺跡の同一面上にある。出土遺物にも時期差は認められず，神足遺跡の一端にあたると考えて間違いない。長岡京跡右京第10次調査として発掘された際には，方形周溝墓８基と土壙墓12基が見つかり，それぞれ群としての分布状況がみられた（第33図）。方形周溝墓群の北側では，同右京第28次調査がなされ，隅丸方形の竪穴住居址が検出された。これらの成果と地形から，神足遺跡にあった弥生時代のムラが復原され，北側に家屋の並ぶ居住域，右京第10次調査地周辺を方形周溝墓群と土壙墓群からなる墓域，これより南あるいは南東に広がる氾濫平野に水田域が想定されている(12)。当調査地は，この墓域の南端から水田域に想定されている所にあたる。今回の調査では，水田域と考えられる平野部の状況は確認できなかったが，墓域にあたる段丘部では土壙や溝が検出された。残念ながら，後世の土取や空堀等により検出面積が狭くなっており，それぞれの遺構の性格について，明らかにならなかった。しかし，検出された溝や土壙の主軸は，右京第10次調査の際に検出された方形周溝墓や溝等の方向と同方向あるいは近い方向を示しており，方形周溝墓の一部であった可能性も捨てきれない。

(3)　**古墳時代**　　当調査では，神足古墳以外に当時代の遺構は確認されなかった。北接する神足遺跡では，長岡京跡右京第10次調査の際に，６世紀後半（TK-43型式）を中心とする住居址群が検出されている。この集落は今回の調査によって，当調査地までは広がっていないことが明らかとなった。しかし，新たに神足遺跡で確認された住居址群とほぼ同期の古墳が見つかったことにより，神足遺跡の集落と当神足古墳のつながりに興味

第33図　神足遺跡周辺図（弥生時代遺構）

を覚える。また，同右京第10次調査の際，住居址群とともに，埴輪円筒棺[13]が一基検出されており，竪穴住居址のひとつには，カマド部分に埴輪片がそえられていた[14]ことなどから，近隣地に埴輪を有する古墳があった可能性も充分考えられることである。

乙訓地域の後期古墳に当神足古墳と共通するものを選出し，比較検討してみよう。当神足古墳の形態は方墳と思われ，主体部は北西一南東方向に主軸をもっている。墳形からみると，方墳は最近になって，長岡京下層遺構として数を増しつつある。例えば，埴輪をもつ南栗ケ塚古墳[15]，埴輪はなく木棺直葬の長岡京市小西古墳[16]の他，向日市山畑古墳群[17]などがある。いずれも当古墳より一型式以上古い時期のものである。このうち，小西古墳は当神足古墳と同様に封土を残し，副葬土器の設置位置に共通する所がある。主体部の墓壙は当古墳より浅く，わずか0.1mであり，墓壙及び棺の底面をわずかに残す状況であった。ただ，地山層を掘り込んでいない点は共通している。小西古墳の場合，主体部は北西一南東方向にあり，土器の副葬位置は北西棺外小口であった。主体部主軸や土器の副葬位置も，当神足古墳と共通する。このように，小西古墳と共通する所が多い。副葬土器が小口の一端に集合させて置かれている例は，長岡京市開田古墳[18]周辺地にも見られる。このように，当神足古墳の埋葬形態は6世紀代に当地方で行われていた木棺直葬墓の一般的なあり方を示していると考えてよかろう。一般的と言うのは，木棺直葬墓には必ず副葬土器を置くという意味でなく，木棺直葬される古墳に須恵器を副葬する場合，主体部棺外の片方小口に集積埋納することを慣例としていることを示す。また，木棺直葬墓が，6世紀代の一般的なあり方であるのではない。当然のことながら，古墳の大小や，横穴式石室や木棺直葬等の内部構造，副葬品の質や量等の違いがあり，当時の社会を構成する複雑化した階層差の現われを反映していると考えている。

(4) **平安時代**　当調査地は，平安時代初期（長岡京期）の長岡京跡右京六条一坊四町に位置する。このため，長岡京の統一的調査という意味合いから，本調査を，右京第163次調査として実施した。長岡京跡右京第10次調査では，右京六条一坊三・四町の推定2町分にまたがって調査されている。右京第10次調査では，建物跡や井戸が検出されており，宅地割りの三町と四町を区割りした施設はなかった。このことから，六条一坊の三町から四町にわたる広い宅地が班給されていることや，墨書土器や帯飾り等が出土していることなどから，高級官人の邸宅と思われ，この調査の報告者は，藤原是公または継縄の邸宅ではないかと推定している。たとえ誰の邸宅にしろ，高級官人に班給せられた土地であることは否定できまい。そして，当調査地もまた，この班給宅地内の一画（右京六条一坊四町の南部）に含まれている。

しかし，遺物は出土したものの，遺構は検出されなかった。その要因は，中・近世の空堀や土塁等の開発行為に起因する部分がある。すなわち，空堀の掘削や土塁斜面の整形，周辺地の切土による整地等による消失である。

ところが，前に記したように，長岡遷都以前の遺構が残っていることから，完全には破壊さ

れていないと思われる。特に，高さ約１ｍの封土を今に残した神足古墳は，長岡京に都を移して後，右京第10次調査で確認された土地が邸宅化されても壊されなかったことを，如実に物語っている。これは，神足古墳が段丘端部に築かれ，これより東が低湿地であったため宅地造成の手が及ばなかったのか，あるいは藤原是公等のような高級官人の邸宅内に，庭園として残されていたためなのか，明らかにすることはできなかった。

平安時代前期（平安京期）には，平野部で包含層が確認されたにとどまり，遺構は確認されなかった。しかし，出土遺物に長岡京期から続く時期のものもあり，長岡京廃都とのかねあいに興味が持たれる。

(5)　**鎌倉時代**　　当調査地周辺は，条里跡を良くとどめている。「主殿寮要劇田坪付注進状」には神足里が見られ，建保４（1216）年に現地名として残る神足が里名として使われていたことがわかる。(19) この時期より少し降り，13世紀後半の遺物や遺構は，当調査地及び長岡京跡右京第10次調査として行われた地点の周辺部に広がっている。当調査地内からは，建物跡など，遺構の性格が明らかなものは確認されなかったが，意味不明のピット群が検出されており，当時の集落の一端であった可能性は高い。長岡京跡右京第10・28次調査として実施された神足遺跡の調査では，井戸一基と，墓と思われる土壙数基，それにピット群が検出されている。土壙墓と思われるものには，副葬品の有無により２大別することができる。これらの上部構造については，知るすべもないが，中には青磁等を副葬したものもあり，(20) 荘園の内部にみられる名主あるいは田堵クラスの墓を含んでいるのかもしれない。いずれにせよ荘園としての記録はないものの，当地域は京に近く，政変にも敏感であったろうし，農村も先進的であったと思われ，結束しつつある農民たちの村の一端であろうと考えられる。

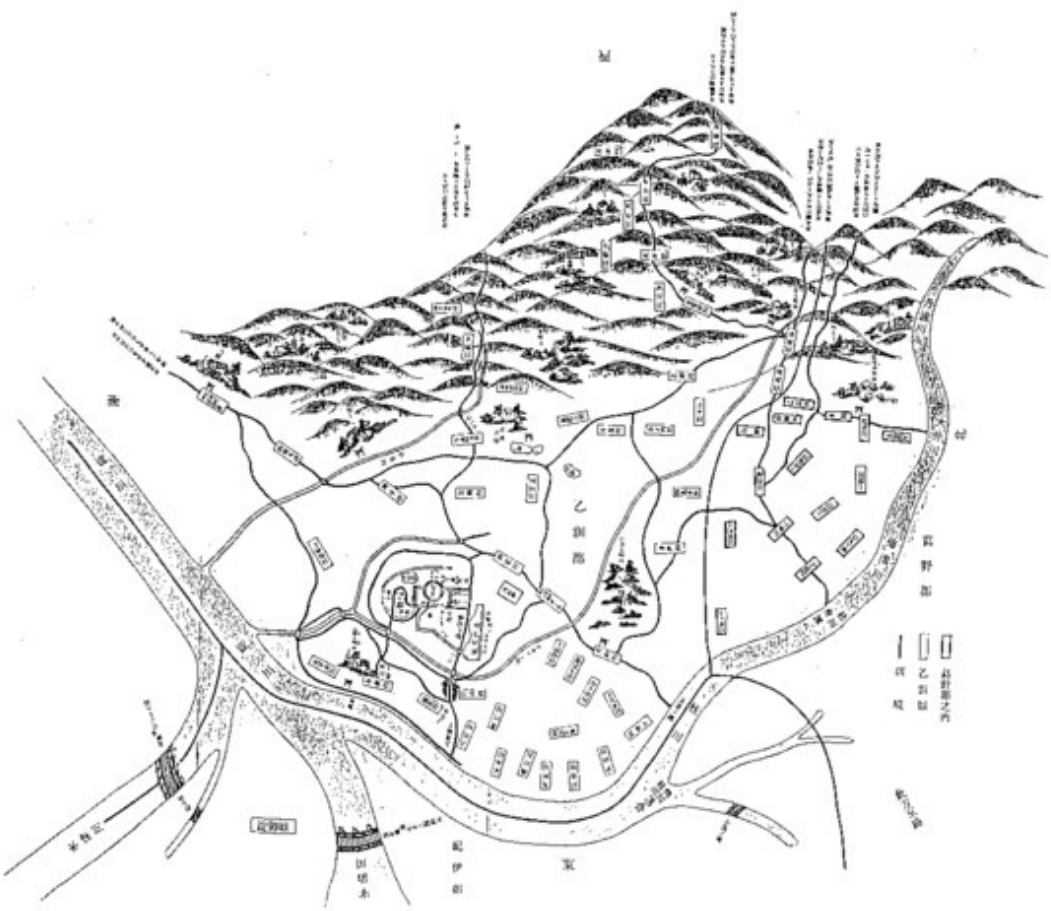
(6)　**室町時代**　　鎌倉幕府滅亡後，南北朝期を迎えると，当調査地周辺の神足を本拠とした有力者＝神足左近次郎信朝が活躍する。建武３（1336）年に北朝方の足利尊氏が京に入った時，信朝は御家人となり，尊氏からの催足をうけ，これにこたえている。(21) この時期の遺物も，当調査によって少量ではあるが出土している。長岡京跡右京第10・28次調査として行われた神足遺跡では，前項で述べた井戸の廃棄時期や一部の土壙の時期等に，ほぼ併行するものであろう。これらの遺構や遺物は，尊氏の御家人となった神足氏が領主として支配していた一部であり，神足氏の館も当調査地に近かったであろうと思われる。

後醍醐天皇は，親政を回復せんがため吉野に朝廷を開いた。この南朝方が八幡市男山周辺に出没し，光明天皇の北朝方を脅かすため，尊氏の一族の細川頼春・師氏が暦応２（1339）年に勝龍寺城を築いたという。(22) これが，当調査地の南西約200ｍの位置に残る本丸跡の始めである。築城にあたって御家人に加えられていた神足信朝（友）等，神足氏による尽力もあったことは間違いなかろう。信朝は観応の争乱の後年，正平７（1352）年の足利義詮による八幡攻めに際し，淀大橋を警固したという。

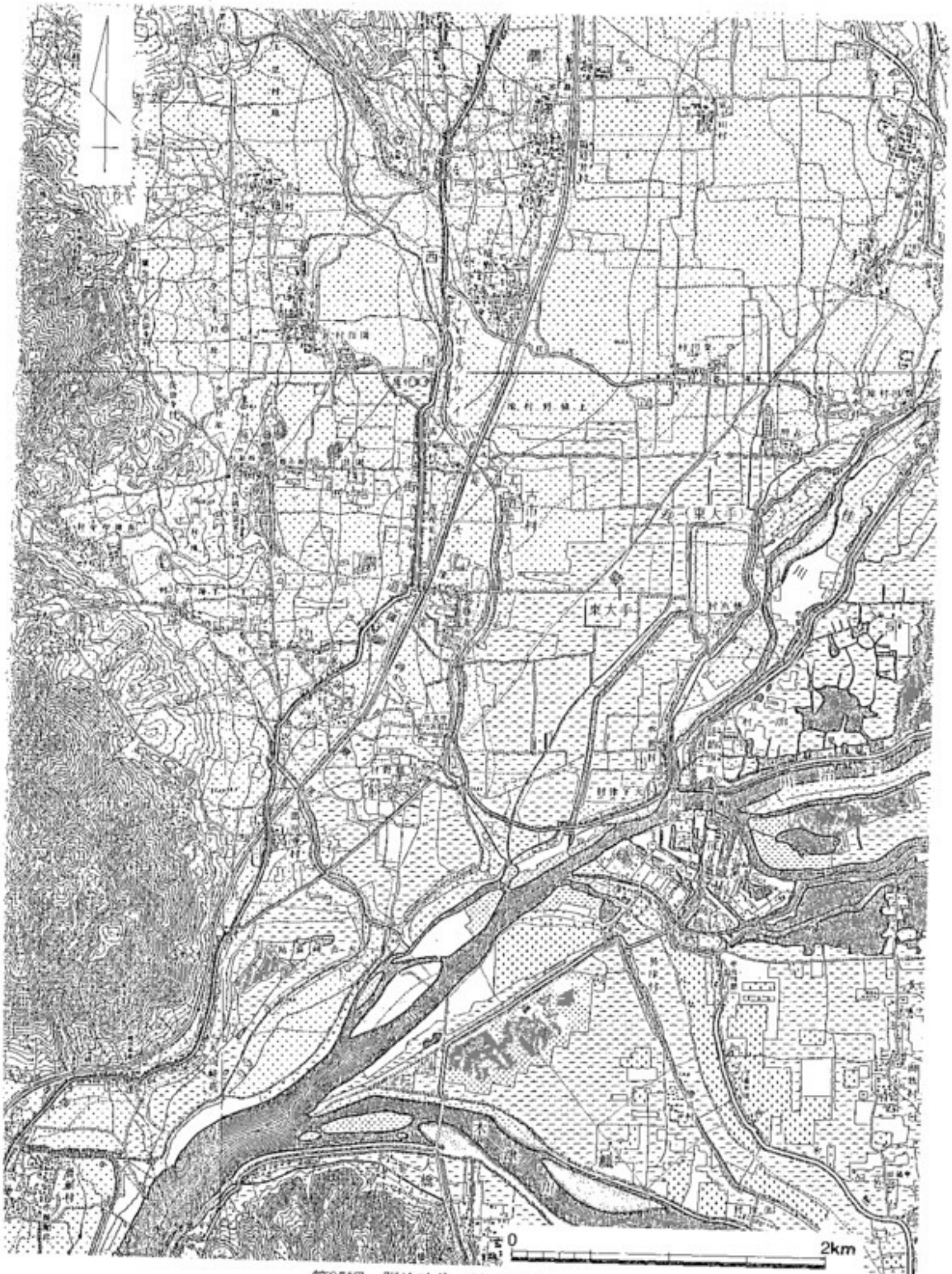
当所は，西に山陰・山陽道を結ぶ西国街道，東に山陽道から京都を直線で結ぶ久我畷があり，交通の拠点となる所である（第35図）。さらに，当西岡地方を抑えることが，西国地方からの最大の防御となるとともに，西国地方への退路の確保にもなる重要な場所であったといえる。

現在，当調査地の東側を南流する小畑川は，後述する細川家蔵「山城国西岡御領知之地図」（第34図）に「ホウサイ川」と記されている。中山修一氏によると，この「ホウサイ」とは，細川頼春の弟師氏の別号「豊財」の意であり，もともと向日市「上植野の川原町の方から，菱河，古河方面に流れていた」水路を，細川氏によって現在の水路に付け替えられ，勝龍寺城の外堀としたのではないか[23]といわれている。

応仁の乱に至っては，乙訓地域でも山名宗全のひきいる西軍側と，細川勝元ひきいる東軍に分かれ，戦火の渦に巻き込まれた。勝龍寺城は，西軍が西岡地方の制圧にのり出してきて文明元（1469）年，畠山義就の拠城となった。この段階までは，将軍家執事細川勝元一族の城であったであろう。西岡地方を圧するため，当城を整備したものと思われる。しかし，戦火の続く中，



第34図　山城国西岡御領知之地図



第35図　明治時代の地図と古道

さほどの手入れはできなかったと思われる。文明2年には，西軍にある西岡の国人野田泰忠らが，勝龍寺城搦手北口を攻めたという。この搦手北口の位置は，当調査地の西方約350mの位置，現在の国鉄東海道本線あたりかと思われる。

応仁の乱は，山名と細川が講和をかわし，赤松政則や畠山義就らが兵を引き，諸軍が帰国した文明9（1480）年に終結した。

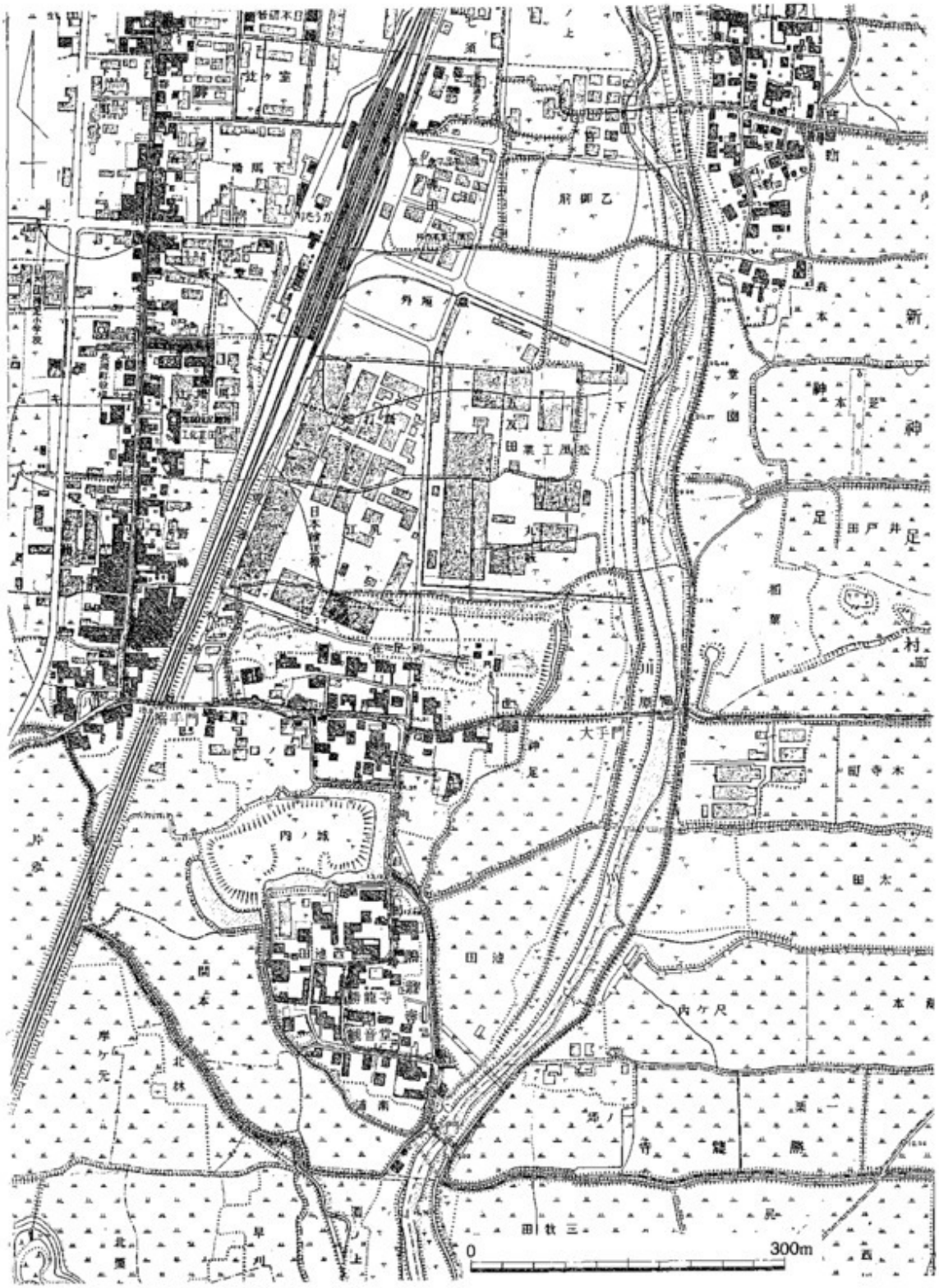
その後，城主が転々とした。戦国時代に入って，将軍足利義昭は，織田信長をたよって将軍家復活を図ろうとしていた。永禄3（1560）年当時石成友通を城主とする勝龍寺城を，寂照院に陣取った信長が柴田勝家らを従えて討ちとり，西岡を制圧した。義昭が信長の力で京都を回復し，柴田勝家の功により勝ち取った当城は，再び細川家の居城となった。永禄5（1562）年のことである。細川藤孝は，信長に当城の普請を許されて，元亀2（1571）年に増改築を行った。この改良により，今までの中世平城から，近代的な城に生まれ替わったといわれている。

先の資料「山城国西岡御領知之地図」（第34図）を，今少し細かく分析して，明治12年の大日本帝国参謀本部陸軍部陸地測量部の地図（第35図）と比較すると，おどろくほどに正確に描かれていることが知られる。

この図は，細川藤孝の居城していた段階の姿を現わしている。この図には，主要幹線である西国街道，久我縄手（畷）が見られる。また，山陽道から西国街道に至り，調子村から分かれて長岡天神の東を経由して老ノ坂口（沓掛村）で山陰道と合流する丹波道もあり，重要な交通路であったと思われる。

勝龍寺城周辺を見ると，城の東西と南は川によって守られ，北辺にはカラホリを設けて外堀としている。西辺から南辺を周り現在の小畑川に流れ込んでいる川は犬川であるが，東辺を南流する川はホウサイ川と記されている。ホウサイ川については前に述べた通りであるが，この川には，東西方向の北を防御する外堀の東と，城の南東に橋が設けられている。南側の橋は大門橋といい，この付近に大門があったとされている。北側の橋を渡って東へ進み，久我縄手と合流する所に東大手の名が記されており，この橋付近に東大手門が考えられている。当城から出るもうひとつの道は，東大手門の真西にあり，「西ノ口」という旧小字名から西国街道への門があったと思われる。この門は，応仁の乱の時に合戦があった勝龍寺搦手北ノ口にあたると考えられ，搦手門の所在位置に想定されている。

藤孝は信長の許しを得て，周囲に堀と空堀をめぐらし外堀としている。これより内の城内を見ると，本丸を郭とし，その南西側に沼田丸の名が記されている。これを囲むように，松井，米田，中村，築山，沼田各屋舗が記されている。細川氏一族の有力な家臣達の名が，具体的にしかも屋舗の位置までも知ることができる。いずれも北西の搦手門と北東の大門推定位置を結ぶ東西道より南に位置している。この道と城の北限を画する外堀との間には，神足尾舗があり



第36図　大正時代の地図に表された勝龍寺城

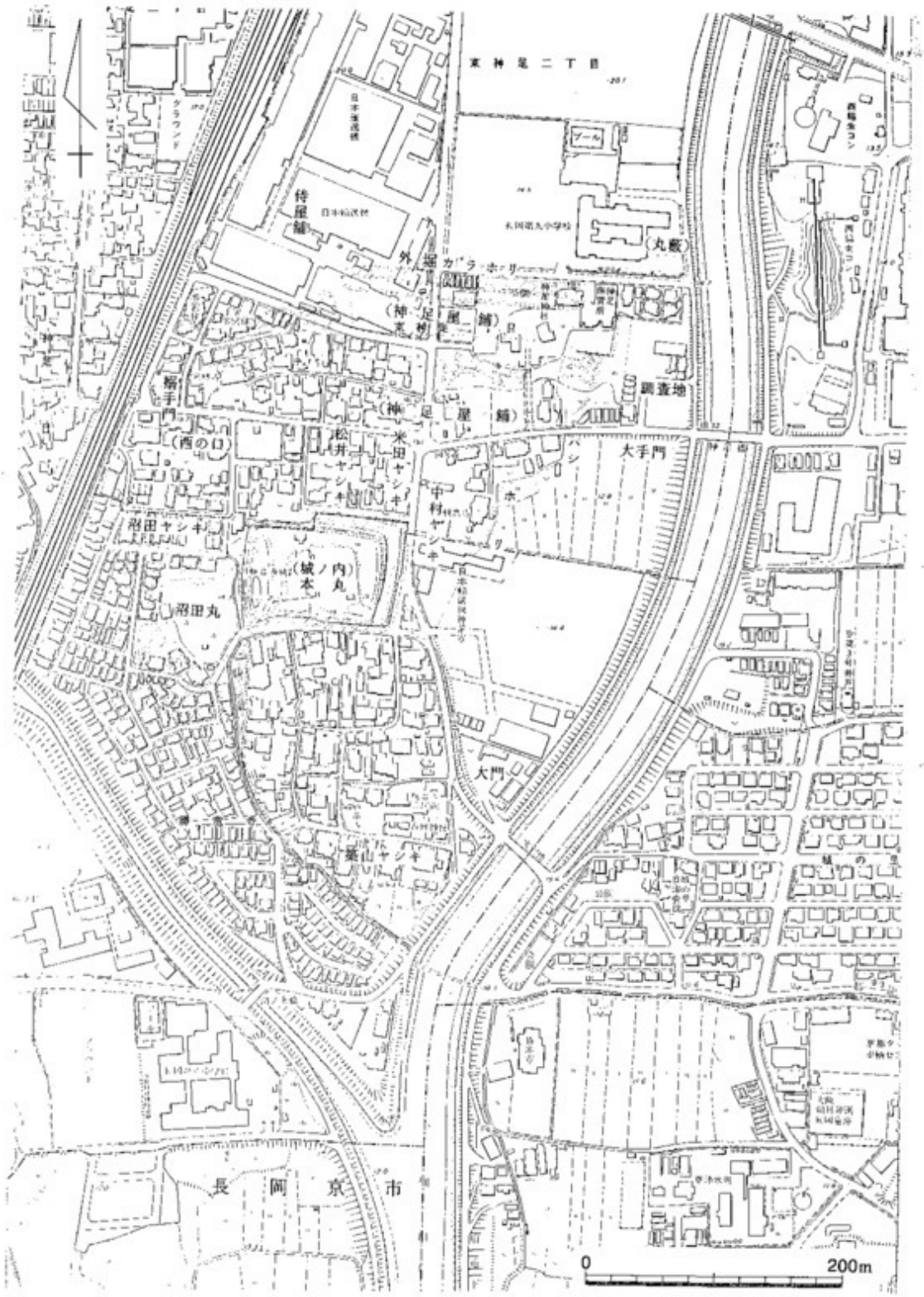
外堀より北西位置に侍屋舗が記されている。これらの位置関係も，大正11年測図の京都市土木局都市計畫課修正地図（第36図）とよく付合する。

当調査地は，城の北を守る東西方向の外堀の東端やや南側に位置し，神足屋舗の構えられた東隅にあたる。図によれば，当調査地の第２～４トレンチで検出された16世紀の溝ＳＤ16305－Ｃは，その位置関係から中村ヤシキの東にあった南東－北西方向ホリの北端近くを検出したものであろうと思われる。京都市土木局都市計畫課の大正11年測図（昭和10年修正測図）の地図（第36図）には，当調査地の北側に，東西方向に長い高まりが表現されており，この北には空堀の痕跡らしい落ち込みが見られる。これが細川氏の図に書かれた外堀であり，この空堀にそって土塁が設けられたのであろう。では，第５トレンチ設定位置に残っていた空堀ＳＤ16302と土塁ＳＡ16301には，どのような目的があったのか。土塁の北側にそって空堀があることから，北側からの防御を考えて構築されていることは確かである。この土塁と空堀は，神足神社の参道を挟んでさらに西へ続く。空堀跡には土橋と思われる陸橋部分があり，このすぐ西側で土塁と空堀が北へ屈曲し，いわゆる横矢掛りになっている。この施設は，細川氏の図に表わされた外堀と平行して築かれていることから，全く無関係とは思われない。北側の土塁と空堀が，あまりにも直線的であることから，調査地内に残っていた土塁と空堀は，北側からの攻めに対する第２の防御ラインとして設置された施設である可能性も考えられよう。もし，そうであるなら，細川氏の図に書かれた神足屋舗は，調査地内に残る土塁より南に想定される。そして，第６トレンチで検出されたピット群は，これに関するものである可能性がある。また，細川氏の図で見る限り，北と南を土塁で囲まれた現在の神足神社周辺に神足屋舗を比定することもできる。このように想定すると，天正元（1573）年に信長勢によって落とされたと伝える神足城は，南北を土塁によって囲まれた神足屋舗を示すと考えることもできる。そこで問題なのは，勝龍寺城との関係である。はたして，信長より城の改修許可を得てわずか２年後に，細川氏の同城内に屋舗を置く神足氏が信長勢に討たれる状況を，どう理解すればよいのであろうか。このことからすれば，後者の位置に神足屋舗を想定する方がありえることと思われる。また，この神足城落城の段階で，神足屋舗をも含めた勝龍寺城が完成したと見ることもできる。

これらの調査成果と細川氏の図を合せて，現地形図に表わしたのが第37図である。一見してわかるように，本丸及び沼田丸の位置がわかる程度で，土塁等の痕跡は知ることができなくなっている。本丸や沼田丸を巡る濠も，ほとんど埋め立てられてしまった。しかし，現地では，当調査地から西方へ伸びる土塁や空堀，土橋等は今でも良好な姿を見ることができる。

ところで，この勝龍寺城築城にあたり，どのような立地に，地形をどのように利用し，どのように変えたのであろうか。

細川氏の図に記されたホウサイ川については，先に述べたとおりである。第１トレンチで見られたように，当調査地の東半部にある平野部分では，勝龍寺城築城前は水田地に使われてい



第37図　現地形と勝龍寺城

たと思われる。この水田は13世紀前後の時期が考えられる。ところが，この下には，川の流れによる堆積と思われる礫あるいは砂礫層が厚く認められた。すなわち，ホウサイ川が造られる以前に，当所を流れる（又は大きな氾濫を引き起こした）河川があったことが推定されるわけである。この川の流路移動により，13世紀以降，勝龍寺城の時期を経て現在に至るまで，付け替えられた現在の小畑川の氾濫にみまわれながらも水田耕作が続けられている。このような氾濫平野は，ホウサイ川の堤防切断による人工洪水を意図して，防御に利用されたと思われる。

ホウサイ川と犬川に挟まれた城の主要部は，舌状に北から伸びる段丘部にあり，本丸はその先端部近くに位置している。本丸の南東部には「池田」という小字名をもつ水田地があり，地名からして低湿地であったことがうかがえる。西側は犬川による狭い氾濫平野がある。本丸を囲む濠は，まるで段丘の先端部を切断するかのように掘られている。

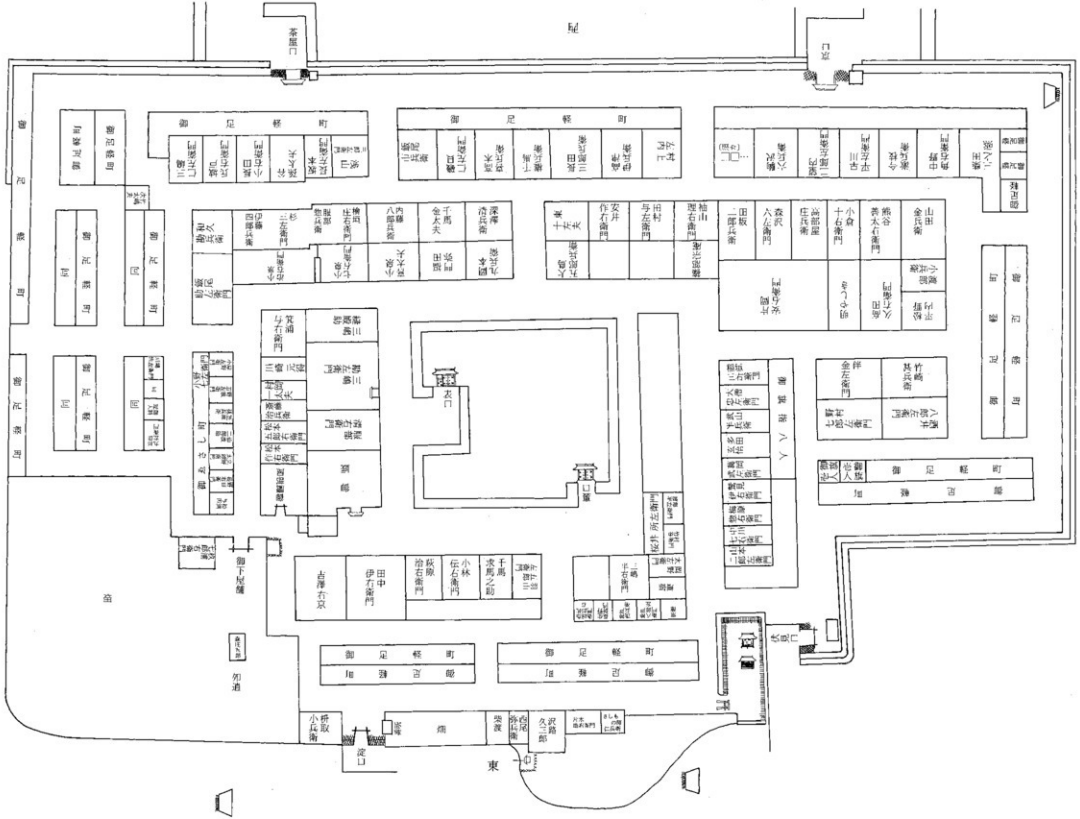
土塁や空堀を残す位置より以北は，土塁ＳＡ16301の南斜面以南より一段高くなっている。この落差は人工的に作り出された落差であり，第６トレンチからの遺構の検出状況から室町時代以後の所産であることが明らかになった。元来は南にゆるやかに傾斜する地形であったと思われる。おそらく神足屋舗等の建築に伴い，地面を平坦地化するために，切土造成されたためであろう。

このような自然地形を利用し，あるいは造成して，以前までの中世平城から，今も痕跡を残す近代的な城郭に変貌させたのが，細川藤孝であったと思われる。

(7)　**安土・桃山時代**　　織田信長を本能寺で倒した明智光秀は，急を知って上洛する羽柴秀吉を迎えうつため，勝龍寺城を処点とした。光秀軍は御坊塚[24]にまで進んで本陣を置いた。しかし，この天正10（1582）年の山崎合戦に敗れて一度当城にもどり，夜中には脱出した。翌日その秀吉が入城したという。この時期の遺構と判るものは，当調査では確認できなかった。しかし，細川藤孝が大増改築工事を行ってから，わずか11年後のことであり，16世紀後半の遺物を多く出土した外堀（溝ＳＤ16305－Ｃ）やその他の施設も，充分に機能を果していたと考えられる。また，16世紀後半として捕えている遺物の中には，当時のものも含まれていると思われる。

(8)　**江戸時代**　　徳川三代将軍家光の時，寛永10（1633）年，書院番頭永井日向守直清は，勝龍寺へ移り，書院番を解かれたという。この記事は，直清が勝龍寺に入ったのか，あるいは勝龍寺城主となったのか定かでない。いずれにせよ，城跡を修築したことは確かである。第38図[25]は，その計画図と思われるものであるが，全体の位置と立地状況を見合わせると，無理な点が多く見出せる。この図を基に実行するには及ばなかったのであろう。しかし，この図からは，直清の重臣たちの名[26]や，城内の守りを見ることができる。

この図には，細川氏の図に見られなかった神足神社が記載されている。この南側に参道を示す鳥居が見られ，周囲を方形に土塁が巡らされている。現在も，当調査対象地の北西部に神足神社があり，先に見た細川氏の図に表わされた城の北限土塁と，当調査地内から西方に伸びる



第38図　永井氏の勝龍寺城改築計画図（長岡天満宮宮司中小路宗康氏所蔵）

土塁とに囲まれており，現況と合致する。

このようなことから，永井氏の図は計画倒れに終ったとはいうものの，当時の状況を最大限に利用して改良を加えたと思われる。また，永井氏の家臣たちの家が低地にあり，洪水時によく浸水をおこすことから，北側の台地上に移すことを許されている。

第２～４トレンチで検出された外堀（溝ＳＤ16305－Ｂ）は，17世紀の遺物を出土することから，この時期に掘り直されたものであろうと考えることができる。そして細川氏の時期に城の北側を２重構造の防御とした土塁や空堀は，永井氏の時においても，そのまま利用されたことは確かのようである。当勝龍寺城は，永井直清が慶安２年に高槻城へ転封されるのを最後に，文献から姿を消し，城館としての役目を終えてしまう。その後今日に至るまで竹林・雑木林・田畑として開削されて行った。そして，明治に国鉄東海道本線の開通，第２次大戦に伴う大工場の建設などが相次ぎ，昭和に入って高度経済成長とともに宅地化が進み，今日の宅地開発に伴う調査に至った。

以上のように，８時代の歴史的経過を遺跡に残し，調査地内から各時代の遺構や遺物が確認され，歴史のパノラマを見ているかのごとくであった。しかし，本丸周辺以外では，当調査地の西方に伸びる土塁と空堀及びこの空堀にかけられた土橋が現存するのみとなっている。地下に埋った堀や本丸をとり囲む濠，削られた土塁など，地上に現われていた遺構でさえ姿を消しつつある。この時代の流れの中で，発掘調査により記録を残した跡を削られて行く姿を見るのは虚しいものである。神足古墳と勝龍寺城の土塁ＳＡ16303が重複していた部分の断面（第31図－(2)）は，古墳と土塁を観察する上で重要なことから，京都府教育委員会奥村清一郎技師の指導のもとに樹脂による断面剝ぎ取りを行った。

注１）現地調査に参加協力いただいた方は，以下のとおり。記して感謝する。

作業員―岩崎又男，岩岸三郎，田中寅吉，高橋治一，中村正雄，麻田安太郎，天野菊次郎，井本千代治，池末安秀，佐藤昭三，他多くの方々の協力を得た。

補助員―朝場秀明，島田吉男，花村潔，辻林磨宏，山田剛

２）本書に掲載した写真のうち，調査前の写真のほとんどが牛島茂氏の手によるものである。

３）本書作成にあたり，渡辺美智代氏はじめ，多くの方々の協力があった。その詳細は以下のとおりである。記して感謝する。

整理作業―安藤道子，小畠絢子，中西美奈他，トレース―桂光良，花村潔，山田剛，辻林磨宏

４）植田小太郎「京都府長岡町出土の鼈節形磨製石器」（『史想』10号，1959年）

５）三上貞二，坂下勝美「京都府乙訓郡長岡町神足遺跡略報」（『史想』11号，1961年）

６）山本輝雄他「長岡第九小学校建設にともなう発掘調査概要―長岡京跡右京第10・28次調査（７ＡＮＭＭＢ地区）」（長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書』第５冊，1980年３月）

７）注６）の文献では，須恵器の時期決定を森・石部編年を採用しているが，当報告では田辺編年に改めている。このため注６）に報告された年代と異なっている。

森・石部編年—森浩一・石部正志「後期古墳の討論を回顧して」（古代学研究会『古代学研究』30号，1962年）

田辺編年—田辺昭三『須恵器大成』角川書店，1981年7月

8）吉田東伍『大日本地名辞書』，1900年3月

9）木下良「西岡地方における城館と防御集落」（『京都社会史研究』，1970年）

10）城主として入ったものではないとする説もある。しかし，永井直清の城内配置計画図（第38図）があることから，居城したことが確認される。

11）今谷明「勝龍寺城」（新人物往来社『日本城郭大系』第11巻，1980年9月）ほか。

尚第2図は，京都考古学研究会測図による。

12）長岡京市教育委員会『掘りおこした郷土史』，1979年3月

13）注6）掲載の墳輪円筒棺ＳＸ1086

14）注6）掲載の竪穴式住居ＳＢ1076

15）岩崎誠「長岡京跡右京第39次（７ＡＮＱＭＫ地区）調査概要」（長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書』第11冊，1983年3月）

16）1981年，長岡京跡右京第72次（７ＡＮＧＫＳ地区）調査の際，発見された。

17）都出比呂志「小規模古墳の群集」（京都府向日市『向日市史』上巻，1983年3月）

18）白川成明他「第82103次（７ＡＮＫＹＤ地区）立会調査概報」（財団法人長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和57年度，1983年3月）

19）金田章裕「条里プラン」（京都府向日市『向日市史』上巻，1983年3月）

20）注6）掲載の土壙ＳＫ2806

21）「神足家系録」熱田公「南北朝の動乱」（京都府向日市『向日市史』上巻，1983年3月）

22）岡本良一「秀吉の時代」（京都市『京都の歴史』4，1969年10月）

この説は，注8）に書かれたのが初めと思うが，木下良氏がこの説を裏付けている。

（木下良「西岡地方における城館と防御集落」（『京都社会史研究』，1970年）

23）中山修一『勝龍寺城』（乙訓の文化遺産を守る会『勝龍寺城—住民の運動で史跡公園を／－』1974年2月）

24）御坊塚の位置に関しては，現在の恵解山古墳とする説と，大山崎町字下植野小字境野周辺とする説がある。

25）永井氏の当図は，福岡市在住の三嶋秀三郎氏から長岡天満宮宮司小路宗康氏へ寄贈されたものである。

26）永井氏の当図に書かれた家臣たちの名は，中山修一氏のご尽力により高槻市　市史編さん係を訪れることができ，同係長門川繁夫氏と同係富井康夫氏のご協力により，すべてを解することができた。記して感謝したい。

尚，本書作成にあたり，『細川家記』『細川文書』『野田弾正忠泰忠軍忠事』『応仁別記』『山州名跡志』『山城名城巡行志』『後鑑』『徳川実紀』『永井家文書』等を参考にした。また，桑原公徳著「中世城郭の復原」（学生社『地籍図』1976年11月），村田修三著「勝竜寺城外郭の城郭史上の意味」（京都の文化遺産を守る懇談会『勝竜寺城跡』京文懇だよりNo.11，1984年3月）等にも，多くのことを教えられた。

第２章　長岡京跡右京第164次（７ＡＮＩＴＴ−９地区）調査概要

−今里遺跡・今里車塚古墳−

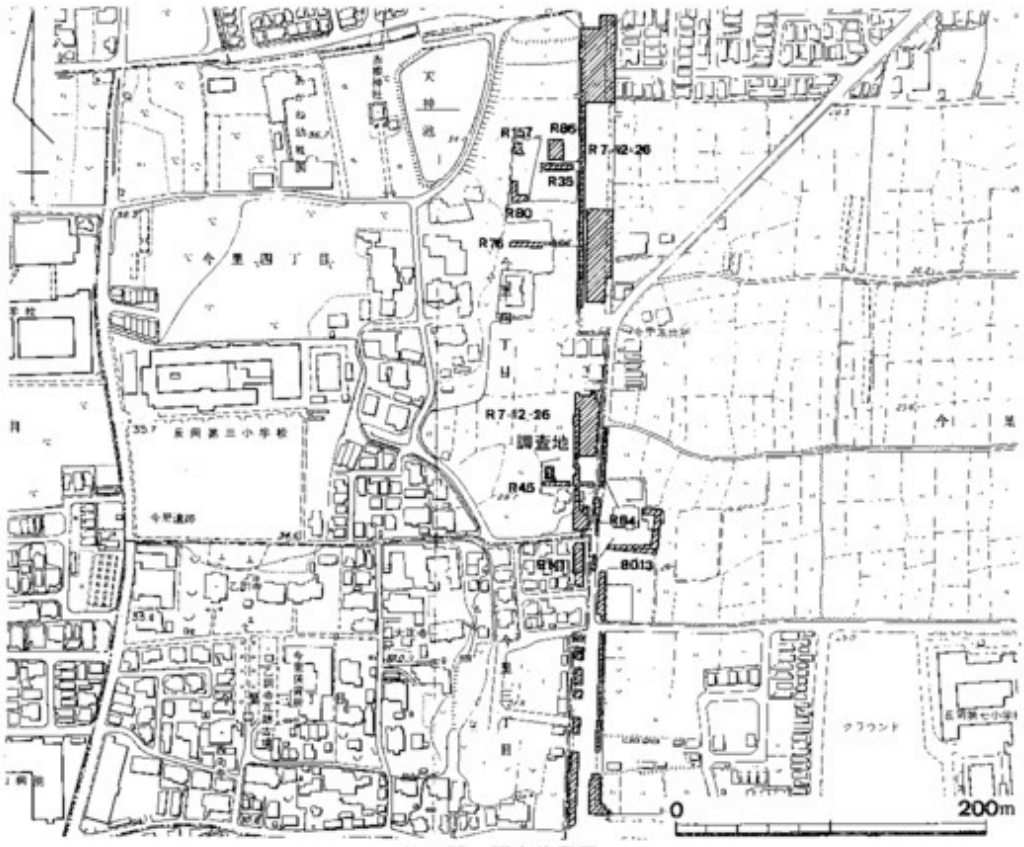
１　は　じ　め　に

1　本報告は，昭和59年度国庫補助事業として1984年５月25日から1984年６月５日まで長岡京市今里四丁目３−４において実施した長岡京跡右京第164次調査に関するものである。

2　調査は長岡京市教育委員会が主体となり，財団法人長岡京市埋蔵文化財センター調査員木村泰彦が担当し，調査補助員，調査作業員として多くの方々の協力を得た。(1)

3　調査実施にあたり，土地所有者である㈱丸義製作所，㈱サタケ工務店や周辺住民の方々からは種々の御協力を得た。また，調査中には中山修一氏（京都文教短期大学教授），高橋美久二氏・橋本清一氏（京都府立山城郷土資料館），吉岡博之氏（舞鶴市教育委員会社会教育課）から御指導，御援助を賜った。又，財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターからは周辺図の提供を受けた。記して感謝の意を表したい。

4　本報告の執筆・編集は木村が，図面整理・トレースは辻林磨宏・中井正幸が行った。



第39図　調査位置図

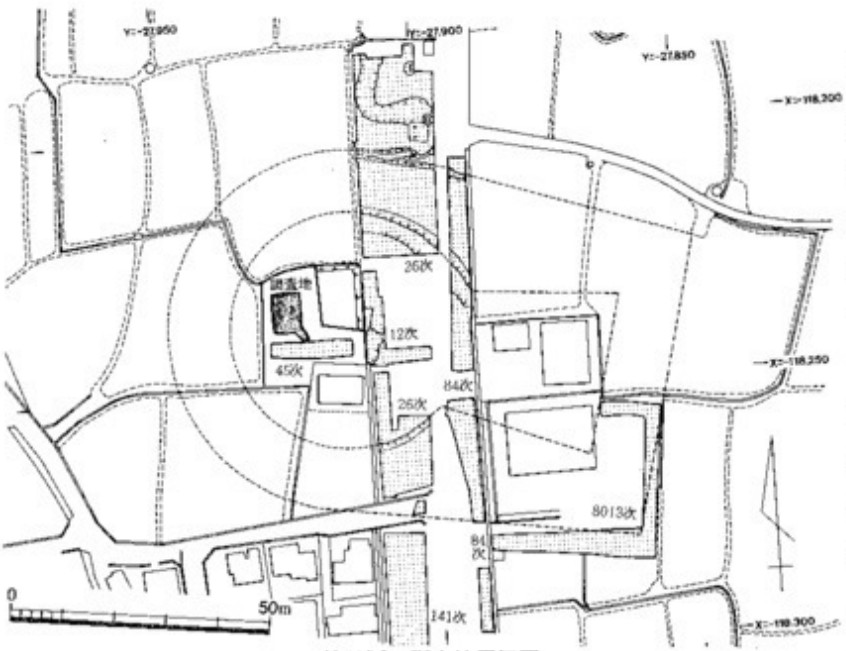
2　調　査　経　過

今回の調査地は，長岡京条坊復原図による右京三条二坊二町にあたることはもとより，1979年に行われた右京第26次調査(2)（７ＡＮＩＴＴ－１地区）で発見された今里車塚古墳（前方後円墳）の後円部および弥生時代後期から平安時代にかけての大規模な複合遺跡である今里遺跡にあたるため，かねてよりその重要性が指摘されるところであった。

1984年５月に株式会社丸義製作所より，当地に事務所建築を行いたい旨の届けが出された。これをうけた長岡京市教育委員会では，建築面積が狭く当市における発掘調査の対象基準には当たらないものの，基礎の掘削レベルが－３ｍと深いこと，また上記の如く当地の遺跡としての重要性に鑑み，業者との協議の結果，発掘調査を行うことに決定した。調査は国庫補助事業として長岡京市教育委員会が行い，現地調査は財団法人長岡京市埋蔵文化財センターから調査員を派遣して行うこととなった。

当調査地は，小畑川右岸の沖積平坦地の西端近くにあたり，西方約50～100ｍには比高差約数ｍの段丘崖が南北にのびており，それより西方は「低位段丘」となっている。

今回調査の対象となった約187㎡のうち，南側の約50㎡に関しては既に1980年に右京第45次調査（７ＡＮＩＴＴ－３地区(3)）が実施されており，今里車塚古墳の墳丘は，以前当地にあった民家のために完全に削平されていたらしいこと，下層には地山面に切り込まれた弥生時代後期の土壙が検出され，今里遺跡のこの時期の遺構が少なくとも当地にまで広がっていたことなどが判明した。従って今回の調査は，弥生時代後期の遺構の検出に主眼を置いて行うこととした。



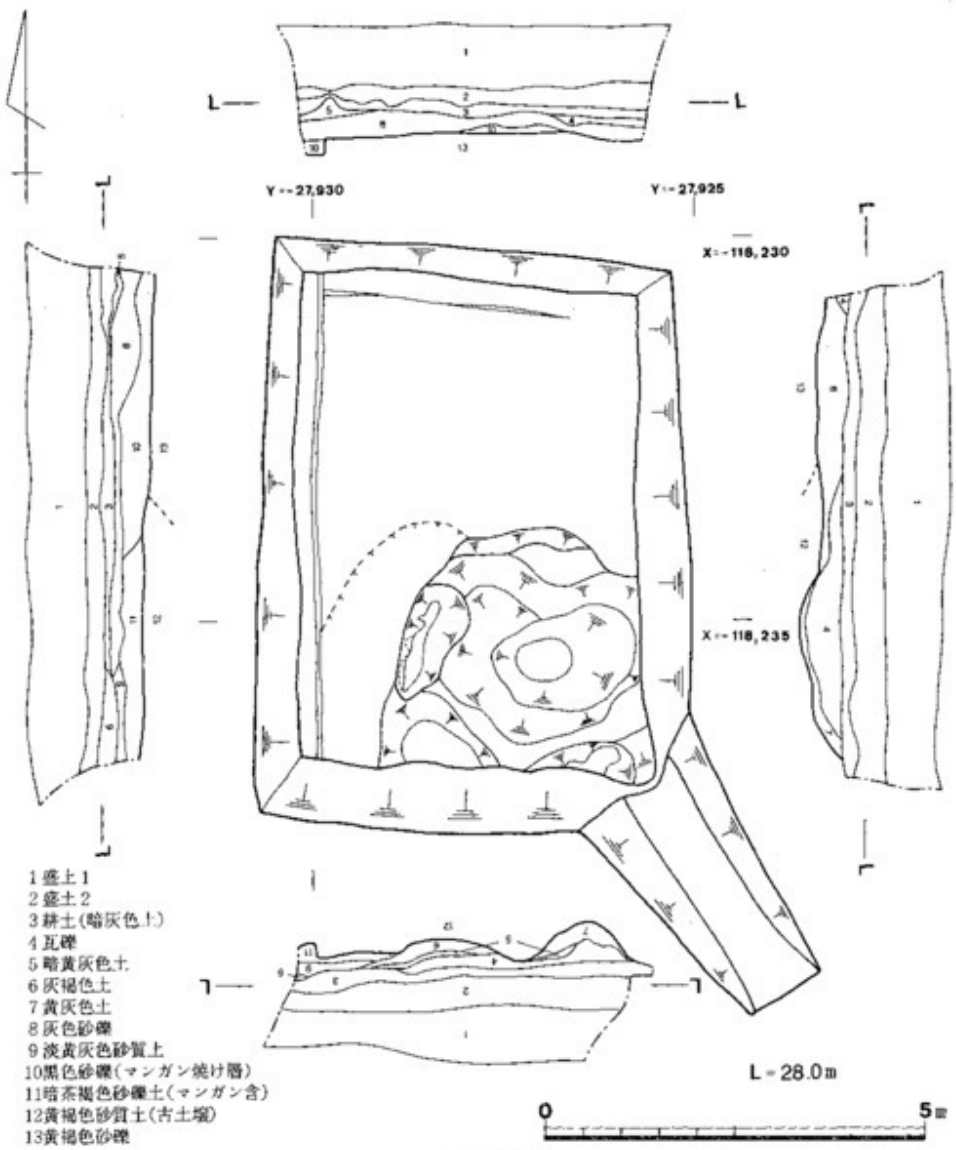
第40図　調査地周辺図

現地調査は，開発地の北側部分に南北6.5ｍ，東西4.5ｍの矩形トレンチを設定し，今回の造成に先立って行われていた約１ｍの盛土を重機によって除去することから始めた。そしてこの下にある民家建築時の盛土については，先の右京第26次調査

において，撹乱土内から今里車塚古墳の副葬品の一部である方格規矩獣文倭鏡の断片が検出されているところから[3]，すべて人力によって掘り下げることとした。調査面積は28㎡である。

3　検出遺構

今回の調査地における基本層序は，造成時の盛土，耕作土，瓦礫（旧民家建築時），暗黄灰色土，灰褐色土，黄灰色土の順で，すべて近・現代のものである。そして以下は，灰色砂礫，淡黄灰色砂質土の堆積があり，地表下約1.5mで北側ではマンガン焼けした黒色砂礫層，南側

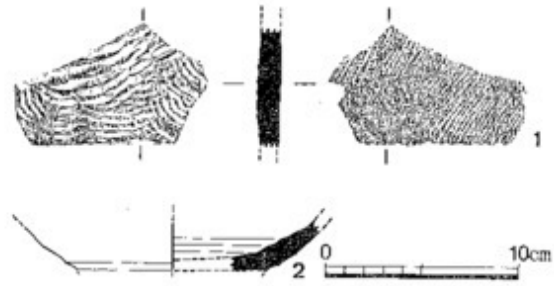


第41図　検出遺構図

では黄褐色の段丘礫上古土壌の地山に至る。又，南半部では地山面を掘り込んだ近・現代の攪乱坑が存在していた。以上のように当調査地はほとんどが攪乱土であり，予想された通り今里車塚古墳に関するものはまったく残されていなかった。又，地山面上において期待された弥生時代後期の遺構も今回の調査においては残念ながら検出することができなかった。

4　出　土　遺　物

前述の如く，今里車塚古墳関係の遺物検出を意図して耕作土以下の攪乱土を人力で掘り下げたが，大半は近・現代の瓦礫であった。その内これらに混じって，須恵器の甕体部片1・坏身片3・瓦片1が出土しているが，いずれも細片であり，図示し得たものはわずかに2片である。



第42図　出土遺物実測図

須恵器甕体部片（1）は，内面に同心円状のあて具痕跡を残し部分的にナデ消し，外面はカキ目調整の後ナデている。2は，高坏の坏部片で底部に脚の貼り付け痕を残し，外面には自然釉が付着する。瓦片は平瓦と思われ，摩耗著しく部分的に縄目の叩き痕を残している。

以上の遺物のうち，須恵器は古墳時代後期の，瓦は長岡京期の遺構にそれぞれ伴っていたものと推定されるが詳細は不明である。

5　ま　と　め

今回の調査においては残念ながら長岡京跡，今里車塚古墳，今里遺跡のいずれの遺構も検出することができなかった。これは当調査地が宅地化された時点において完全に削平・整地されたことを物語っている。しかしながら当地周辺が乙訓の歴史を解明して行く上での重要な地であることには変わりはなく，今後とも充分な調査・研究を行っていく必要がある。

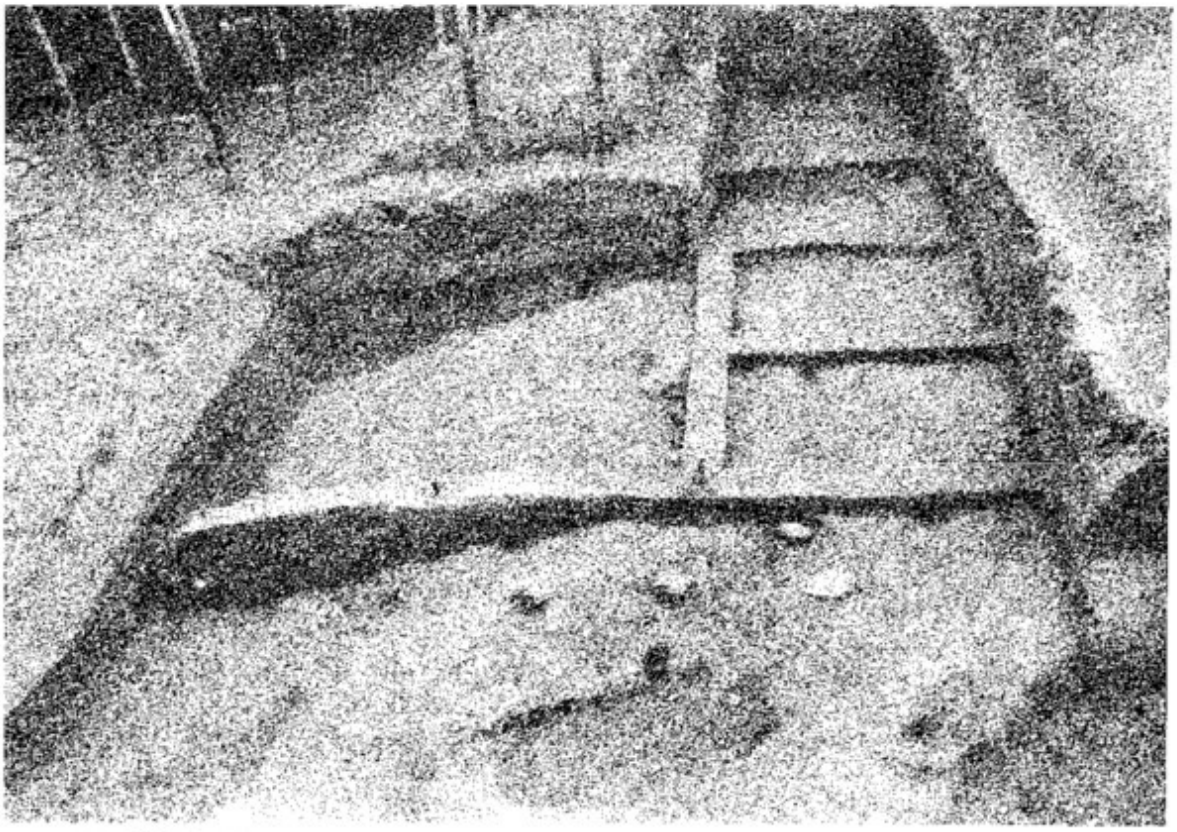
注1）現地調査には以下の方々の協力を得た。
調査作業員－岩岸三郎，岩崎又男
調査補助員－辻林磨宏，上野正一，中井正幸

2）高橋美久二他「長岡京跡右京第26次発掘調査概要」（京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報（1980）』第2分冊，1980年）

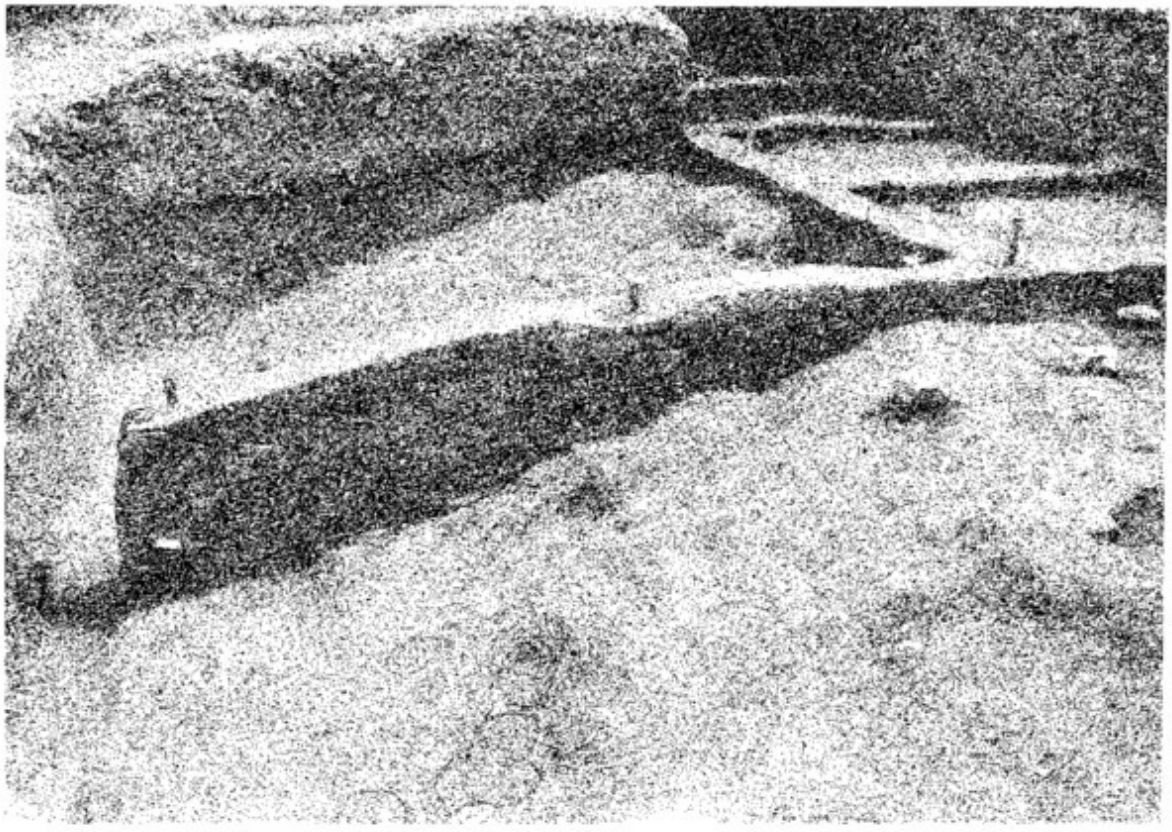
3）吉岡博之「長岡京跡右京第45次（7ANITT－3地区）発掘調査概要」（長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書』第8冊，1981年）

図　　版

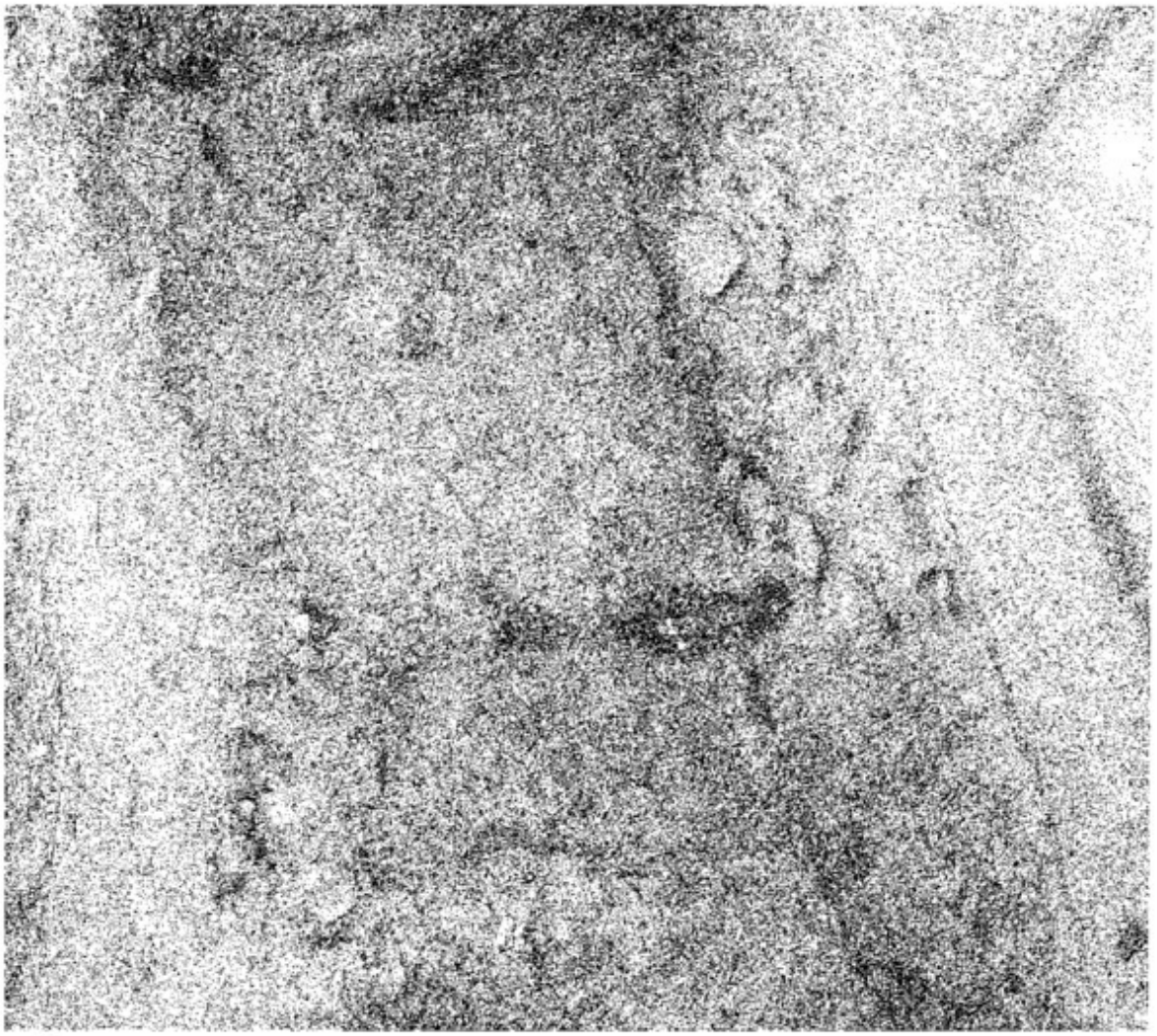
前方部発掘区（南から）



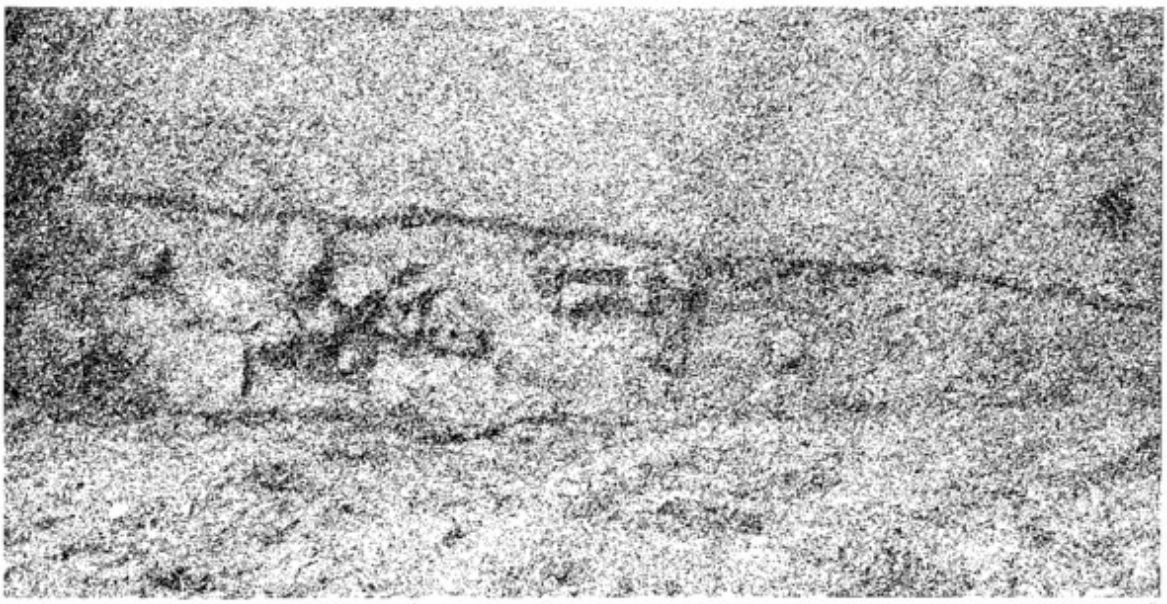
1　前方部発掘区（北から）



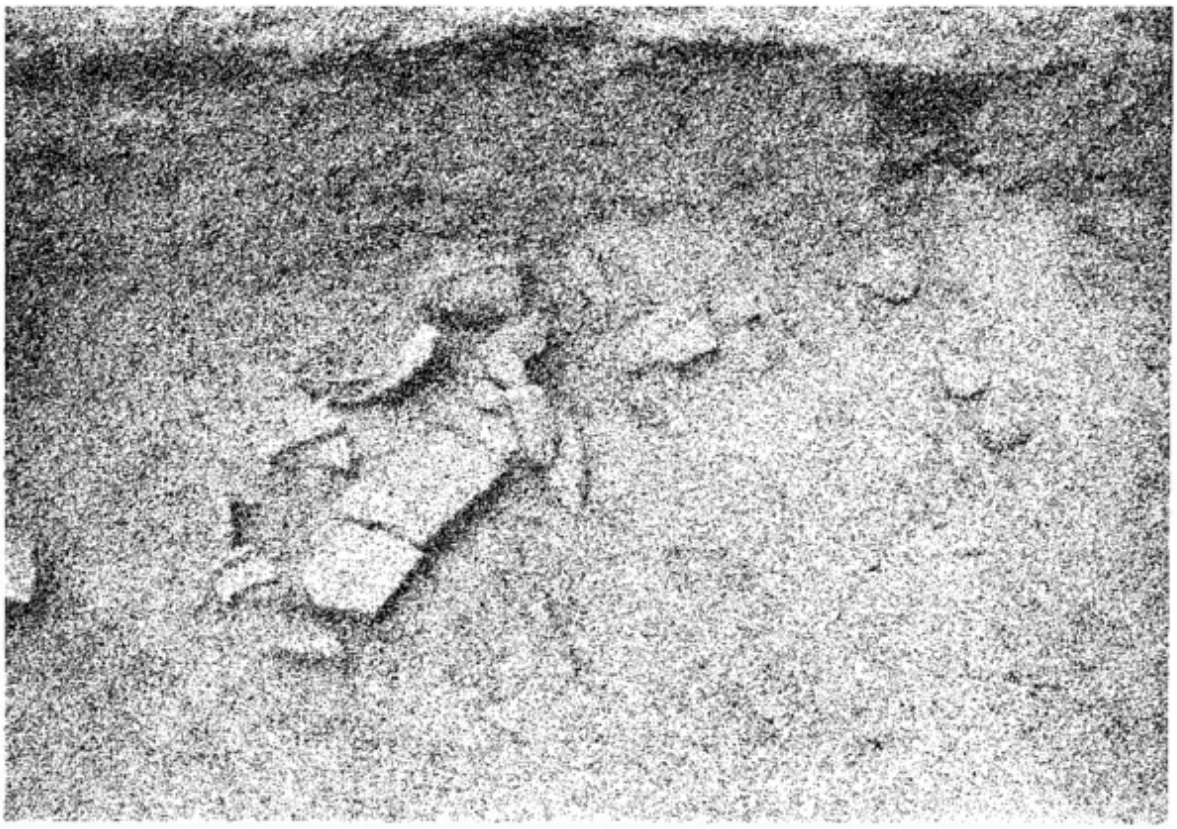
2　前方部東斜面（北東から）



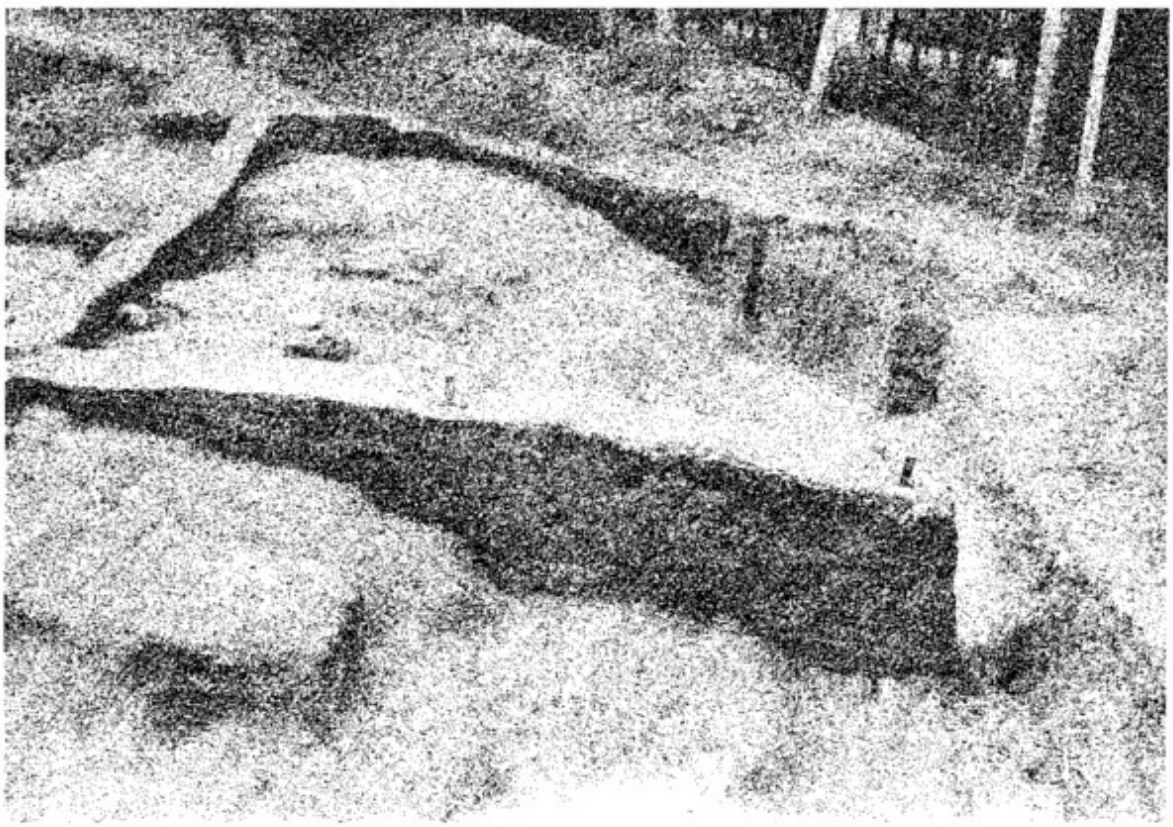
1　前方部墳頂部土壙



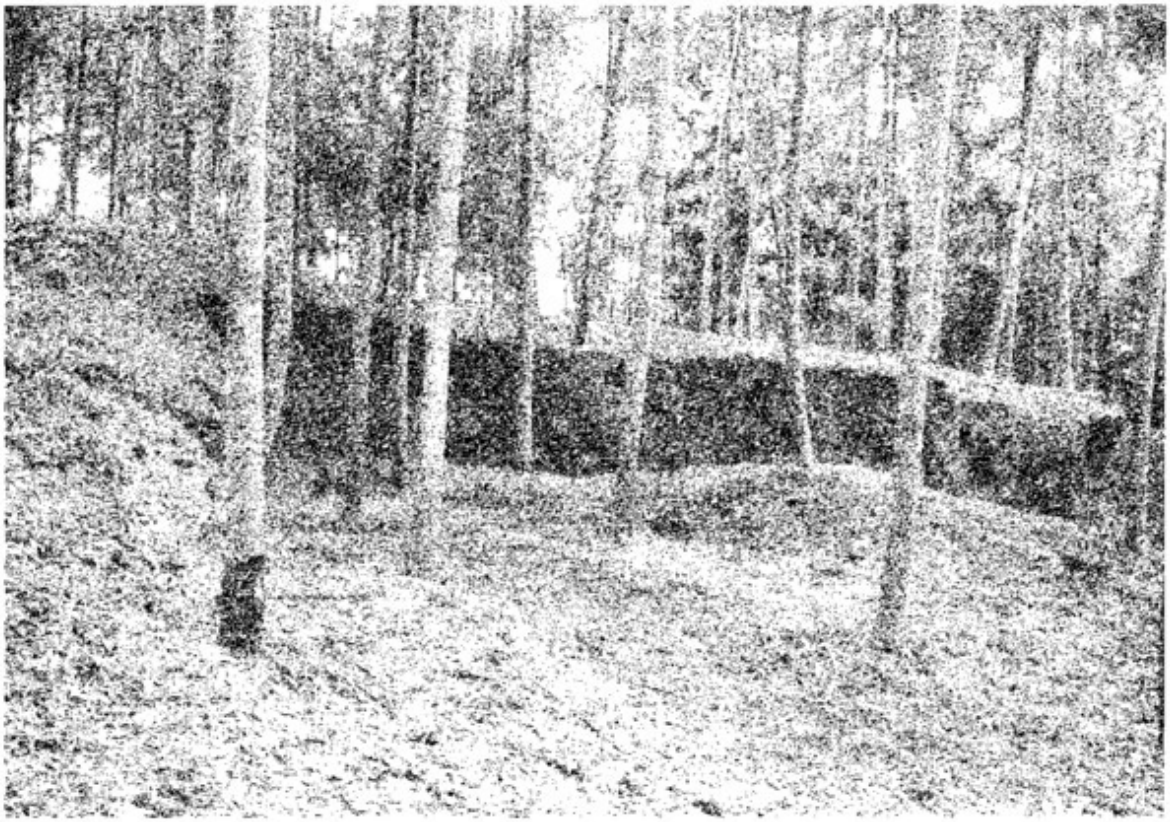
2　前方部墳頂部土壙（拡大）



1　前方部地輪出土状態

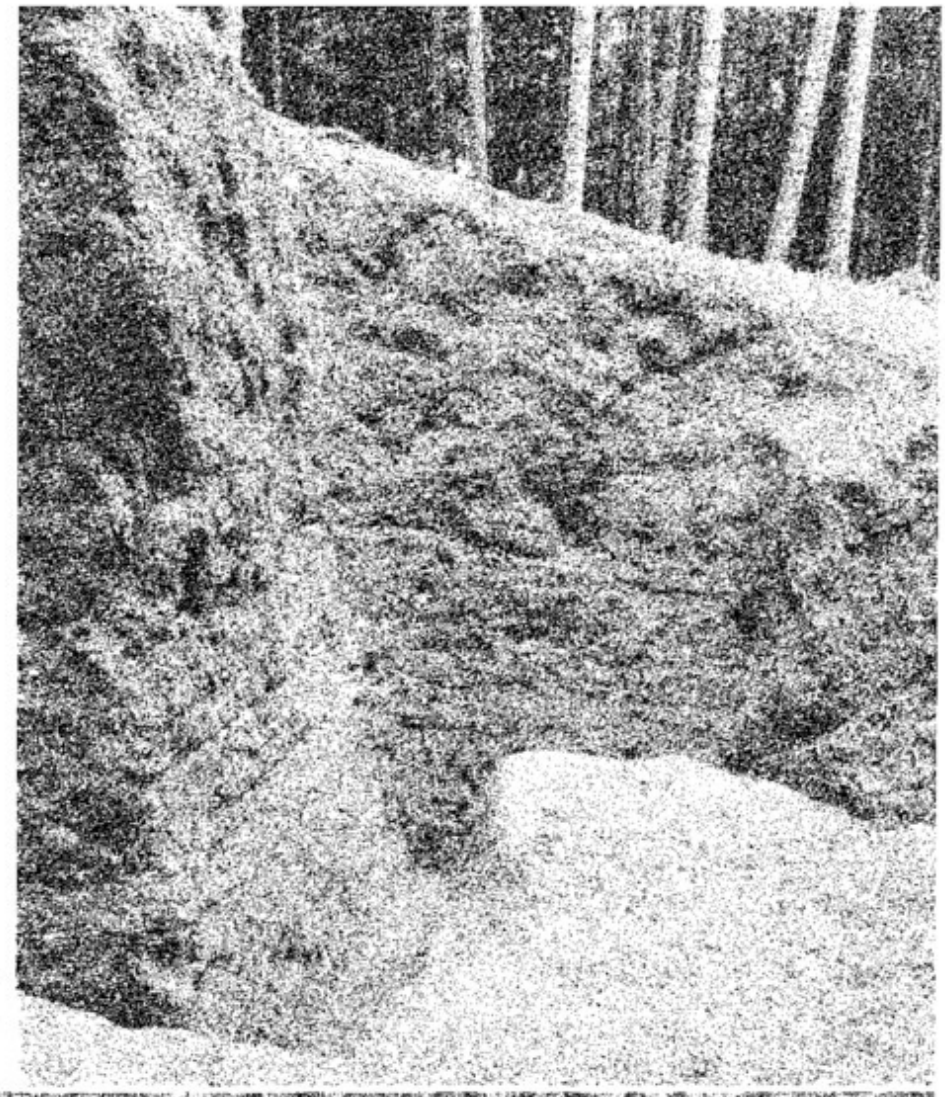


2　前方部東斜面の柱穴（南から）

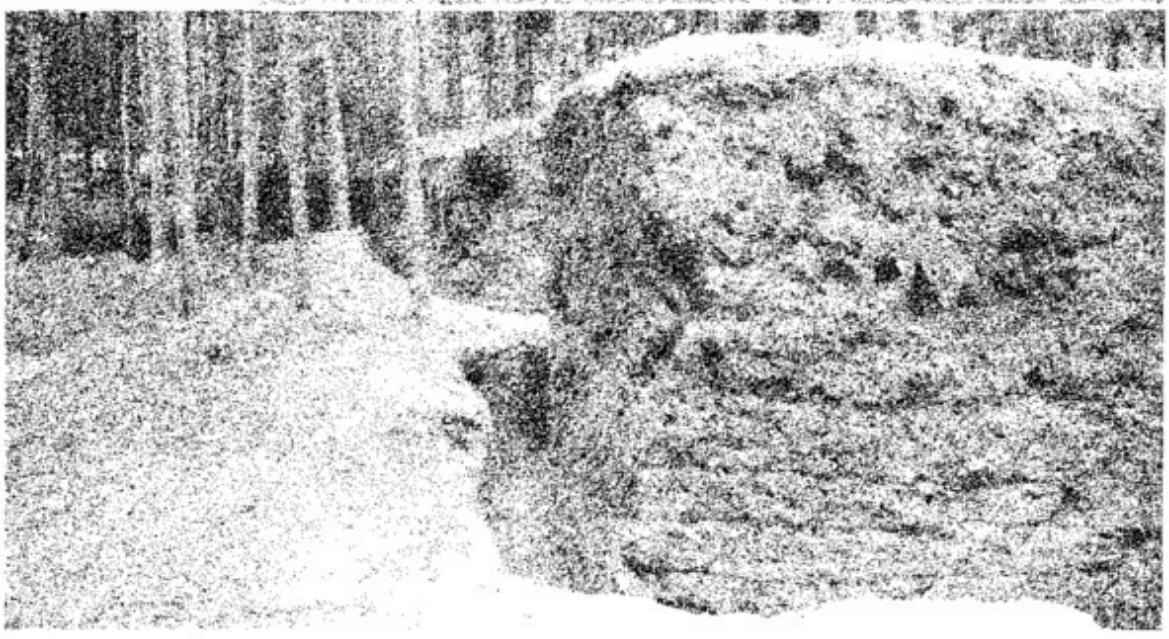


1　東２号墳全景（南から）

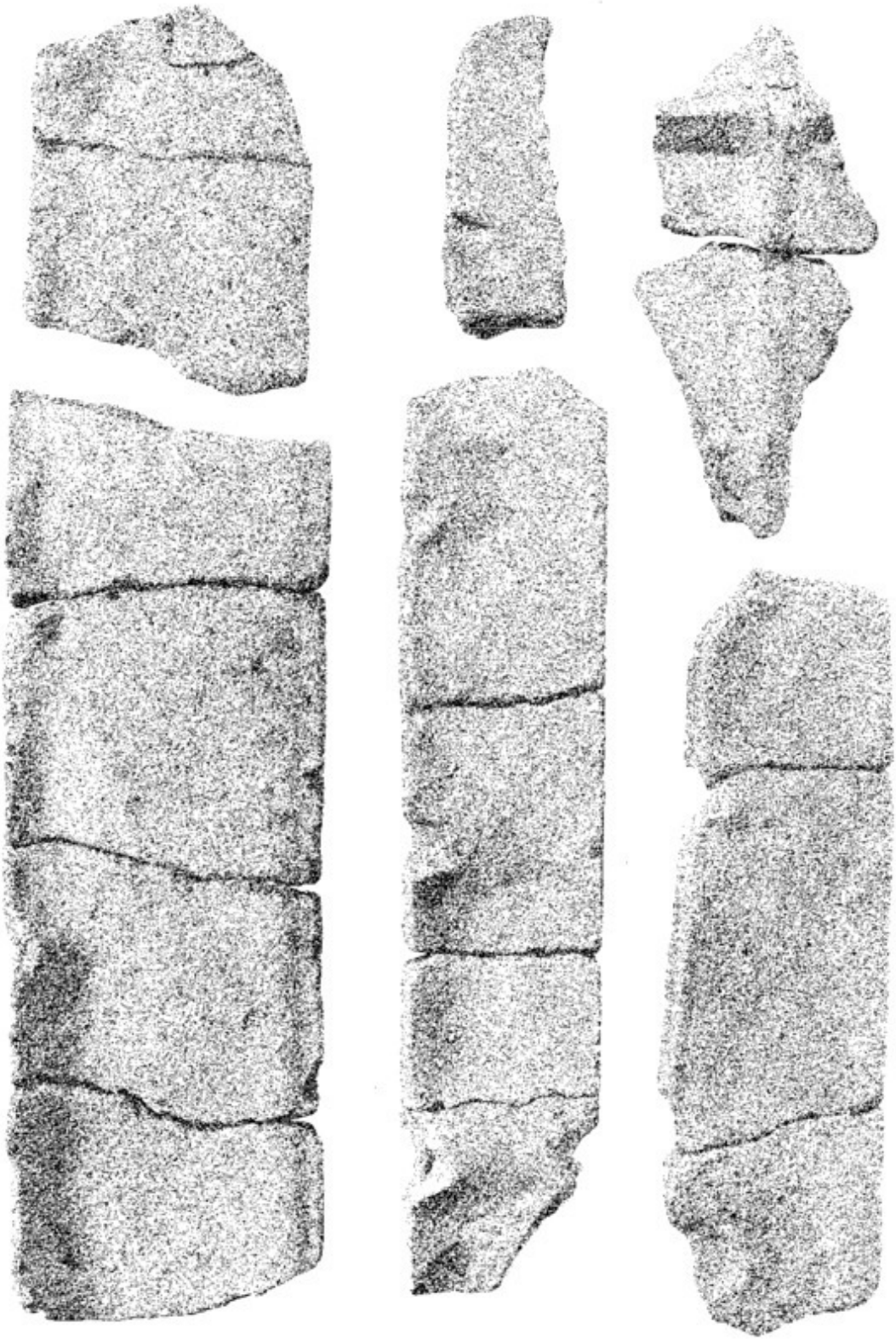
2　東２号墳断面（南から）



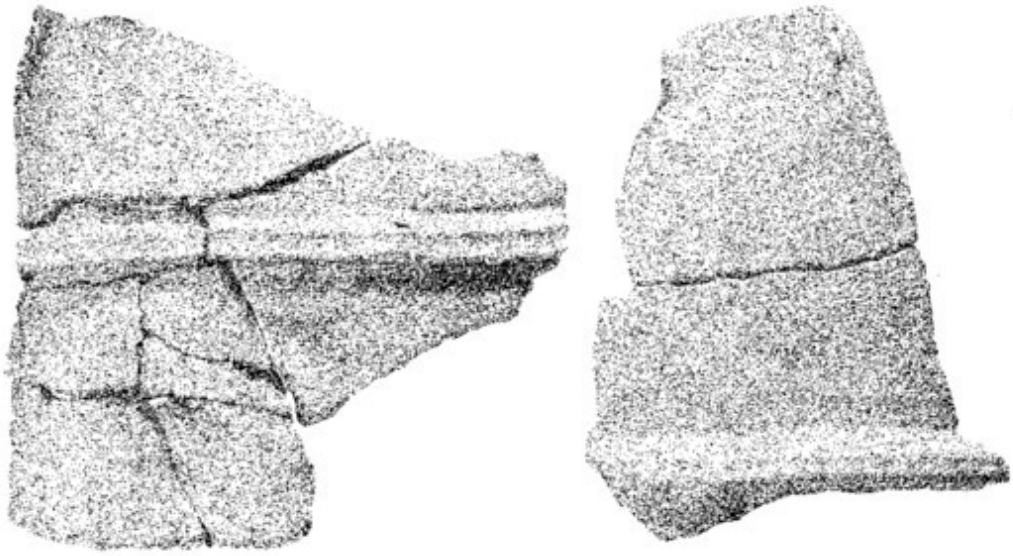
1　東２号墳断面（北から）



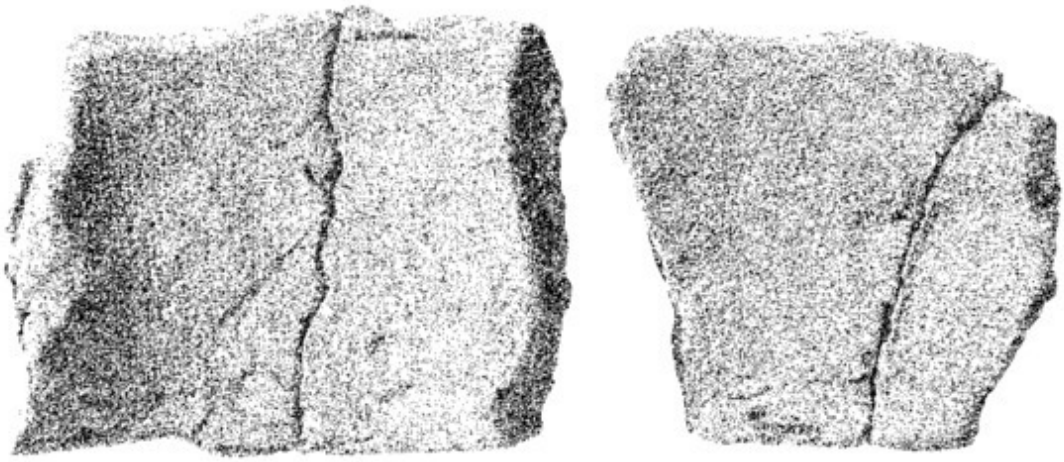
2　東２号墳断面（南から）



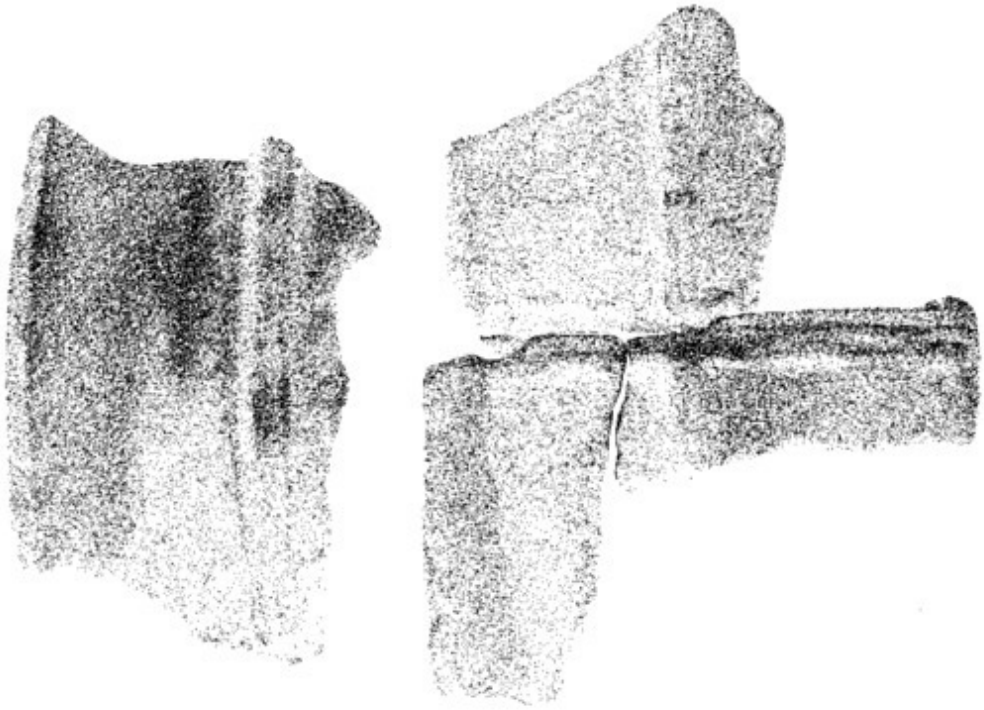
円筒埴輪ヒレ部



1　円筒埴輪破片　外面

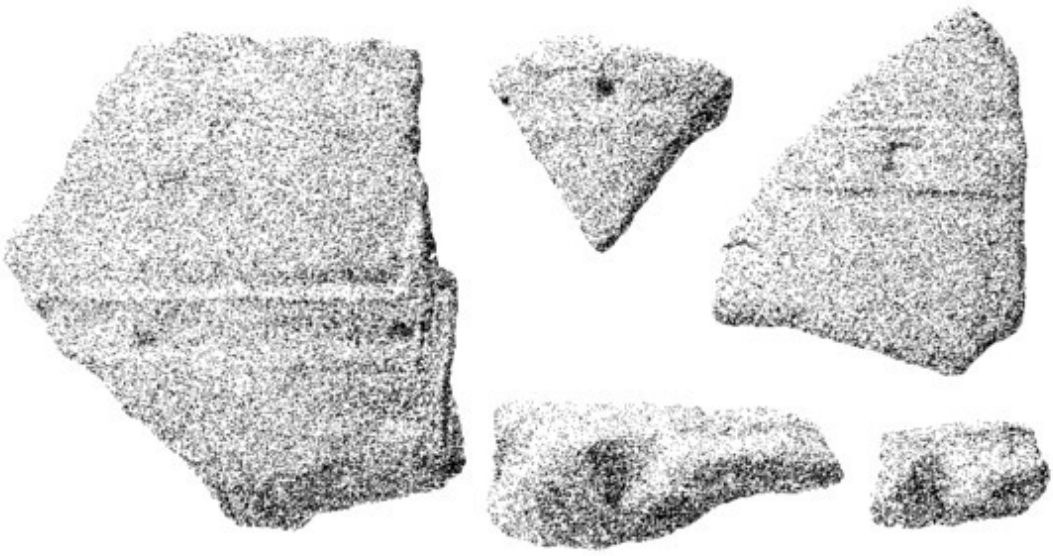


2　円筒埴輪破片　底部内面

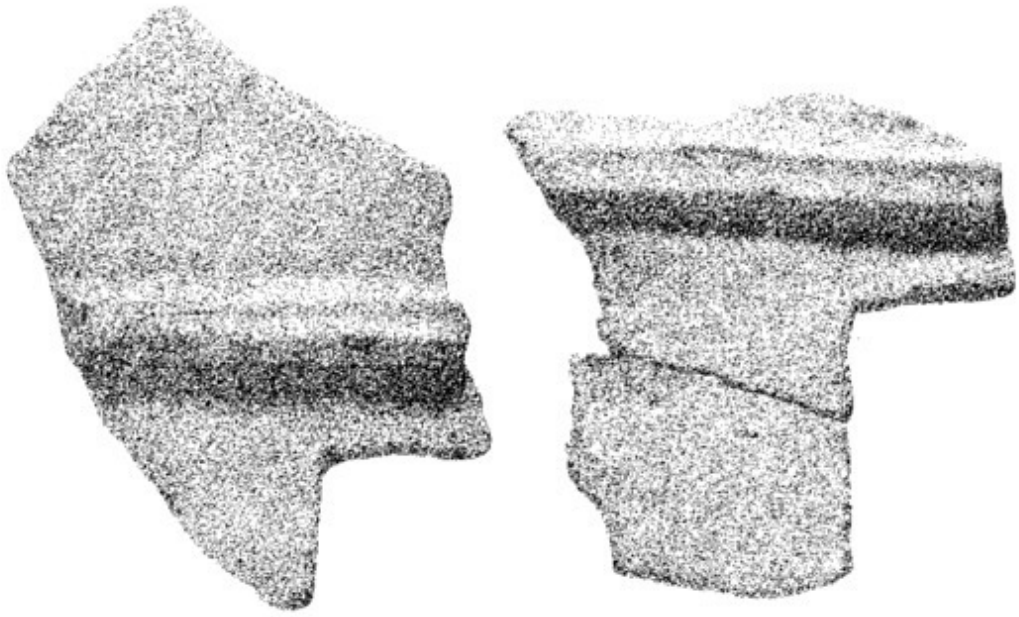


1　円筒埴輪　口縁部

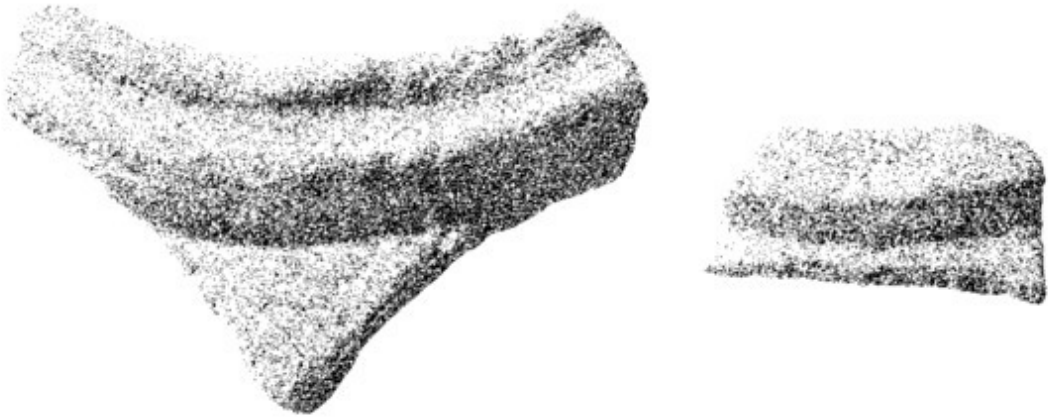
2　円筒埴輪　ヨコハケ調整



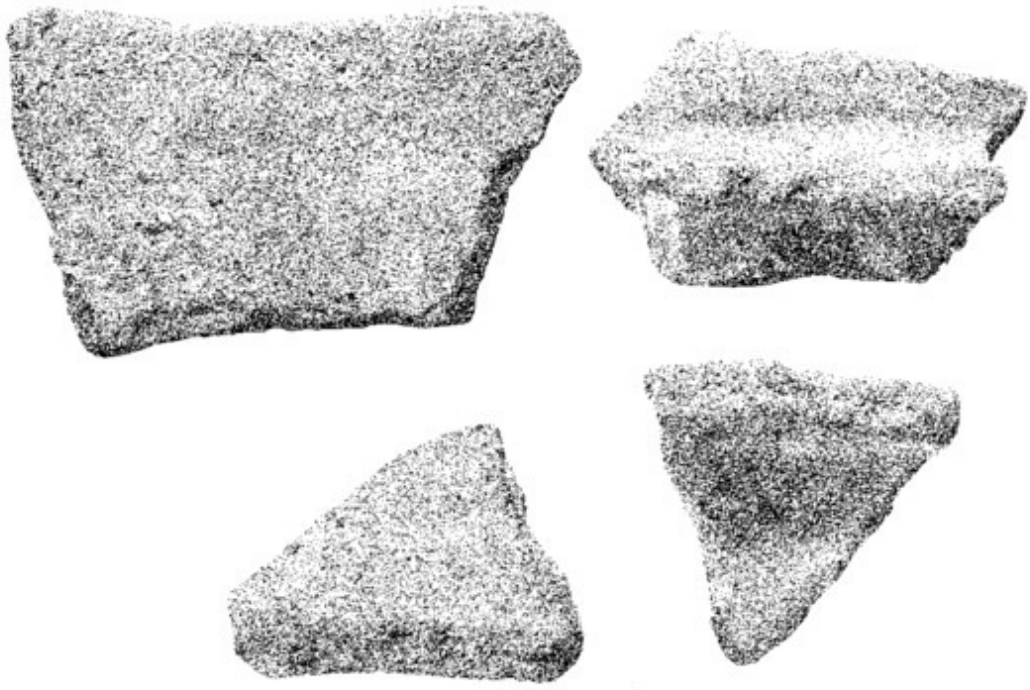
1　円筒埴輪破片　突帯下の刺突



2　円筒埴輪破片　方形透孔

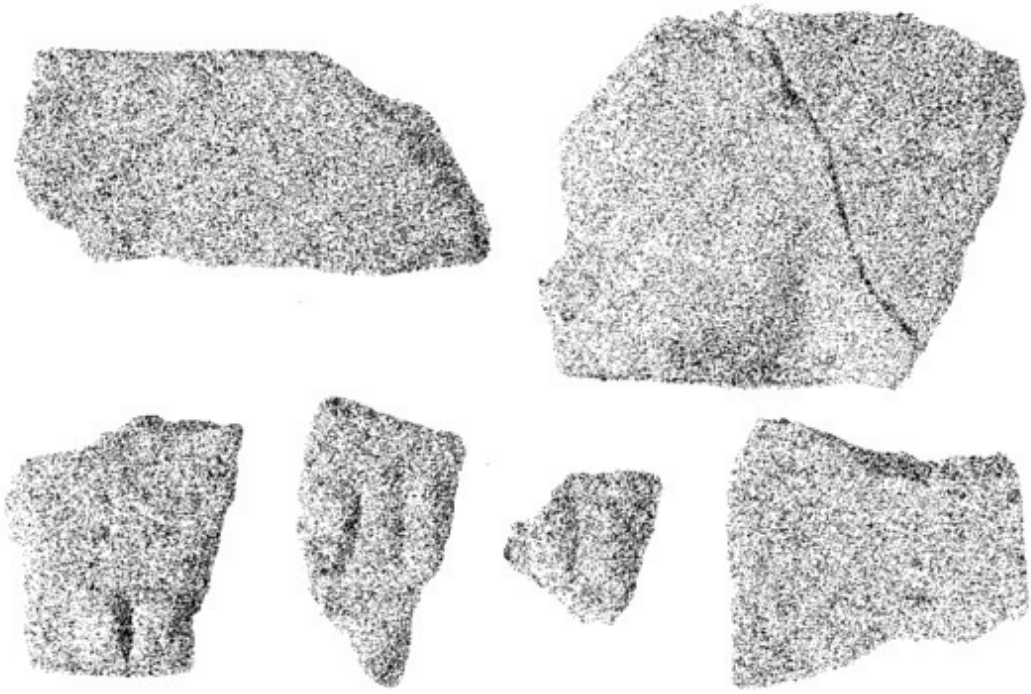


1　朝顔形円筒埴輪　壺口頸部



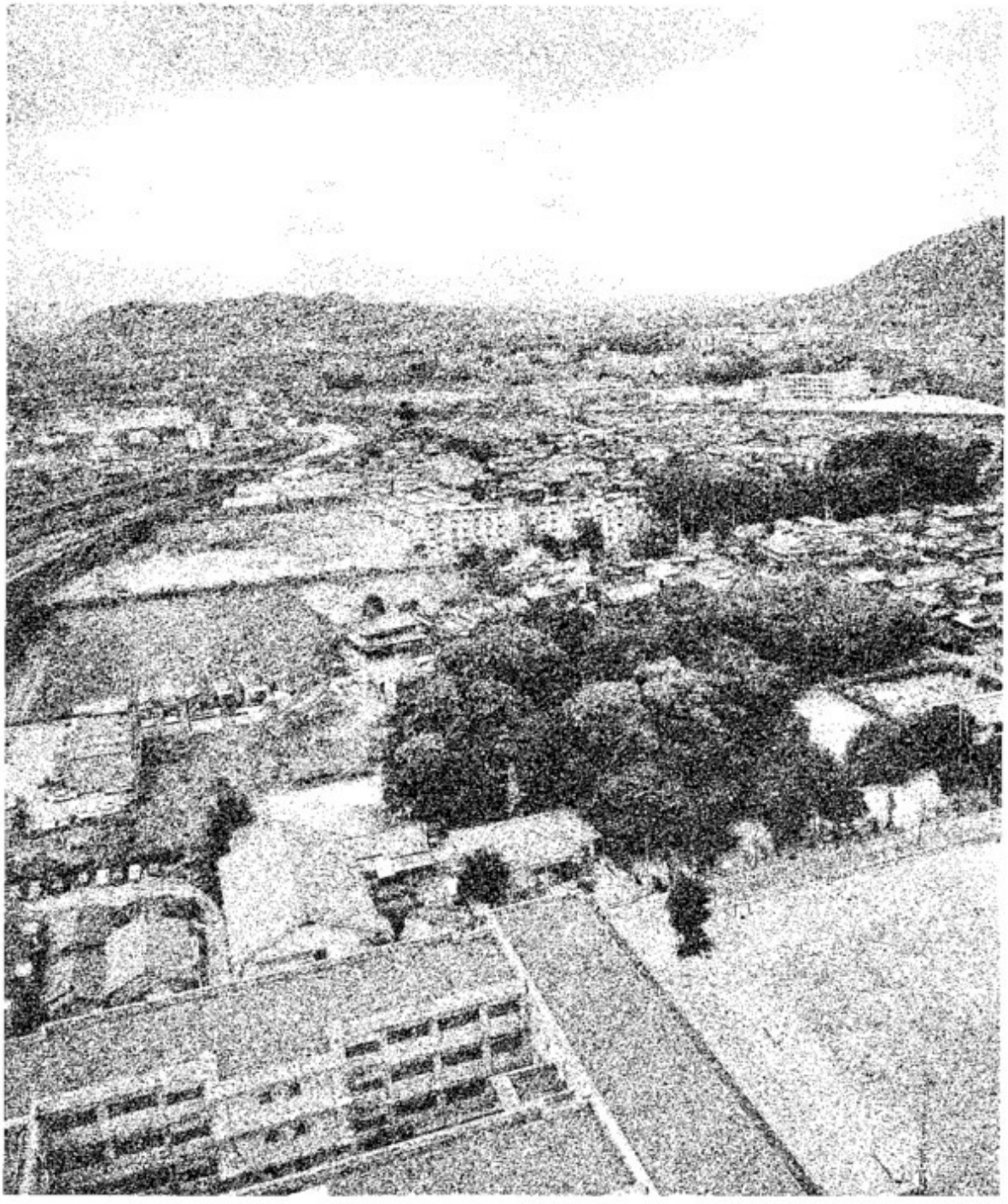
2　胎土の異なる埴輪片

1　墳丘表面採集の円筒埴輪片

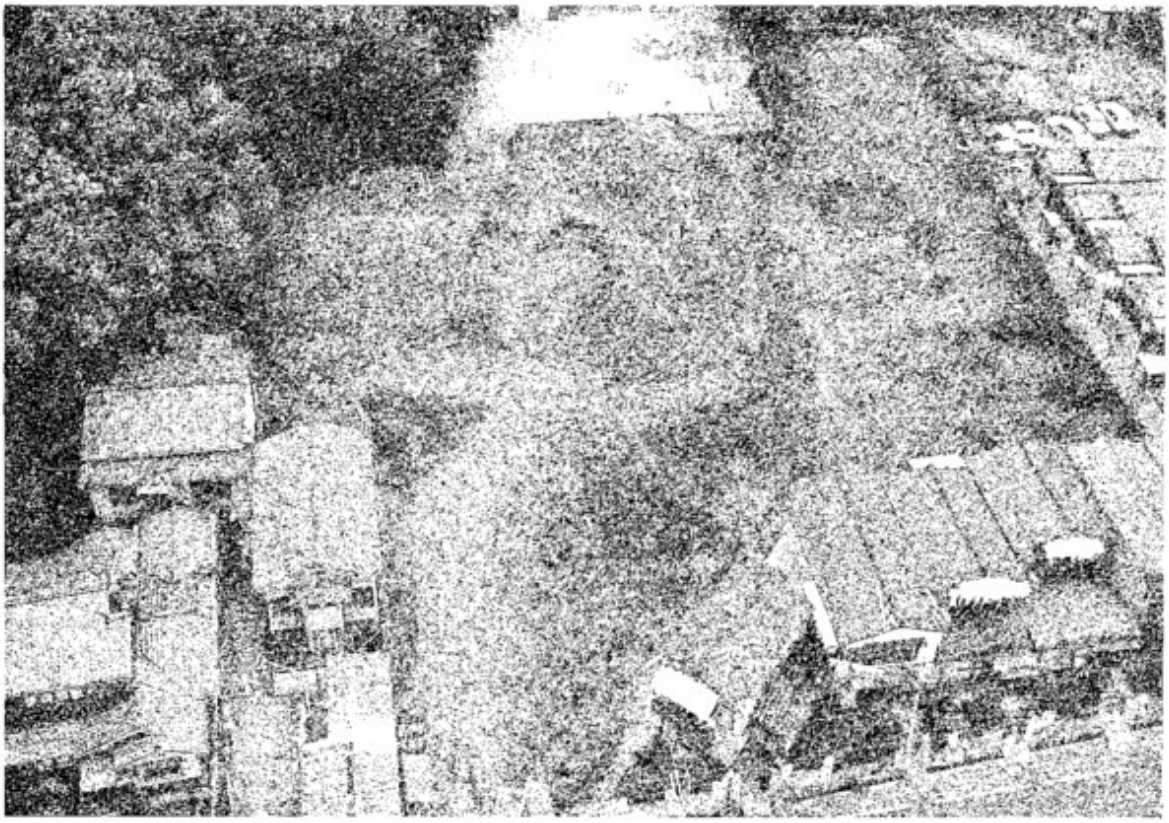


2　墳丘表面採集の円筒埴輪片

山崎天王山
八幡男山丘陵
小
畑
川
大
山
勝龍寺城
本
丸
洛田丸
外堀
調
査
地
土塁
空堀
土塁
土塁
空堀跡存地
神
足
神
社
土
塁
跡
土
塁
跡
外
堀
跡
長岡第九小学校



勝龍寺城周辺から山崎天王山・八幡男山を望む（北から）



1　調査対象地全景（南から）

2　調査前土層ＳＡ16301（南から）

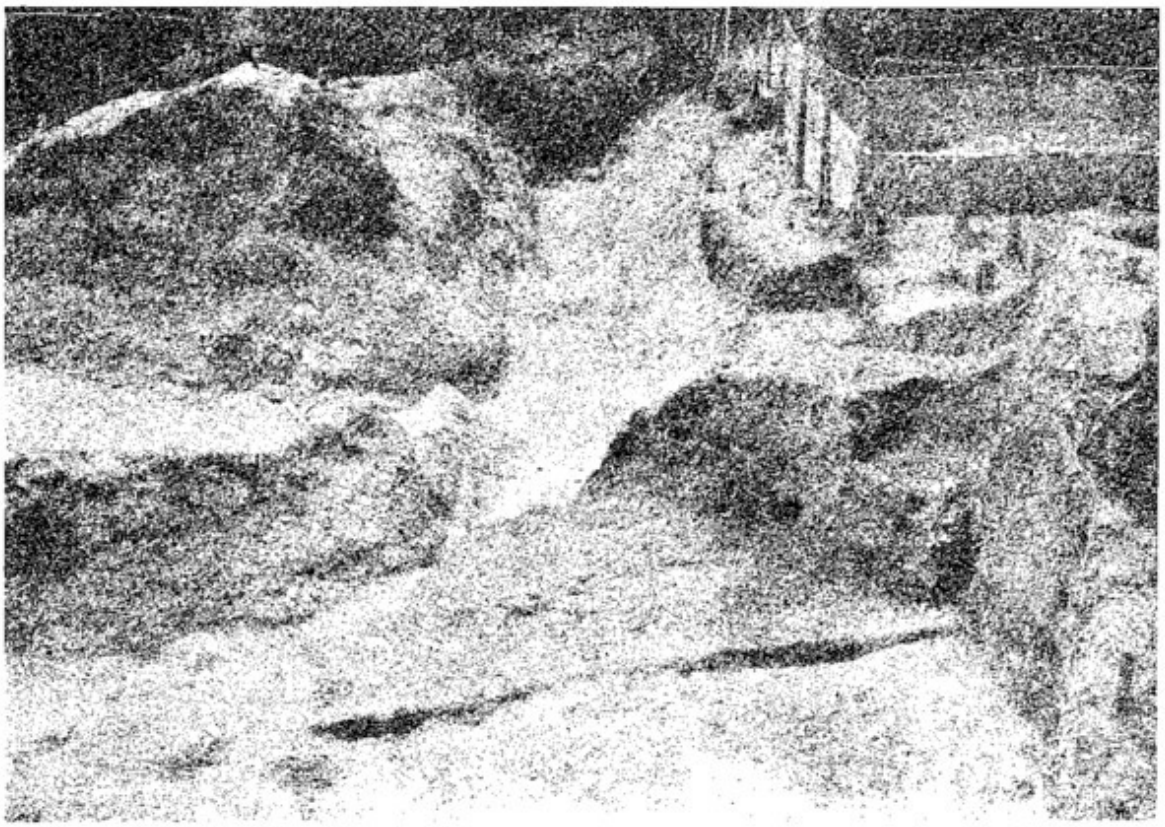
1　土塁・空堀部分試掘状況（南から）

2　土塁・空堀発掘状況（南から）

1　調査前土塁ＳＡ16301（南東から）

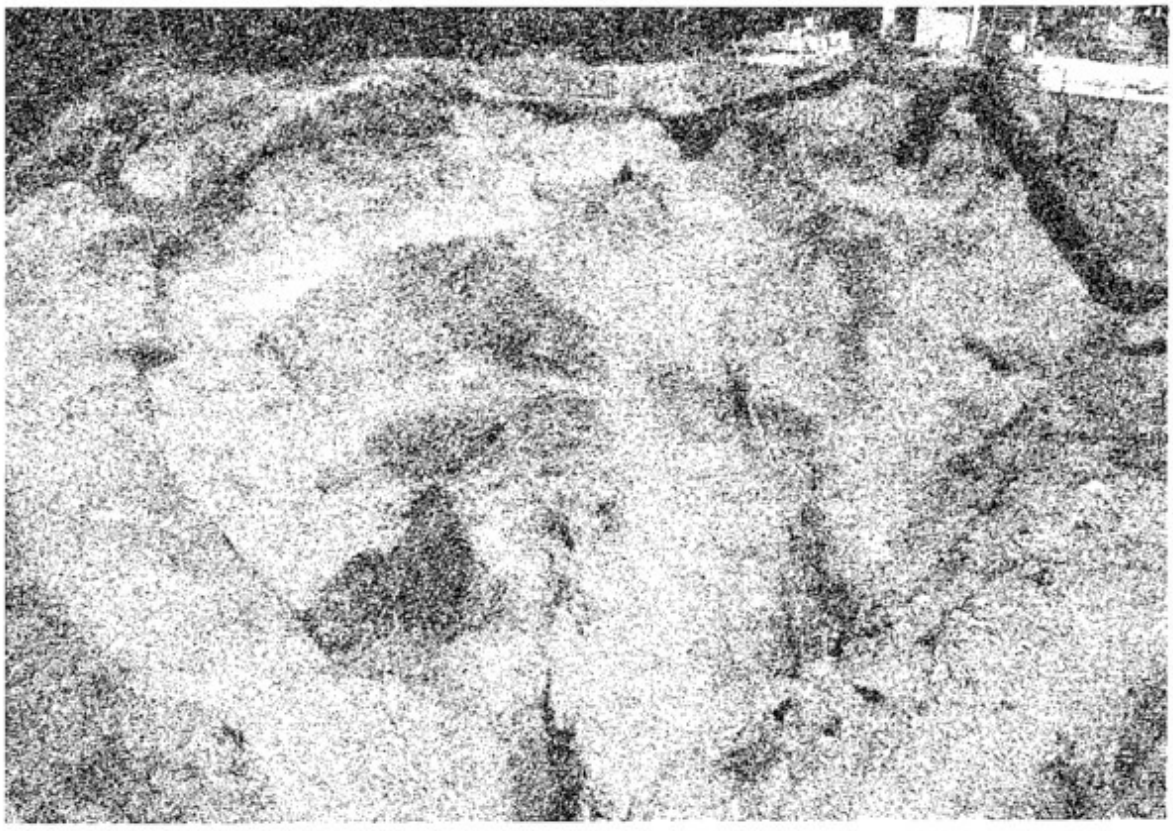
2　第６トレンチ中・近世遺構検出状況（南東から）

1　調査前空堀ＳＤ16302（東から）



2　空堀ＳＤ16302完掘状況（東から）

1　調査前空堀ＳＤ16302東端部（南東から）

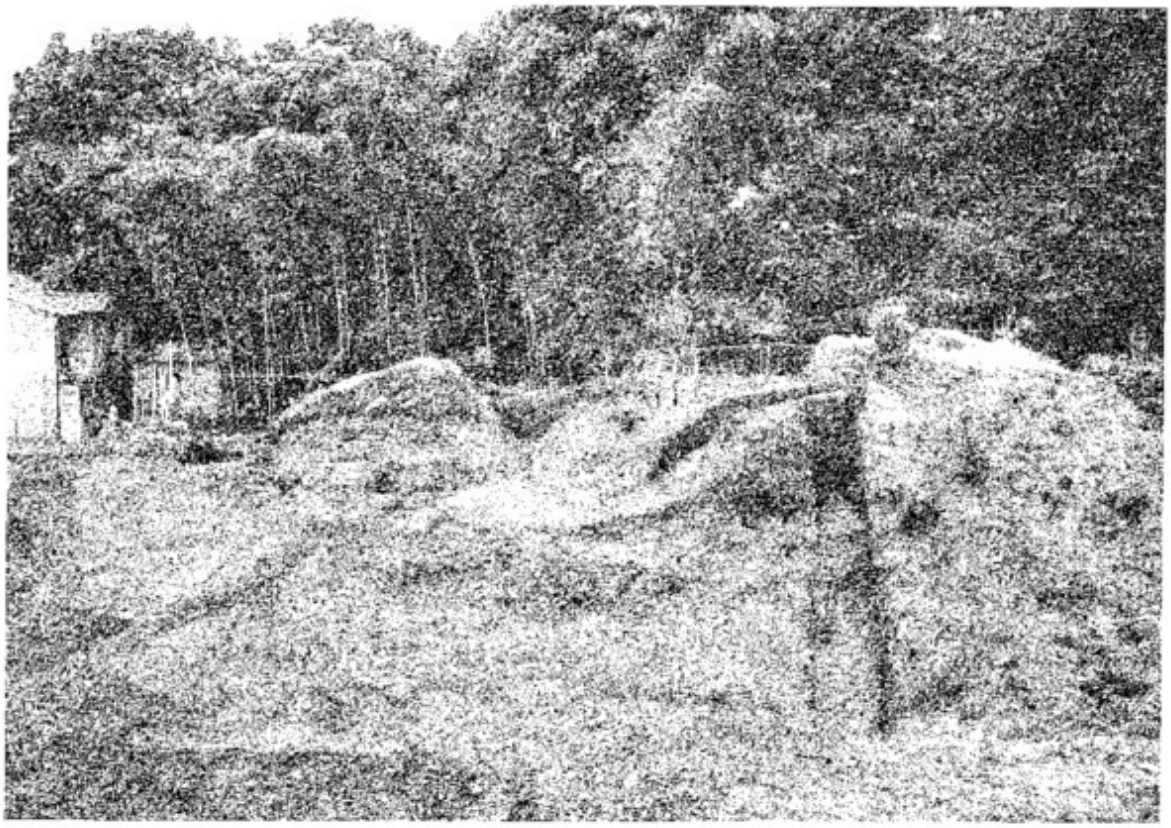


2　第５トレンチ発掘状況（南東から）

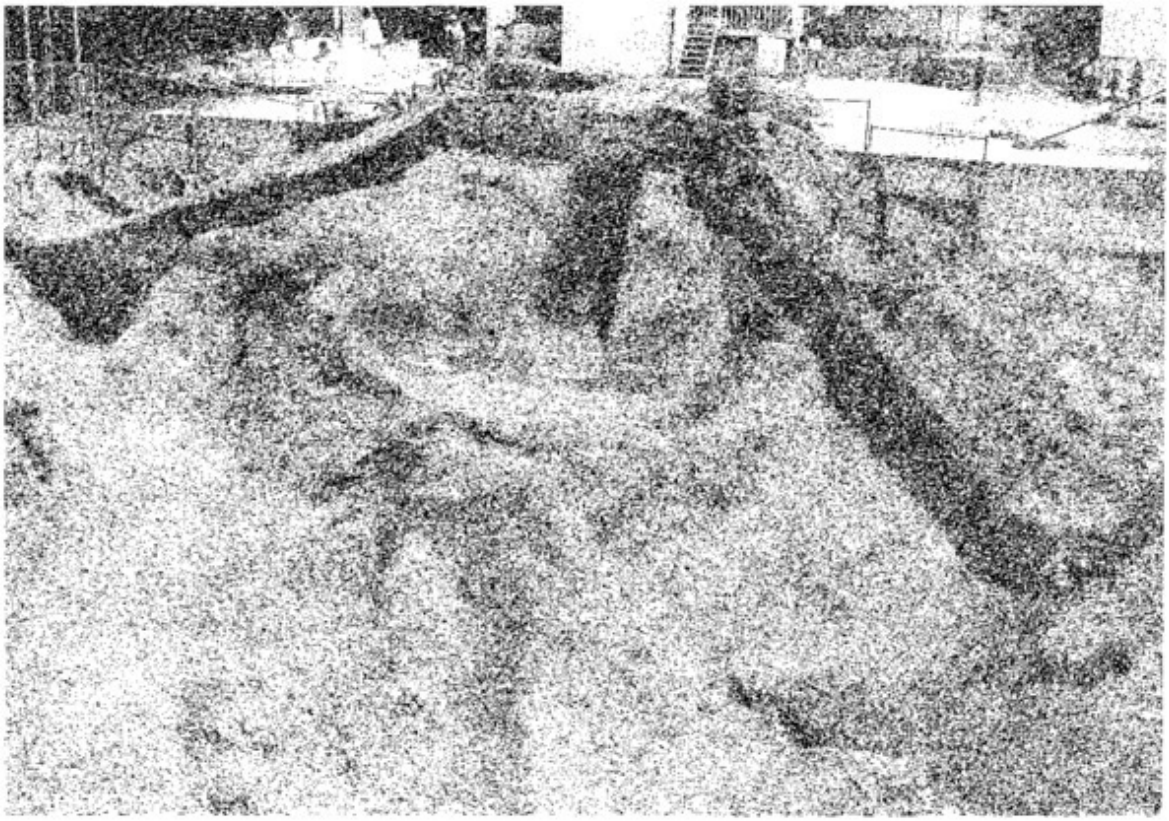
1　調査前土塁ＳＡ16303（南西から）

2　土塁ＳＡ16303試掘状況（南西から）

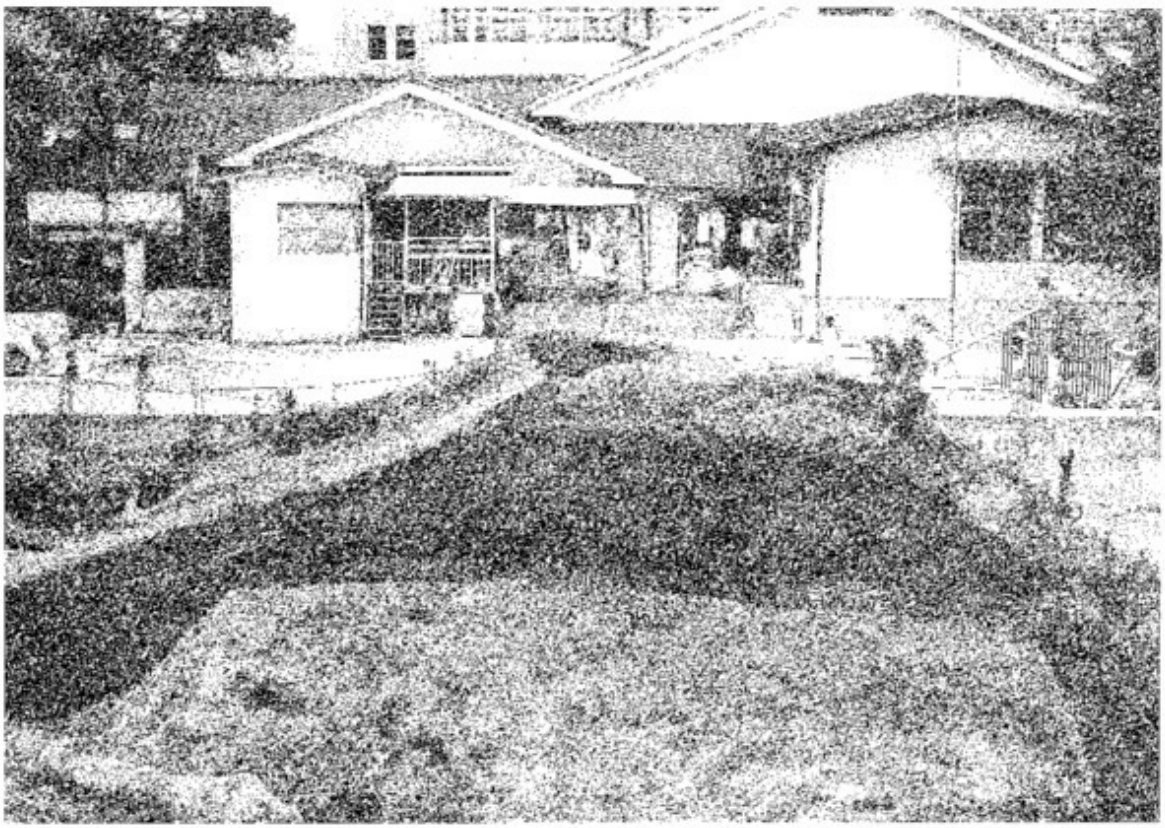
1　調査前土層ＳＡ16303（東から）



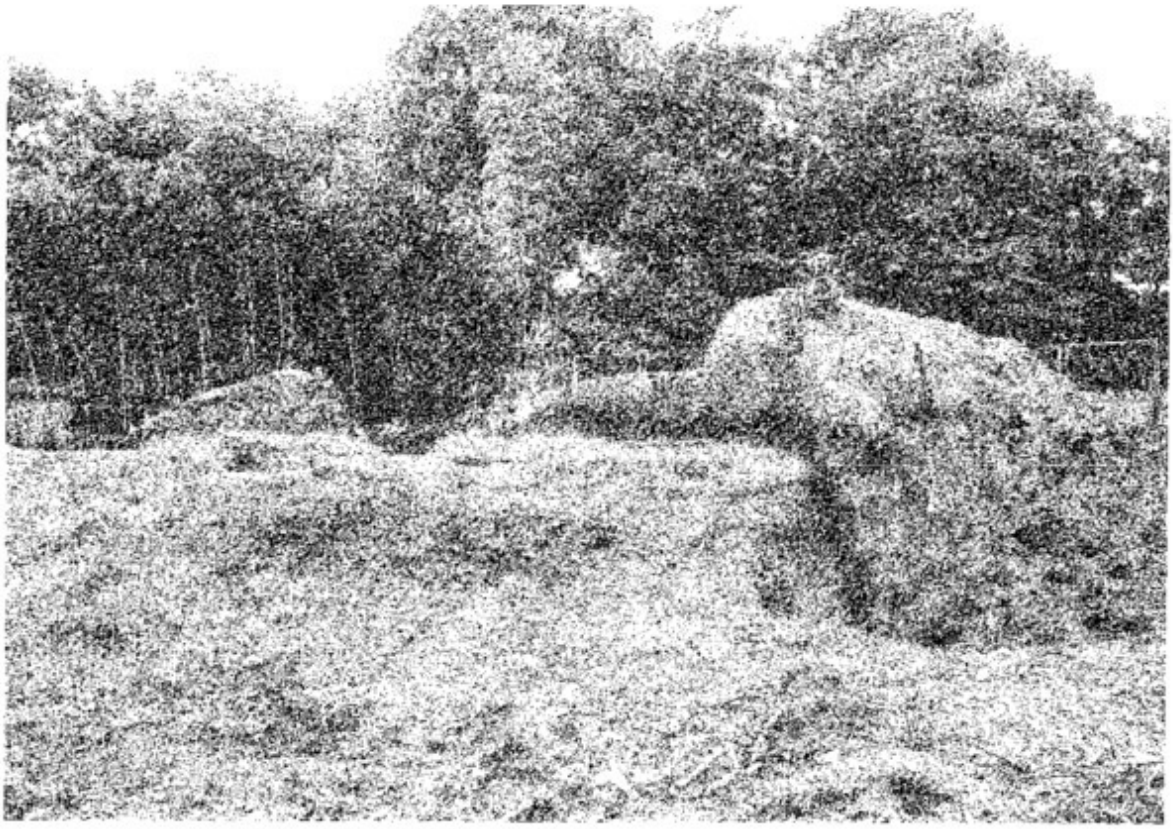
2　第５トレンチ全景（東から）



1　神足古墳（南から）



2　神足古墳・土壙ＳＡ16303断面（南から）

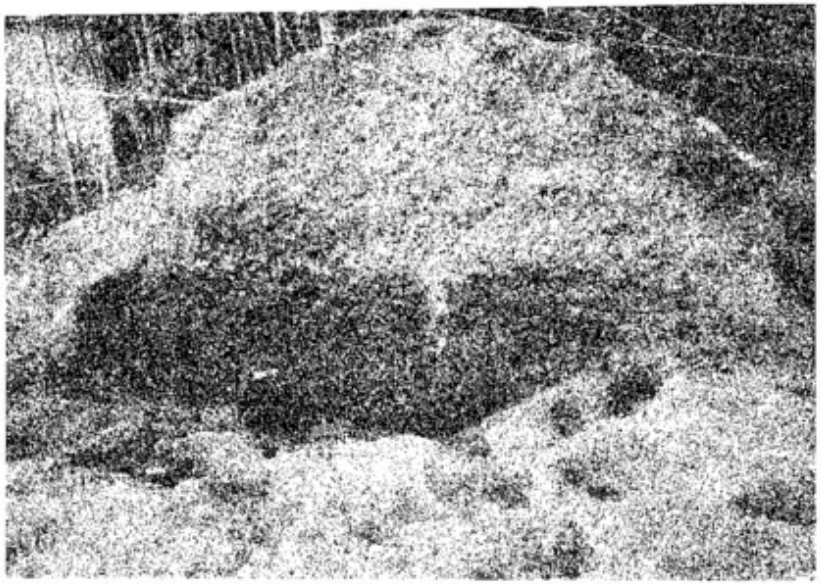


1　神足古墳主体部副葬土器検出状況（東から）

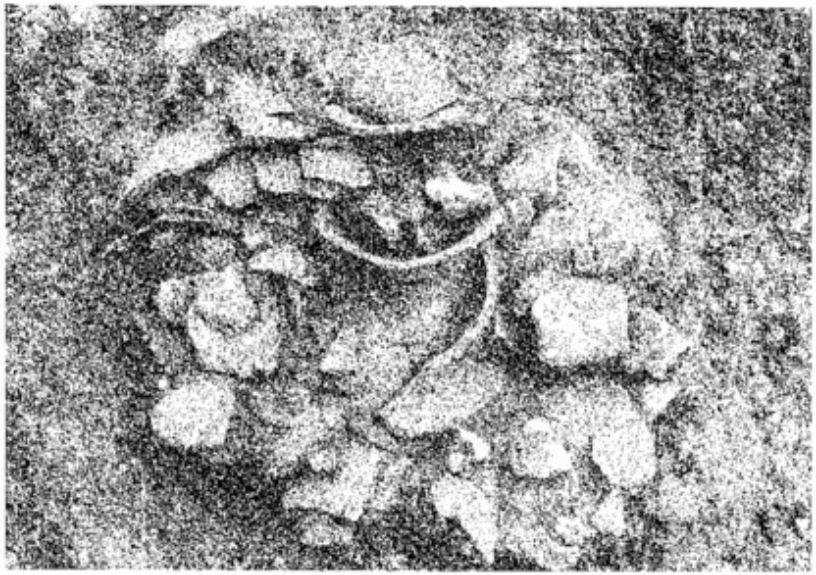
2　神足古墳主体部副葬土器検出状況（東から）

神足古墳主体部遺物出土状況

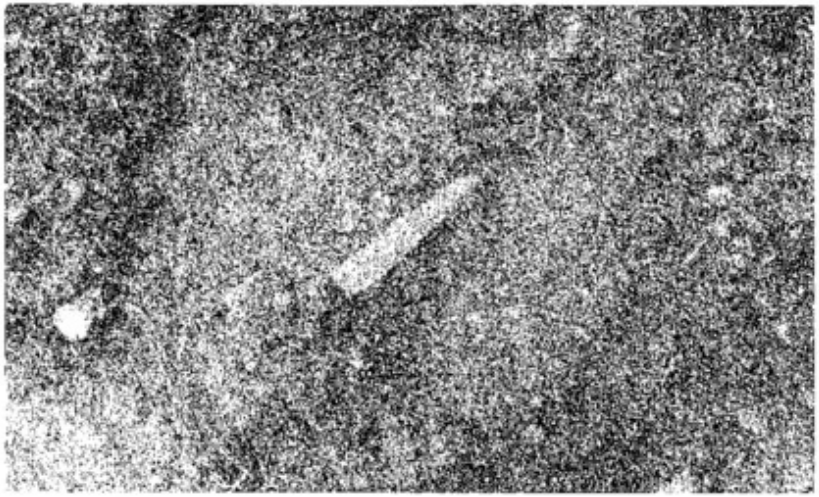
1　弥生時代溝ＳＤ16309遺物出土状況（南から）



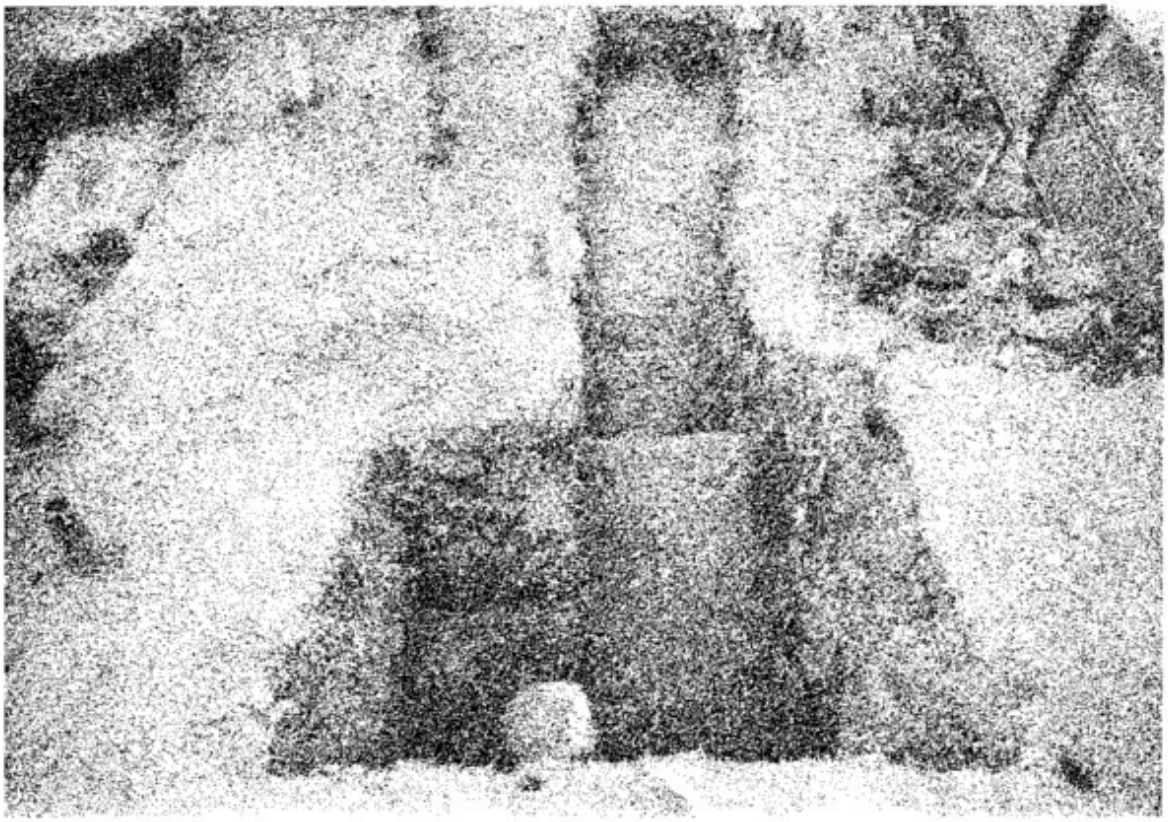
3　弥生時代土壙ＳＫ16308遺物出土状況



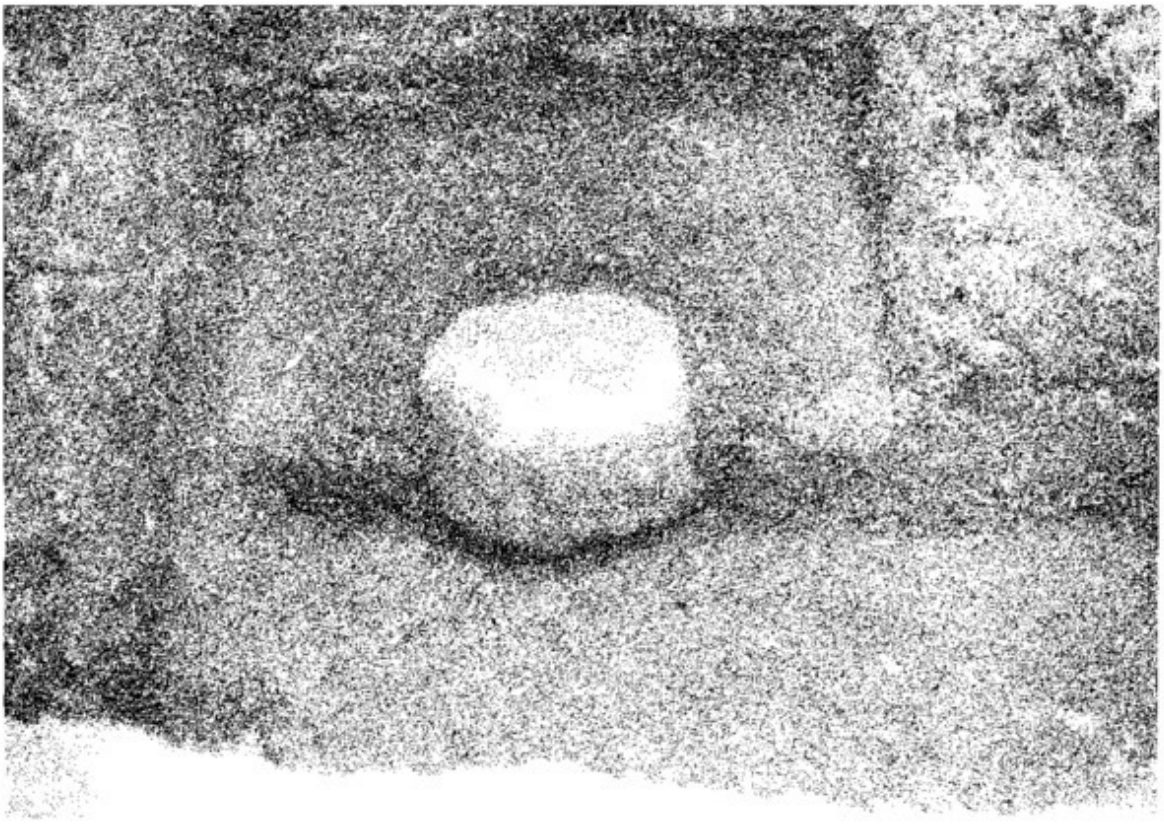
2　溝ＳＤ16309弥生土器出土状況



4　土壙ＳＫ16308石剣出土状況

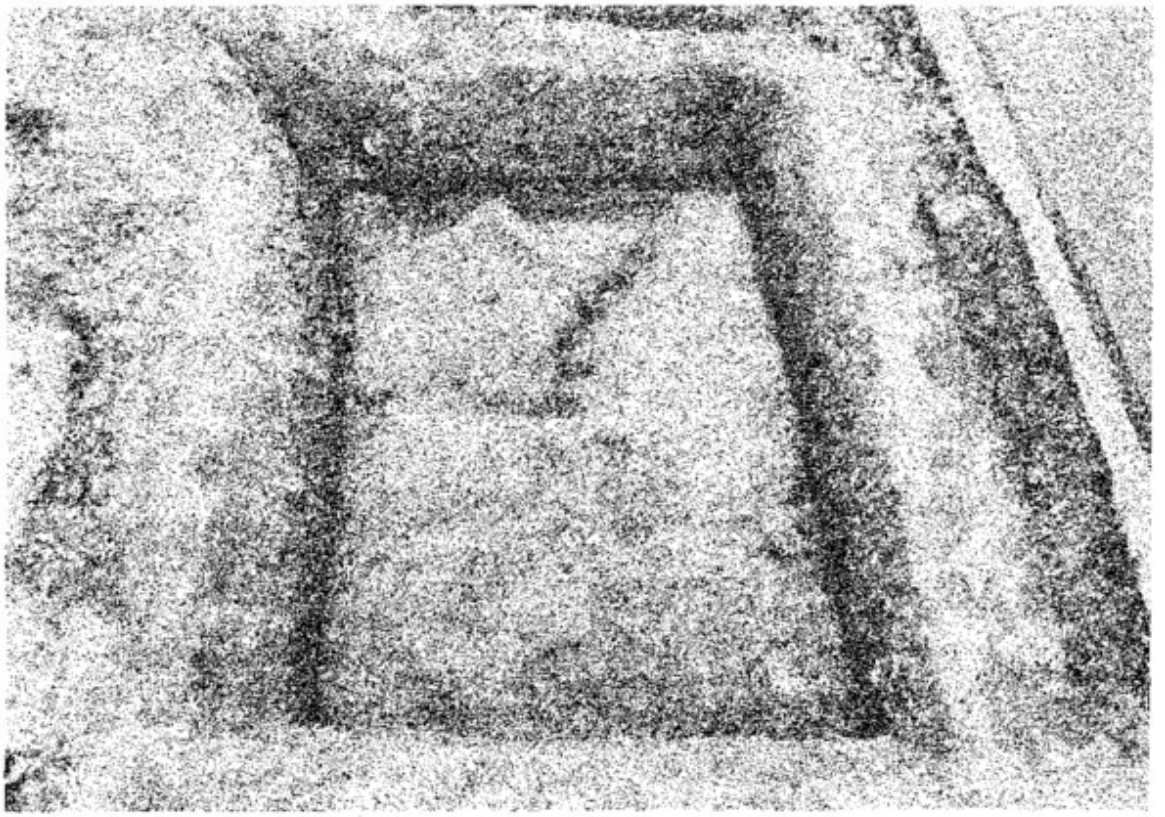


1　土壙SA16303試掘9トレンチ（東から）



2　試掘9トレンチ出土ピットP16312礎石（北から）

1　調査地遠景（西から）



2　調査地全景（北から）

長岡京市文化財調査報告書　第15冊

発行日　昭和60年3月30日

編集・発行　長岡京市教育委員会

〒617　京都府長岡京市開田一丁目1番1号
電　話　075-921—2121

印　　刷　株式会社奈良明新社
奈良市橋本町36
電　話　0742—23—3131